

---

**学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD - 獣戦士の誓い -**

水川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD -  
獣戦士の誓い -

### 【Nコード】

N4932M

### 【作者名】

水川

### 【あらすじ】

某邪神がお遊びで適当な一般人の人格をコピーして異世界に放り込んだ。

オタクだった主人公は放り込まれた世界に愕然。

あまりに死亡率が高そうな世界に加えて、与えられた能力はただ1つ。

家とかお金とか過剰に用意してくれているから、何とかなるのか？  
何とかしないと死ぬだけだ。

こうなつたら意地でも生きてやる。  
そして主人公はこの世界で誓いを立てる。絶対に守る誓いを。

## プロローグ（前書き）

とうとう書いてしまいました。私の最初の作品です。  
いろいろ御見苦しいところもありますが、よろしく願います。

## プロローグ

プロローグ

「……………んあ！」

俺こと水川 司は目が覚めた。突然目が覚めることは自分としては珍しいことではない。

家族の足音や朝日で目が覚めることもよくある。

問題なのは突然目が覚めたことではなく、目の前が真っ暗なことである。

夜というわけでも、まだ目が慣れていないというわけでもアイマスクをしているというわけでもない。

ただ暗闇の中に自分の意識がポツンとある感じた。体の感覚は一応あるが、何も見えないのでよくわからない。

「夢だな、これは。」

そう決め付けそのまままた睡魔に身をゆだねようとして

「おやおや、また寝てもらっては困るよ。」

なにやら女性の声がした。

目を開けてみると、そこにはメガネをかけた黒いスーツの妖艶な美女がいた。

日本人じゃ比にならない爆乳の。

でもこれはまるで・・・なんて邪神・・・？

「デモンベイン関連ならエルザを希望します。エセルトレーダやクトウグア、ニトクリスでもOK。じゃ、おやすみなさい。」

といて俺はまた睡魔に身をゆだねようとした。

昨日『機神飛翔』寝る前にやったからかな〜、とか思いつつ・・・

「む！・・・そのまま寝るだけじゃ飽き足らず、よりもよって、まだアイツのほうがいいだって？

さすがのボクもちよつと不愉快だよ・・・。」

とか言つて、何やら指をパチンとならした。すると、

「あ〜ら、こんな乙女前に眠るなんて、これ誘ってるのね〜。いっただっきま〜す。」

.....野太い声がした。

確か同一人物設定があつたはずだが、口調が合わない。むしろ別の人物が思い当ってしまった.....目を開けてみると

ピンクのビキニパンツ一丁の筋肉向き向きの長髪だがスキンヘッドだかわからないモノがこちらを掴もうとしていた.....。

「うわ.....!!!!!! ちょー!? 待て!!! 声優つながりで

「もこれはイヤ！！！」

実際に見るとマジで叫んでしまった。旧恋姫で曹操とかが気絶したのも分かる気がした。それほどの衝撃があった。

メガネ爆乳美女のときに贅沢言わなければ、と本気で後悔した時だった……

「さて、目も覚めたようだし、説明しようか。」

本当にあのまま永眠するかと思った。あの後即座に土下座して謝って、なんとか美女姿になってもらった。

ん？プライド？そんなもんアノ前じゃ紙くず以下だ！！！初見であれはきつ過ぎるぞ！！！！

「君も知っているとと思うけど、ボクの名前は……ナイアでいいよ。司くん。」

「よろしくお願いします、ナイアさん。」

俺とナイアさんは今暗闇の空間に浮かんでいる。でも自分の姿とナイアさんの姿は見えるようにしてもらったので、それほど恐怖感を感じない。

「で、なんでナイアさんがここにいるんですか？それも一般人の俺

と話をするなんて。俺魔術とか超能力とか持ってないと思いますよ。」

「ああ、確かに君は一般人だよ。僕が君を選んだのは本当に偶然だよ。」

「じゃあ、なんで俺を？」

もしかして間違えて殺したから、なんてオチじゃないですよね！！！！！！」

最近よくある転生展開に恐怖を感じて、必死で質問する。

だって、確かに力をもらえるのはいいけど、今までの生活を全て、家族や友達、自分の住んでた家まで捨てていくのは辛すぎる。

「大丈夫大丈夫。君は死んでいないよ。その証拠にほら。」

ナイアさんが指さした方には、ベッドから起き上がる俺が見えた。そう、俺が起きるのが見えたんだ。

「よかった。大丈夫ですね。……………どういうことですか？なんで俺があそこにいるんですか？」

安心したのも束の間、即座に疑問が出てきてしまった。質問した声はすごく無機質だったと俺は思う。

「ここにいる君はあそこにいる君の分身なのさ。コピーとも言うかな。」

でも大丈夫。劣化とかそんなものはないよ。本当に分裂させたのさ。」



そうナイアさんは言った。

確かにこれなら俺が死んで家族を悲しませることもない。

でも、もう家族に会うことはできない、そもそもあの映像は本物なのか、騙されているんじゃないのか……そんな負のスパイラルに陥ろうとしていた。

「速い話が今の君は僕の都合で生み出された存在ってわけさ。

君が生まれた理由は、別世界に行ってもらったためだよ。ついでに言うなら、この映像は本物さ。さすがに人1人がいきなり世界から消えたらバランスが狂って、旧神にでも嗅ぎつけられたらやっかいだからね。」

「そうですか。え……それって、最近飽和状態になりつつあるテンプレ乙な話ですか？

というか、ナイアさんやはり邪神だったんですね。」

「メタ発言だけど、ぶっちゃけるとそうだね。」

それからボクは邪神だよ。だからこんなことをするのさ。」

ナイアさんが妖艶に笑いながら言う。

確かにあそこに俺がいる以上今の俺の居場所はあそこにはない。一応話の筋は通ってるし、大丈夫だろう。

断ってもそのまま飛ばされそうだし、やるしかないか……あきらめると言った方がいいかな。納得はまだできそうにないけど。

「はあ……分りましたよ。」

で、俺はどこに行けばいいんですか？それから力とかくれるんですよね？

戦闘系の世界だと即退場になりかねないので。」

「お。やる気になってくれたね。」

逝く場所は向こうに着いてから教えるよ。与えられる力は1つだよ。それももう決めてるからね。」

「ちょっと待ってください！行く場所はともかく力くらい選ばせてくださいよ！！」

しかも1つだけですか！？1つしかないんですから選ばせてくださいよ！！！！

それに、なんか字違ってませんでした！！??？」

「気にしない気にしない。」

場所は今流行りのリリカルやネギま、マブラヴではないことだけは教えてあげるよ。」

「ちょっとマイナー系で行こうと思ってるんだ。」

そんなことをのたまってくれたよこの邪神！

行く場所はともかく、力は選びたいよ！！

空を飛ぶとかすっごく憧れてるんだから。」

そこ！厨二乙とか言うな！！いいじゃないか、異能の力に憧れても！！！！

というかマイナー系ってなんだ？マイナーな漫画、アニメってこと？

「じゃあ、張り切って逝ってみよう！！」

戸籍とか住む場所とか大丈夫。ちゃんと用意しておくから。

家族はいないって設定だよ。いたらいろいろ面倒になるからね。

力のヒントもあげておくよ。ヒントは「ライダー」だよ。逝ってらっしゃい。」

「だから字イ絶対違ってるだろ！！2回も言いやがって！！」

なんだよ！死亡フラグ乱立世界っていう意味か！？

ふざける うわあああああああああああ………  
「。。。」

これもお決まりなのか、いきなり落下が始まった。

俺はUSSJのジュラシックパークを思い出しながら、意識を手放した。

## プロローグ（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

このプロローグは、いぶん前から考えていたのですが、どこの世界に逝かせるのかはずっと迷ってました。

学園黙示録の世界に決めたのは、仮面ライダーを介入させた作品を読んで、バシツと閃いてしまったからです。

更新は不定期になると思いますが、よろしく願います。

第一話 ヒントの「ライダー」って意味は間違っではなかった（前書き）

続けて投降します。正直ドキドキしています。よろしくお願いします。

## 第一話 ヒントの「ライダー」って意味は間違っではなかった

第一話 ヒントの「ライダー」って意味は間違っではなかった

あの邪神ことナイアさんに飛ばされてというか落とされて目が覚めたら知らない天井が見えた。

とりあえず言っておこう。

「知らない天井だ。」

妨害なく言えたことにちよつと感動してしまった自分がいた。

さて、転生ではなくトリップしたようだった。赤ん坊からやり直しではない。身体はちよつと縮んでるみたいだが。部屋を見回してみるとなにやら机の上に紙があった。ナイアさんからの手紙のようだ。そういえば、場所や能力は着いてから教えるって言ってたな。

『やあ、これを読んでいるということは無事着いたみたいだね。家は一軒家を用意させてもらったよ。』

お金も心配しなくていいよ。一緒に通帳がたくさんあるだろう。それ、みんな君の自由にしていいよ。お金はある程度減ったら自動で補充してくれるようになってるからね。

国や法的機関もばっちり納得させてるから税金とかも心配いららないよ。

と、一番大事なことを忘れていたよ。君が着いた世界を覚えておくよ。

この世界は「学園黙示録 high school of the dead」の世界だよ。

分かりやすく言えば日本版バイオハザードの世界だね。

▣

へ?.....

フリーズしてしまった。学園黙示録ってあのゾンビ漫画の.....?

もう一度手紙を読みなおした。ウソや冗談で言ってほしかった。しかし何度読んでもそうだった。

「ふっざけんなー！ー！ー！死亡フラグ乱立どころか生存フラグを立てなきゃならん世界かー！ー！ー！」

叫んだ俺は悪くない。

バイオハザード系の話でどうやって終われと？

あれって大体無事に逃げたしてクリアというエンディングだったがここは現実世界だ。

逃げたらおしまいというわけにはならないだろう。

しかもこの学園黙示録のゾンビ、たしか走ったぞ？ノロノロのゾンビじゃないんだぞ。しかも力とかすごい。

あれって人間の脳のリミッタ が外れていると思う。疑似的な北斗神拳奥義使ってる敵だ。人間の秘めた100パーセント使えるってやつ。

そんな相手に簡単に逃げられるわけないだろー！ー！

叫び疲れたので手紙の続きを読む。

『今は原作の5年くらい前かな？』

君は中学一年生になる前だよ。期間はタップリあるからしっかりと対策を取っておくんだね。ボクからのアドバイスだよ。

それからもう一つの大事なこと、君の力のことだけど、「変身能力」だよ。前に言ったヒントと合わせれば分かるよね？

とりあえず頑張ってボクを楽しませてくれたまえ。邪神の加護があらんことを。

ナイアより』

「変身能力」か。たしかヒントが「ライダー」だったから、「仮面ライダー」か？

昭和か平成かは分らんが、それだけでも充分ゾンビ相手にできるだろう。俺一人でも。

「何はともあれ、とりあえず変身してみますか。」

初めての異能の力に内心はドキドキワクワクしてたまらない。変身のポーズをとる。これはお約束でしょ。

ポーズは初期AGITだ！

「変身！！！」



身体がなんだかむず痒い気がする。身体の構成が変化しているのだろうか。

視点がかなり高くなった気がする。ドアよりも高いみたいだから2メートルくらいか？

変身が完了した。身体を見てみる。

「ホントに変身してる。すげー！ー！」

身体が変わっていた。腕や体が白というか灰色？になっていた。けどライダーっぽくない。

「なんで腕とか足とかプロテクターがないんだ？ベルトは一応あるな。ギルスの亜種か？？」

本来仮面ライダーであるなら強化スーツなり変化なりで身体が鎧のようなものに包まれるはずだ。

しかし、今の俺のからだは筋肉質の腕や足がむき出しの状態だ。

胸や腰にはプロテクターというより防具を着ているが、仮面ライダーというより古代の剣闘士みたいな格好だ。色は鎧から肌まで灰色だが。

「とりあえず鏡見てみるか。」

そうやって俺は鏡を探した。部屋にあったクローゼットの扉の内側に鏡があった。

それを見ると

「うおーーーーー！???」

またしても叫んでしまい、尻もちまでついてしまった。

牛の化け物がいたのである。

クローゼットの中に?いや違う鏡に、だ。

ミラーモンスターか!?とも思ったが音も何も聞こえない。鏡をもう一度見ると、灰色の二足歩行の牛の化け物が写っている。

俺の動きと鏡映しで動く。この牛は俺だと確信した。

「なんで?仮面ライダーじゃないのか?でもナイアさんの言ったことは……」

ちょっとしたパニックだった。

小さなころ見ていたヒーローになれる、という期待もあった分、分からなかった。考えても分からなかったので、とりあえず戻ることにした。

人間の体のイメージと気を緩めるようにしたら戻れた。

鏡で見たが、なんだか不思議なものだ。2メートル近くあった俺が一気に50センチ以上小さくなるんだから。

「もう一回変身してみるか。感覚掴んどかないといけないし。」

今度は掛け声なしで変身してみたが、無事にできた。

変身する意思があれば声なしでもできるみたいだ。

その時気づいたことがある。

鏡を見ながら変身したのだが、その時自分の顔になにやら模様が浮かんでいた。

その模様はなにやらオレンジ色の渦を巻いていたが、その変身時の状況と変身した後の体の色を見ると、仮面ライダーに出てくるあのものに似ていた。

さらに、全身一色で気づかなかったが、この牛の姿も見覚えがあった。

「オルフェノク？・・・ミノタウロス？」

自分の持った「変身能力」はオルフェノク、そして変身した姿は遊戯王で初期に海馬瀬人が使っていたキーカード「ミノタウロス」だった。

第一話 ヒントの「ライダー」って意味は間違っではなかった（後書き）

次回から本編に突入します。

**第二話 リアルで見るとすごいな ホントに（前書き）**

本編突入。そしていきなり原作キャラクターとの……

## 第二話 リアルで見るとすごいな ホントに

第二話 リアルで見るとすごいな ホントに

あれから五年たった。早いって？

いや、そうしないと準備とかで10話くらい本当にかかりそうだったから飛ばしたただけだ。準備期間の話は番外編でじっくりやる予定だぜ。ふふふ。

俺がナイアさんからもらった能力は「ミノタウロス・オルフェノク」への「変身能力」だった。ミノタウロスの怪力に加えて持っていた斧も自由に出し入れできるようになった。ただ、変身中にしかできないが。

斧の名前も「アックス・クラッシャー」にした。原作の攻撃技そのままだが、覚えやすくてピッタリだったからそれにした。

この「ミノタウロス」、正直言つて本気ですごかった。

遊戯王のカードゲームでは攻撃1700守備1000で初期でこそ強かったが、中盤から強いカードがどんどん出てきて完全に出番がなくなったモンスターである。だから俺もあまり期待してなかったが、「ミノタウロス」であると同時に「オルフェノク」なのである。パンチやキックがt超えの仮面ライダー555のライダーたちと渡り合える存在なのである。

加えて遊戯王でも「ゾンビ」というモンスターがいて、攻撃力は800だった。「人食い植物」とかも攻撃力800である。もしこの世界のゾンビも同じ強さだとすると、攻撃力800あれば人間を殺すのは容易であり、最低でもその倍以上攻撃力とそれを防ぐ防御力

を持つ「ミノタウロス」はまさに破格の強さであるということに気付いたのである。

変身中の身体能力も獣が混じっているせいかすさまじく、50メートルくらいかくく跳んでた。スタミナも恐ろしいほどあった。さすが人外……自分で言っても空しいよね、人じゃないって言ってるんだから。

中学の頃は二度目の学校生活をそれなりに楽しみながら能力の把握や家の要塞化などに費やした。

正直自分の姿がばれた後、集団の中で暮らせるとは思えない。唯でさえ日常が壊れて不安なところに俺という化け物が居れば迫害の対象になるか体のいいゾンビ駆除要員となるだろう。

負けるつもりはないが、それでも共に暮らしていくことは息が詰まる。それにゾンビたちよりも群れた人間の方が俺は怖い。狂った価値観は大勢が肯定すれば正しい価値観となる。それが人間の怖いところだ。歴史で言えば魔女狩りなんかそうだろう。

中学の部活は剣道部を選んだ。安直かもしれないが、武器を使うことや自分の間合いを把握すること、足運びなどミノタウロスのように役立つことが多かった。というか、中学では格闘技は剣道か柔道しかなかったのも理由だが。

その縁で原作の姉御キャラの「毒島冴子」に出会った。自分と同年だったが。

で、彼女の強さだがマジで強かった。俺はオルフェノク化のおかげか人間のときも身体能力がかなり上がっていた。その辺のアスリートよりもすごいだろう。しかし、そんな身体能力を持った俺を打ち負かしたのが彼女だった。純粋な力は俺が上だが、技術では彼女が

圧倒的上だった。彼女も自分と渡り合える相手がいなかったのか、時々模擬戦を強引にさせようとするのが部活での日常になった。おかげで勝率も俺が勝ち越す位までを3年間懸けてもっていった。互いの名前も呼ぶようになった。最初は俺も戸惑っていたが、慣れるとそうでもなくなった。

中学時代、他の原作キャラたちとは会わなかった。街中とかですれ違ってくるにはしたかもしれないが。

高校は当然藤見学園に進学した。冴子も同じく進学したし、特に問題もなかった。

しかしこの学校はかなりでかい。基本全寮制だから寄宿舎とがあり、生活スペースがある分広い。充分立て籠もることもできると思った。俺は定期的に家に帰れるようにバイクでの通学許可をもらった。最初中学校側はダメだといってきたが、家族がいなくて家の掃除と管理も兼ねて帰りたいと理由を話した。それでもダメだといわれたので理事会側に寄付金を積んだら条件付きでOKしてくれた。バイクの使用条件や外出する時の許可届を出すことなどだ。そのくらいなら全然問題ない。しかし、どの世界でもお金って大切だよな。ナイアさんにも感謝だな。

部活は最初剣道部には入らなかった。しかし冴子含め剣道部が恐いくらい勧誘してきたので掛け持ちの形なら、という条件で入った。入るのを渋った理由は部というか同好会を立ち上げた。それは「災害対策研究会」である。そう、いずれ起こるバイオハザードに備えてである。

といっても1人の同好会なので部室はもらえなかったが、校舎の端



に空き教室を借りられた。元々化学室だった教室みたいで水道とか通っていた。教室の隅にいろんなものを持ち込んで鍵付きロッカーに保管した。途中から冴子も入ってくれたので、存続の問題も解決した。

たぶん原作が始まるのは俺が三年の春のはずだから、それを前提に準備しておかないと。一年遅れたときはまた考えよう。

そんなこんなで原作開始を待ち構えていたんだが……ホントに始まつちやったよ、これ。放送は断末魔っていうの？まさにそれだった。校舎の中でも外でも、正直言つて外れてくれたほうがどんなに良かったかと思うような地獄絵図が繰り広げられている。

俺は即座に冴子と合流して木刀使つて蹴散らしていたんだが、正直現実逃避したくなる。目が覚めたら漫画の読みかけだった、なんてオチで終わつてほしいって真剣に思つてしまった。曲がりなりにも人を殺してるんだから……

「どうした？司。やはりこの惨状は厳しいか？」

冴子が気遣つてくれる。ホントにこの心遣いは涙が出るくらいうれしいね。

「ああ、正直きついな。でもお前を失うほうがもつと辛いよ。」

返事ついでに砂糖も吐いとく。

「それは。ますます死ねなくなつたな。」

微笑みながら言ってくれるその姿、こんな状況じゃなきゃ抱きしめてますよ、これー!!

余談だが、冴子と共に剣道の全国大会に出場し、2人揃って優勝を搔つ攫つたことがある。

おかげで学園でもかなり有名になって、冴子と俺は「夫婦侍めゆうだまむらい」や「侍夫婦さむらいふうふう」などという呼び名がついた。この呼び名はすごく恥ずかしかつたが、冴子は満更でもない顔をしていた。

前世では考えられなかつた充実感だつた………

あの後保健室に行つて鞠川先生たちと合流した。

その際、保健委員の石井を助けることができた。どうやら冴子と一緒に行動したおかげで原作より早く保健室に着き、助けることができたみたいだ。

そのまま職員室へ向かい原作キャラたちとの出会いを果たした。

生き残つたメンバー

バット装備 小室孝

モップ槍装備 宮本麗

釘打ち銃装備 平野コータ

ドリル装備 高城沙耶

木刀装備 毒島冴子

同じく木刀装備 俺こと水川司

点滴棒装備 石井一  
校医 鞠川静香

の8人である。石井が生き残ったので、もしかしたら宮本の彼氏も助かってるんじゃないかと思ったが、いない所を見るとやられたようだ。

そのまま職員室で小休憩をした後、バスで家族の安否を確認しに行くことに決まった。俺だけ単独行動してもいいけど、街の状況も確認しときたいしな。

次も原作どおりに階段の踊り場でゾンビに囲まれている生徒がいたので助けるついでに共に行動するようになった。それからちゃんと注意しておいた。

「首に巻いたタオルは外しといたほうがいいぞ。掴まれたらもうおしまいだからな。あとさすまた持ってる奴、ぶつけないように気をつける。ゾンビどもに気づかれるぞ。」

これで死亡フラグ折れたかな？それからゾンビって言葉にみんな何か言いたげだった。

まあ、現実を直視したくないのは分かるがな。

そのまま玄関まで辿り着き、俺と小室がこっそりゾンビの方へ行くことになった。しかしじっくり見てみると、こいつら腐ってないよな？なんであんなに簡単に首とか頭とか潰せるんだ？リミッターが外れたせいで体の細胞が耐えられなくて崩壊し始めてるのか？

そんな疑問を持ちながらゾンビたちを玄関から遠ざけたあと、扉を開いてみんなを外に出した。さすまた持った奴ももう出たし大丈夫

だn

「ゴンツッ！！」。

なんで！？？なんで音が！！！？

見るとなんと石井の持っていた点滴棒だった。失念していた。あの棒って結構長いし、安定させるため足が重くなってるんだった。さすがまたにばかり気をとられていたのが仇になった。

「走れ！！！」

小室がそう叫んだ。こうなったら一気にいくしかない。どんどんゾンビは集まってくるんだから。しかし、

「ゾンビってもうちょっとノロいのがデフォだろ！？なんでゾンビが速く走るかな！！？」

そう、前にも言ったがこの世界のゾンビは走るのだ。獲物を見つけるとかなりの速度で来るから脅威だ。ハイパーゾンビか？とも思えてしまう。

どうしても考えてしまうな……

「話すより走ってください！」

小室に叱られてしまった。

何とかバスに全員無事に辿り着けた。石井の奴も身を挺して鞠川先生と守ろうとしてたうちの奴だ、さっきの失点を取り返すように周りを助けながらバスまで向かった。平野の奴もバスから援護射撃

をしている。後方援護つてやつ、よく分かってるな。

鞠川先生がエンジンをかけようとしているが勝手が違うせいかなかなかからない。

ゾンビはどんどん増えてきている。早くしないと本気でやばいぞ、これ。

「もう出せるわよ!!」

先生からOKの合図。よし!いくぞ

「・・・つてくれ!」

来たよ・・・紫藤（疫病神）が。なんでここは原作どおりなのかな?かな?

小室と宮本が乗せるか乗せないで揉めてる。俺なら乗せんぞ、あいつは自分のためなら平気で生贄を捧げるからな。それにこのままじゃバスごとやられるぞ?

で、そんなことしている間に紫藤たちが乗り込んだ。あれ?足くじいて紫藤に見捨てられるやつがいなかったな。微妙に変わって来てるのか??

「先生!出してください!」

小室の合図でバスは動き出した。とりあえず一息つけるな。これだ

ぐわん!!

なにやら浮遊感を感じた。その後、

ガンっ！ガガンっ！！

続けてバスを揺らす振動と悲鳴、そして、

ドシャ                   ！！！！ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

！！！！！！！！

このバスの上下と左右が入れ替わった。

## 第二話 リアルで見るとすごいな ホントに（後書き）

いきなりオリジナル展開を入れました。無謀かもしれませんが、これもあり得ると思ったからです。

・ 次回、もう出てきます。戦闘描写、うまくいくといいですけど……

最後に、読んでいただきありがとうございます。



**第三話 あの時俺は誓ったんだ(前書き)**

すみません。

戦闘は次回でした。

ただ、ちょっとというか相当甘いシーンが……

### 第三話 あの時俺は誓ったんだ

第三話 俺はあの時誓ったんだ

Side - 冴子 -

小室君が紫藤たちを乗せるため出発を遅らせるつもりのような。たしかに人間としては正しい、だがそれだけの余裕がこちらにあるのだろうか。

紫藤は外面はいい。しかし、あまり良い感情がわからない相手だ。小室君と宮本君が揉めている間に紫藤たちは乗り込んできた。

宮本君は「後悔するわよ。」と言っていたが、私も同意見だと感じていた。紫藤にはなにやら胡散臭い違和感がある。

乗り込んだことで小室君が合図を出し、バスは発進した。とりあえず危機は脱したと私は思った。

しかし、甘かった。

突然の浮遊感、その後に振動、そして悲鳴と大音響と上下左右の變化。最後に利き腕の肩に激痛。

私はバスの中の状況を見て、信じたくなかった。

バスが横転したなんて。

まずい、まずい！このままでは 奴ら が集まってきて確実に全滅してしまう。どうすれば・・・！？

「冴子！！大丈夫か！？」

司の声でハツとした。彼の存在は他の誰よりも心強いとあらためて感じた時だった。加えて、殺意も感じた時だった。

S i d e - 司 -

冗談たる・・・まさかバスが横転するなんて。こんなの原作にないどころか全滅フラグまっしぐらじゃないか！！

正直横転した時はビビったが、咄嗟に座席に掴まったおかげで怪我は全くしてなかったみたいだ。オルフェノクの反射神経にも助けられたな。しかし、バスの中はかなりひどい有様だ。フロントガラス

なんか半分無くなってるし。

人間のほうは壁や座席に叩きつけられたものもいれば、割れたガラスで切ったのか血を流しているのもいる。

つて、鞠川先生は！！？運転席を確認したが、いない！！？？？まさか車外に投げ出され

「痛たたた・・・もうなんなのよ。」

なにやら俺の胸当たりから聞こえる。見てみると鞠方先生を俺が抱きしめていた。片手で座席を掴み、反対の手で先生を抱きしめている状態だ。

どうやら運転席から投げ出された時ちようど俺の方に飛ばされたらしい。なんとというタイミング。もし俺が居なかったら鞠川先生入口のバに叩きつけられて最悪死んでた可能性もあったよ・・・。

見たところ怪我とかなさそうだった。

しかしすごいポリウムだな。このまま堪能・・・ってそうじゃない！！

「冴子！！大丈夫か！？」

冴子の安否が気になる。受け身とかとれるだろうけど、さすがにこれは想定外のことだ。もしもことがあつたら・・・

「ああ、なんとか大丈夫だよ。司。」

声が聞こえた。良かった。とりあえず無事のようだ。

………と安心したと同時に、なにやら冷たい視線を感じた。

「ところで、なんで鞠川先生を抱きしめているのかな？」

冷たい視線に加え、冷たい言葉の発生源は冴子からだった。

こえー……！！！？ゾンビ生身で相手にするよりこえー……！！！！

つて、そんなギャグパートやってる場合じゃない！！！！

「これは俺も不本意の出来事だ！

それよりみんなを起こせ！早くしないと学校中のゾンビが集まってくるぞ！！！」

とにかくここから脱出しないと。

怪我人抱えて動けるほど、現状は甘くない。

「紫藤先生！？動けるならみんなを起こすの手伝ってください！」

紫藤が頭を押さえながら立ち上がるのを見た。大した怪我もしてないようだ。悪運の強い奴だな。

そのままくたばってくれたら、あの事故フラグ絶てたのに。

っ  
ておい!??

「どこ行くんですか!??そっちは外ですよ!??」

こいつ割れたフロントガラスから1人で逃げようとしてる。人間窮地に追いやられると馬脚を現すっていうけど、ホントだな。

「……………ちよつと外を見えます。あなたたちは彼らの救助をしてみてください。」

最もらしいこと言っているけど、今の間はなんだ!??

あなたの生い立ちと生き方原作知っている俺からすれば逃げる気満々の分かるぜ。

実際宮本留年させているしな。

「とにかく私たちだけでやろう。鞠川先生、起きて手伝ってください。」

「うん、分かったわ。このままでいたい気もしないでもないけど。」

冴子が鞠川先生に声をかけている。さすがだな。

「さつきとは後でじっくり聞くからな。」

俺に問い詰めることも忘れないのもさすがだな!!!><。

って、冴子の動きが何か不自然だ。

「冴子、腕か？」

「ふっ、情けないことだが、利き腕を脱臼したみたいだ。戦闘にも支障が出る。」

「脱臼だけか？ならこっちこい。嵌めてやるから。」

「ちょっと痛いぞ。」

ぐっ！

冴子の肩を嵌めてやった。こっぴつこっぴつ応急処置は高校で学んだ。いざという時のために、って本当に便利だね。

「んっ！！ すまない。どうやら問題ないようだ。ありがとう。」

これではみんなを起こして脱出すれば・・・

あ、ああああー！ー！わ、私は、私はこんなところで！ー！ー！  
ーくるな、くるな！ー！ー！

なにやら外から声が聞こえてきた。あれっでもしかして……？  
冴子と俺は互いに見つめ合った。そして以心伝心した。  
ヤバイ！！！！

「とにかく、みんなをバスの上にあげるぞ！満足に動けないやつも  
多みたいだしな。」

状況確認も必要だし。治療できる場所の確保だ。」

「分かった。私が上に行こう。司はみんなを持ち上げてくれ。先生  
は起こすのを。」

「分かったわ。」

横転したバスの天井は今窓になっている。そこを開けて冴子を外に  
出す。

そして鞠川先生が起こして動ける奴は自分で上がってもらい、起き  
られない奴は俺が掴んで上に押し出してやる。それを上で冴子が引  
つ張り出す。

その繰り返しでなんとか全員バスの上に出すことが出来たんだが・  
・



「状況は、・・・・・・・・・・・・・・・・最悪だな。」

バスの中からでもある程度気づいていたが、今このバスは数えるのも嫌になるゾンビの群れに囲まれている。

あれだけでかい音を出したんだ。それに反応したんだろう。校庭だけでなく、校舎や体育館からも集まってきてる。ざっと目算しても200以上はいるな。もつと増えていくだろう。

「さて、どうしようか。」

みんなに問いかけるが、誰も答えようとしない。

当然だろう。こんなゾンビの海を渡るなんて、生身の人間じゃできない。

おまけに怪我人多数。移動速度も激減してしまうだろう。

現在のメンバーの状況

バット装備 小室孝      バット無      全身に軽度の打撲      動きに難あり

モップ槍装備 宮本麗      槍無      気絶中

釘打ち銃装備 平野コータ      装備そのまま      鼻血      軽傷

ドリル装備 高城沙耶      装備そのまま      手の裂傷により流血

木刀装備 毒島冴子      装備そのまま      利き腕脱臼、のち治療

動きにそれほど問題なし

同じく木刀装備 俺こと水川司      木刀無      怪我なし

点滴棒装備 石井一      棒無      額の裂傷により流血

校医 鞠川静香      治療セットそのまま      怪我なし

他のメンバー　　骨折や気絶、ガラスによる裂傷など様々だが、命に別条はないみたい。戦闘および逃走に支障大

紫藤浩一　　逃亡のち死亡？

うん。駄目だなこりゃ。  
満身創痍でモンスターの大量から逃げ切れという状況だね。  
鞠川先生による治療も終わったが、まともに動ける人は半分以下だ。  
間違いなく食われて終わり。

「このまま待つてゾンビたちが別の音に反応して引くのを待つ、くらいか？」

「残念だけどそれも無理そうね。」

俺の意見に反対したのは高城だった。

「なんで？」

「ガソリンが漏れてきてるわ。このままじゃ引火する可能性だってある。」

今この場所はいつ爆発するか分からない爆弾よ。」

はい、前門の虎後門の狼に加えて、泣きっ面に蜂ってところですかね  
〜。

その言葉にみんなはさらに絶望の色を濃くする。

「ふざけんなー！なんでこんなことになったんだよ！あのまま学校にいればよかったんじゃないのかよ！！」

金髪の不良君が吠えています。乗ったのはあなたたちの判断でしょう。それにあなたたちを待たせいでもあるんですけどね。

なんでか俺敬語になってる。他人事だと敬語になっってしまうみたい。

「おい！！なんとか言えよ！！！」

小室に掴みかかるうとしているが

「やめなさい！こんなところで暴れたら落ちるわよ！ 奴ら バスの中にもいるのよ。」

もっと集まってくるわ！」

鞠川先生が止める。

そう、バスの中にもゾンビどもは押し寄せている状態だ。だから武器の回収ができなかったんだ。

まあ、声は抑えても抑えなくても、もうどうしようもない状態なんだけどね。窓からバスの中みたら、ゾンビどもが群がってるし。

しかし、どうしたもんかな。

「なあ、高城。これ切り抜ける策ってあるか？」

高城に聞いてみるが、

「 奴ら が多すぎてどうにもならないわね。」

しかも怪我人もいるこっちは確実に動きが鈍くなる。怪我人を見捨ててて囿にするなら生き残れると思うけど。」

「……………究極の選択だな。」

まともに走れるのは数人。他は叫んだ不良も含めて怪我人の足手まとい。動けない奴や気絶している奴をゾンビの海に投げ入れて食われているうちに逃げるってか。

助かって精神的にやばいことになるな、こりゃ。」

アレをやるしかないか。

まさか学校で、しかもいきなりやることになるとは思わなかったけど。」

俺は溜息を一つ、そして立って背筋を伸ばす。そして景気づけに携帯を取り出す。

そのとき、冴子が後ろから抱きついてきた。

「 戦う気だろ、あの姿で。」

「 当然だろ。今やらなくていつやるんだよ。」

冴子が心配してくれる。俺たちの様子に周りの目が集まる。

冴子は俺の「力」のことを知っている。

冴子が中二の時の原作の暴漢返り討ち事件が起こった。何時起こるか分からなかったので、気付いたのは冴子が何か思い詰めていたからだった。

その時に俺のことをばらした。

あの時の冴子は見ていらなかった。

学校では普通に振舞っていたが、俺との模擬戦の時、鬼気迫る表情をしていた。必死で戦って、我武者羅に動いて、何かを忘れたいようだった。

俺はオルフェノクになり

「俺は見ての通り化け物だ。

もし、お前がその衝動に耐えられなくなり無闇に振るうようになつたら、俺が止めてやる。本当の化け物の俺が、な。」と。

冴子が離れて行ってしまうことも思ったが、それでも話した。傷の舐め合いとも思えたが、そのくらいしか思いつかなかった。

冴子は忘れることはできなくても、何か吹っ切れたようだった。

さらに、こんな俺を冴子は受け入れてくれた。その時俺がどれだけ

うれしかったか。

いきなり異世界に放り込まれたことも、化け物的な力を入れたことも、うれしい反面、正直辛いものもあった。

自分は独りなんだと、ずっと感じていた。そんな俺を受け入れてくれた。

その時俺は誓った。

絶対に冴子を失わない！！

抱きついていた冴子に向き直る。

「お前、本当にいい女だよな。俺には勿体ないくらいだ。ホントに。」

「フ、私は尽くす女だから。私と共に歩んできた君を独りにする気なんてないよ。」

見つめ合う2人。

そして唇が重なり合う。

周りはいきなり始まったラヴシーンに呆然したり、真っ赤になったり、目を背けたり。ガン見してる奴もいるが……

「愛している冴子。必ずお前を守る。」

じゃ、ちよつと行ってくる。衝撃とか来るかもしれないから、気を付けてくれよ。」

「私もだ、司。あの時から守られているよ。」

もう止めはしない。君も気をつけてくれよ。」

冴子が離れる。俺は携帯をいじって曲を選ぶ。

入っている曲はナイアさんが贈ってくれたものだ。どうやら前の俺のパソコンデータをコピーしてくれたみたいだ。

この世界では仮面ライダーはあるが、まだクウガが始まったばかりだった。

その中で2曲を選び、再生リストに設定。

「ちよつと・・・何する気?」

高城が恐る恐る聞いてくる。

「何するって、こつするんだよ!!!」

バスから跳んで、ゾンビを踏みつける。そしてそいつを足場にまた跳ぶ。それを繰り返しゾンビの海を渡り切った。

「あいつ一人だけ逃げる気か!!!」

金髪が叫ぶ。

「司が私を置いていくわけないだろう。」

冴子、照れるぜ。そしてうれしいぜ。

ゾンビたちが俺の方を向く、そして徐々にこちらに向かってくる。

「さて、この曲は『Dead or Alive』っていうんだが、お前たちにあるのはDead or Deathだ！！死者はとつととご退場願うぜ！！」

携帯、音量MAXで開始！！

『ピピピピッ

』 Standing by

「変身

」 complete

曲の前に入っていた台詞に合わせて、俺は「変身」を遂げる。

2メートルを超える、骨のような灰色の白さを持った、牛の獣戦士。

『ミノタウロス・オルフェノク』に！！

イントロが始まる。いつ聴いても好きだな、この曲。めっちゃくちゃテンションあがるぜ。

バスの上のみんなが息を呑むのが分かる。でも冴子は呑んでないの



が分かる。

「サア！キナ！！アイテニナツテヤルゼ！！…！ザコドモ！…！」

さあ！蹂躪の始まりだ！…！

### 第三話 あの時俺は誓ったんだ（後書き）

とうとうやってしまいました。こんなに早期に変身を。

おまけに奴の運命は……

戦闘が終了したら、主人公の設定をあげる予定です。

一応戦闘の四話までできていますので、そんなに遅くはならない  
と思います。

読んでくださってありがとうございます。

#### 第四話 オルフェノクのカ(前書き)

戦闘描写うまくないと思いますけど、よろしく願いします。

高城沙耶の自分の呼び方、「私」ではなく「アタシ」だったので直しました。

## 第四話 オルフェノクの力

### 第四話 オルフェノクの力

S i d e - 沙耶 -

バスが横転して学園からも脱出できないなんて・・・この天才のアタシがこんなことも予想できないなんてね。

案の定、凄い音を立てたせいで学園中の 奴ら が来ちゃったみたいだし。先輩たちや鞠川先生がすぐに体勢を立て直してアタシたちをバスの上に乗せてくれたから一応は大丈夫だけど時間の問題ね。

上に出て気付いたわ。ガソリンの匂いにする。漏れてきてるわね。このままじゃいつ引火してもおかしくない。

周りは 奴ら の群れというか海。 奴ら に食われて死ぬか、爆発に巻き込まれて死ぬか、どっちがいいかって聞かれたら微妙ね。強行突破しようにもまともに戦えるのは3〜4人、アタシも走れるけど手怪我しちゃったから武器が掴みにくいし。

動ける数人が生き残るには、動けない人を 奴ら に放り込んで食われている間に逃げるといふ、本当に最後の手段。

この方法でも無事脱出できるか、というわけでもないし。

あ~~~~、アタシは天才なのよ！これくらいの窮地切り抜けられ

なくてどうするのよ!!

ずっと解決策を考えていると、いきなり水川先輩が立って携帯を弄りだした。

そして、その背中を毒島先輩が抱きしめた。

え？何やってるのよ、この2人。

って今度は2人見つめ合った!?

戦場のラブロマンスじゃあるまいs・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・キスしてる・・・・・・・・

あまりの急展開に天才のアタシもビックリしたわ。

2人が「侍夫婦」とか呼ばれているのは聞いたことあるけど、こんな光景は想像もできなかったわ。堅いイメージあるし・・・・・・・・

あまりの急展開に周りの人たちも某然つてところかしら。

その後、水川先輩は毒島先輩といくらか話した後、 奴ら の海に  
跳び込んだ!?

まさか自分が囿になるからお前は逃げるなんてことを毒島先輩と!  
!?

と、思いきや、水川先輩 奴ら を踏み台にして、 奴ら の海を  
渡りきつちやった。

すごい運動神経。 因幡の白兔ってこついうのを言うのかしら……

でもこれで先輩が 奴ら を引つ張って減らしてくれたら、アタシ  
たちの逃げられる可能性が出てきたわ！！

希望が出てきたのに、先輩は止まってこつちを向いた。

なんで？なんで逃げないの？

奴ら を引つ張ってくれば、そうすればみんな助かるかもしれ  
ないのに。

『ピピピ ピピッ』

「Standing by」

「変身」

「complete」

機械音と声が聞こえた。 続いてなにやら音楽が聞こえると同時に先  
輩の姿が歪んで見えた。

そして先輩の立っていた場所に………大きな白い化け物が  
立っていた。

さっきのキスシーン以上の衝撃に、アタシは言葉が出なかった。 あ

れは何……………。

S i d e . 司 .

へへ。変身するのは高城家くらいだと思っていたけど、まさかこんなに早くばらすことになるとはな。

この姿で大暴れするなんてしたことなかったから、どうなるかちょっと不安だけど。

しかし音楽に合わせて戦うの、めっちゃくちゃ燃えるな。

リアルでMAD動画みたいなのができるとは思わなかったぜ。

BGMは仮面ライダー555の「Dead or Alive」、OPも捨てがたいが戦闘中はこっちの方が好きだ。

あ、音楽流している携帯は専用の携帯入れに入れてある。私服刑事が拳銃を胸にしまうホルダーみたいなもの。

変身した時、服も一緒に変わっていたから部分的に残すことができるんじゃないか、ていろいろ試したら、できたんだよね、これが。何でもやってみるもんだね。

ゾンビどもが一斉に襲い掛かってくる。でも負けるつもりなんてないぜー！！

「オリアアアアア

！！」

ブーン！！

「アックス・クラッシャー」を一薙ぎすれば、それだけで10匹は吹き飛ぶ。

しかし斬った後からどんどん襲い掛かってくる。なら、さらに斬ればいい。

「マダマダ　　！」

ブーンブーンブーン！！

連続で斬りつける。ほとんど抵抗なく斬れてしまう。そしてゾンビどもは吹き飛ぶ。

上半身と下半身が分かれたもの、首が吹き飛ばされたもの、体ごと吹き飛ばされているものもいる。

ミノタウロスの怪力がすごいのか、ゾンビどもの防御が低いのか。だが、関係ねえ！

斬って斬って斬って斬って斬って！斬りまくる！！！！

「ガアアアアアア

！！！」



すでに斬ったゾンビは100匹を超えただろうか。途中から数えるのを止めたし。

曲は2番歌詞が終わったくらいだ。

灰色の俺の体は返り血でかなり赤黒くなっちゃっている。

さしずめ「ブラッディ・ミノタウロス」か？

なんだか倒せば倒すほど攻撃力が上がりそうなモンスターだな。

斬撃の包囲を抜けて、何匹か腕とかに噛み付いてきたが痛くもない。歯が立つどころか逆にゾンビどもの歯が折れてしまう始末。

やはりミノタウロスの防御力以下の攻撃力しかないみたいだ。実はちょっと不安だったが。

近づいてきたヤツを蹴り飛ばし、踏み潰す。「アックス・クラッシュ」を持ってない手で握りつぶす！

悪いがお前たちの仲間入りする気はないんでな。

冴子も待っているし、とっととあの世へ行ってくれ！

「ハアアアアアア

！！」

2曲合わせて10分もないのに、1曲終わった時点で7割は倒

せてしまったようだ。

次の曲はOPの「Justi・s」、これで終わらせる!!  
今の俺は誰にも止められねえぜ!!!

S i d e - 孝

目の前で起こっていることが信じられない。  
気絶している麗の重さを肩に感じならそう思う。

水川先輩が 奴ら の海を跳び越えたと思ったら、携帯で音楽をか  
けて.....

先輩がいた場所に怪物がいた。

全身白いというより灰色がかった、バイキングのような鎧兜に身を  
包んだ、巨大な怪物がいた。

明らかに 奴ら よりひとまわり以上でかい。

怪物は手に持った巨大な斧を振り回し薙ぎ払う。その一撃に 奴らの集団が吹き飛ばされ、四肢や胴体を斬られる。

あの数に物を言わせ襲いかかってくる 奴ら を相手に怪物は真っ向から挑んでいる。

あの凄まじい腕力を持つ 奴ら が掴みかかるが、紙くずのように吹き飛ばされる。 奴ら のそんな姿を見るなんて思いもよらなかった。

数の有利がまったく意味を成していない。 奴ら の歯は怪物の鎧や皮膚を貫くことができずに、返す刀の巨大な斧に切り裂かれる。巨大な手に握りつぶされ、足で蹴り飛ばされ、踏み潰される。時折聞こえる怪物の咆哮は、僕の心臓が震えるようだった。歓喜や興奮じゃなくて、恐怖で………

奴ら の数は見る見るうちに減っていく。

逆に、怪物は 奴ら の返り血でどんどん赤く染まっていった。

音楽が終わると共に、バスの周りにいた 奴ら はほとんど死体に

なつてしまった。

俺たちは助かったのか？嬉しいはずなのに、喜べない。

あれほどの力があれば 奴ら を倒すことなど簡単だったはずだ。  
永が死ぬこともなかったんじゃないのか？

みんなをもっとたくさん助けられたんじゃないのか？  
なんでもっと早く戦ってくれなかったんだ。

そんな思いが僕の中で渦巻いていた。

S i d e - 司 -

ふー、駆逐完了ってか？

10分程度とはいえ、本気で暴れたことなかったから、なんだか異様に興奮している。

体は返り血で染まって、染まってない場所の方が少ないくらいだ。

足元なんか、まさに血と臓物の海になっている。曼荼羅ってこういうのを言ったりするのかな？

しかし、何時までもこうして入られない。

いつガソリンに引火して冴子たちのいるバスが吹き飛ぶか分からないからな。

せっかくゾンビどもから助かったのに、爆発で死なれたら意味無し。

俺は「アックス・クラッシュヤー」に付いた血を振り払い、バスの方へ向く。

みんな息を呑んでいる。恐怖のあまり動けないのかもしれない。

そくだよな。化け物のゾンビたちを一方的に薙ぎ払う化け物がいるんだもんな。次は自分たちが殺されるのもって思っているのかもしれない。

俺はみんなに近づく。みんなは動こうとするが体が上手く反応しないようだ。

俺はバスに近づき言う。

「オイ、ハヤクシナイト、ガソリンニインカスルゾ。

ソレニマタ、ゾンビドモガ、アツマツテクルゾ。

テワケシテ、ケガニソヲオロシテ、イッタン、コウシャニ、ハコブカ？」

俺の言葉にハツとしたのか、みんなは各々の顔を見渡して様子を見ようとする。カタコトになってしまいが聞く分には問題ないだろう。

「よし、早く運びぞ。このままではせつかく助かった命を無駄にするぞ。」

冴子の声でみんな動き出す。

しかし、やはり俺を見る目は恐怖や畏怖など化け物を見る目がほとんどだ。

分かっていたけど、実際に見られると辛いな。

この集団でもやっていくのは難しいのかな？

#### 第四話 オルフェノクの力（後書き）

本当は歌詞も入れたかったのですが、どうも入れる間が難しく止めました。

変身後カタコトになっているのは、牛顔だと発音が難しいという設定です。

今回でストックがなくなってしまったので、次は遅くなると思います。

一区切りなので主人公設定をあげる予定です。

ばれたあとの事後処理って難しいです。

これからよろしくお願いします。

## 主人公人物設定（前書き）

設定です。

いろいろ追加、または変更していく予定です。

- ・ バイクの設定変更しました。16歳じゃ大型取れません・・・



## 主人公人物設定

主人公人物設定

? 名前

水川 司 (みずかわ つかさ)

介入時 12歳

原作開始時 17歳 誕生日が5月のため

身長 178センチ

体重 82キロ

本作の主人公で邪神ナイアによって一般人をコピーしたことによって生み出された。

いわば、母親は邪神になる。

イメージは「マジ恋」のガクトを垂れ目ぎみにした感じ。かなりがっしりとした体格である。

コピーの元になった当人は何も知らずに日常生活をしている。

? 性格

性格は義理堅く意外とマメで負けず嫌い。

受けた恩を忘れず、何らかの形で相手に返す事を心情としている。  
興味のないことには面倒くさがりになるが、興味のあることには手を抜かない。  
自分が仲間と判断した相手は基本見捨てない。さらに、守ると誓ったものには命懸けで守り抜く。  
逆に自分に害を与えると判断したものには容赦なく斬りすてる冷酷な一面も持っている。

嫌いなタイプは自分のことしか考えずに、相手の意見を否定することしかできない相手。

独り暮らしのため家事能力は意外と高い。

? 前世

コピーされた時の実際の年齢は21歳の大学生。

一時期は本屋や古本屋で数時間立ち読みをし、漫画だけでなく週刊誌から月刊誌、ライトノベルまで読破する、かなりのオタクだった。「学園黙示録」の原作も読破している。

気に入った漫画などの内容はかなり覚えておける。

また妖怪や神という概念を否定せず、日本の多神教を好いていて、寺社の参拝も趣味の一つになっていた。(日本は奉られる事によって、妖怪や人間も神や仏になれること)

? 介入後の設定

「学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD」

の世界に落とされた時は、原作開始の約5年前ということで中学生の12歳にされていた。

黙示録世界では家族はいないという設定で、家から貯金までナイアが過剰なまでに用意してくれた。

貯金を贅沢に使って、家を要塞化している。

中学の剣道部で原作キャラの「毒島冴子」と知り合う。

中学二年の時の暴漢返り討ち事件を切欠に、互いを深く信頼し合うようになる。

この時、自分を受け入れてくれた毒島冴子を絶対に守り抜くと誓う。信頼の始まりが、告白どころかほとんどプロポーズの言葉だったこともあって、2人の雰囲気は夫婦そのもの。

周りからは完全にカップルだと認識されている。

? 持っている資格・免許や技術

自動二輪中型免許（16歳になったときに速攻で取った）

危険物取扱乙種第4類（ガソリンなどの薬品の知識を得るため）

剣道全国大会優勝（高校生2年の時） 段は習得していない

? 邪神から与えられた力

オルフェノクへの変身能力

仮面ライダー555で登場した種族。

全身骨をイメージした灰色をしている。

一度死ぬことが覚醒のために必要だが、そのあたりは邪神が無視した。

細胞崩壊による短い寿命も無視されている。

「使徒再生」の能力も使える。

ミノタウロス・オルフェノク

身長〓約250センチ

体重〓約300キロ

パンチ力（通常）〓約8t

キック力（通常）〓約30t

走力〓100m/約9秒

ジャンプ力〓約50m

主人公 水川 司の変身できるオルフェノク。

その姿は遊戯王デュエルモンスターズの海馬瀬人が使っていたモンスター ミノタウロス であり、全身が灰色一色となっている。

戦闘や立ち姿のイメージはFateのバーサーカー（ヘラクレス）。  
斧剣「アックス・クラッシュヤー」を振り回し、敵を薙ぎ払う。

上半身の筋力が凄まじく、その巨体から繰り出される攻撃はまさに必殺。

その上半身を支えるための下半身の強さは上半身以上であり、キックの威力は3倍以上となっている。尽きることのないスタミナも脅威。

その巨体のあまり走力は仮面ライダーほどではない。（ライダーは大体100m/5秒前後）

しかし、人間からすれば巨体でありながら恐ろしいほどの瞬発力と機動力を持っている。（時速30〜40キロで走り続けられる）

#### 変身時の使用武器

アックス・クラッシャー

原作でもミノタウロスが使っていた剣と斧を合わせたような武器。

「使徒再生」の能力で生み出した。高威力でありながら、小回りが利き、片手でも扱える。

弱点として、リーチが若干短い。

?????

「使徒再生」で作り出した武器。「アックス・クラッシャー」の長所と短所を逆転させた。

未登場。

?????

とある人物からもらった武器。  
未登場。

?????

「使徒再生」で作りだした武器。高威力だが使用頻度は少ない。  
未登場。

続々追加予定

## 第五話 その後の説明と戦う理由（前書き）

設定に続き五話を投稿します。

しばらくは戦闘もなく、人間関係のグダグダとシリアスが続くと思います。

どうぞよろしくお願いします。

あと、最初に喋っている一かずと云うのは、保健室で助けた石井君です。

## 第五話 その後の説明と戦う理由

第五話 その後の説明と戦う理由

S i d e - かす -

あの後水川先輩？がバスの上の僕たちを降ろそうとした。

自分で降りられる人もいたけれど、結構な高さがあり怪我人を降ろすのは難しかったので先輩？が降ろした。

先輩に？マークが付いているのは、先輩が怪物のままだからだ。

僕たちの倍近く大きい。身長だけでも2メートルは超えている。歩くたびに地響きがする。

そんな姿をしているのが、僕を保健室で助けてくれた、奴らを圧倒した、水川先輩だったとはとても思えなかったからだ。

他のみんなも声も出さずに黙々と怪我人を運ぶ準備と 奴ら と戦闘が出来る準備をしている。

まだ 奴ら は校舎内に残っているだろう。落ち着いて休める場所を確保するためにも、危険だけど一度校舎に戻ることになった。

今先輩？は先行して使えそうな教室を確保しに行っている。

今の先輩？なら大丈夫だろう。

時折校舎から破壊音が聞こえてくることから、結構な数の 奴ら



が残っていたのだろう。

僕らは怪我人を連れて、正面玄関まで戻ってきた。周りにはまったく。奴らはいない。死体だけだ。このあたりも先輩？が倒してくれたようだ。

先輩？が戻ってきた。どうやら一階の化学室を確保したようだ。あそこなら水道もあるし、一階だからすぐに怪我人を運び込める。

校舎の一階にも 奴ら の気配はしなかった。

しかし、万が一があるので警戒はしてくれとのこと。

怪我人を化学室に運び込み、最後に先輩？が防火扉を開きバリケードにした。

やっと僕たちはあの絶体絶命から切り抜けられたのだ。

## S i d e - 静香

ふう。とりあえず助かったのかしら。

バスが引っくり返って、 奴ら に囲まれた時はどうしようかって思ってたわ。

それを水川君が怪物になって 奴ら をみんな倒して、バスから無事脱出できた。  
怪我人がたくさんいたけど、みんな無事に教室まで辿り着けて一休みしてるわ。

あれ？誰かいない気もするんだけど……誰も言わないし気のせいよね。

でも、本当にあれは水川君なのかしら？今でも信じられないわ。

人が噛まれたら 奴ら になっってしまうのも驚きだけど、人があんな怪物になれる方がもっと驚きよ。

しかも、普通に水川君は会話できるみたいだし。一体、彼は何者なのかしら……

「これからどうする？また戻ってくることになっちまったが。」

あ、水川君が元に戻って話し出したわ。

S i d e - 司 -

はあ、戦闘の熱気が冷めると途端に不安になるな。  
やっぱり俺って小心者なのかな。

戦闘中は倒すことしか考えてなかったしBGMでテンション上がっていたけど、終わると急に冷めてしまう。

一体俺は今後どうなってしまっただろうか。

案の定、みんなの俺を見る視線は恐怖や畏怖ばかりだ。目を合わせようとしない。

化学室に入った後、俺は変身を解いた。

しかし浴びた帰り血のせいで、制服はもうドロドロになっている。

正直気持ち悪くて仕方がないので、上着だけ脱いでゴミ箱に捨てた。後でシャワー浴びて着替えよう。いつそ風呂に入りたいな。

俺はみんなとは離れたところにいる。そばにいるのは冴子だけだ。この不安な気持ちの中で、冴子の存在はすごく心強い。

いつまでもウジウジ考えていられないし。切り出しますか。

「これからどうする？また戻ってくることになっちまったが。」

俺が問いかける。みんなはギクリとする。

やはりそう簡単に受け入れられることなんて無理か。

「先輩、それよりもさっきのあれ、一体なに？」

勇敢にも話に乗ってきたのは、やはり高城だった。学園一の才女だ  
けあるな。情報整理・分析は生きていくための基本だ。

「あれってというのは、これのことか？」

そういつて俺は「ミノタウロス・オルフェノク」に変身する。

みんなは息を呑むのに、高城は続けて質問してくる。

「ええ、それよ。それは一体なに。

私でもまったく見当がつかないわ。

奴ら と以上に分からないのよ。毒島先輩は知っているようだけ  
ど。」

俺は変身を解く。

「ああ、俺は冴子には話してある。

しかし、お前たちがこれを聞いてどうする？」

俺は高城に問いかける。

「チームである先輩の戦力の確認をしておく必要があるからよ。

先輩のような力があれば、これからも行動内容も変わってくる。」

「まあ、当然のことだな。」

ゾンビどもを圧倒できる存在は生存率を上げることが確実にできる。これからの行動内容も大きく変わってくる。

まあ、これも縁だ。話してやろう。

しかし、他言無用だぞ。知る者が増えて広まると碌な事が起きそうにないからな。

実験動物なんか御免だ。」

俺は高城たちに向き直る。

「あれは『ミノタウロス・オルフェノク』って俺は呼んでいる。」

『ミノタウロス』は神話とかで出てくる奴から付けた。

『オルフェノク』というのが変身した総称だ。

変身するとさつきも見たように圧倒的な力を発揮する。その力はプロレスラーを簡単に捻り殺せるだろう。」

簡単に捻り殺せる、この言葉でさつきの光景がみんなの頭に映っているだろう。

「なんでそんなものになれるの、先輩は？」

そんなものになれる人間なんて聞いたこともないわ。」

「そりゃそうだろう。」

この力は「人間の進化の可能性」と言われている。  
素質を持ったものが覚醒し、その進化に耐えられれば使いこなせる  
ことができる。

しかし大半の者はその進化に体が耐えられなくて死亡する。  
そのせいでこの力を使えるものは俺以外ないはずだ。」

仮面ライダー555で語られていた設定を話す。

オルフェノクの因子を残すためという設定もあるのだが、それを話  
すとオルフェノクの説明もしなくてはならなくなり、ややこしくな  
るのであえて言わないでおく。

「『ミノタウロス』はともかく、なんで『オルフェノク』という名  
前や力を説明できるの？」

それらは専門研究機関でも無い限り分からないことよ。」

「さすが鋭いな。」

ただ説明するだけでなく、その説明の出所についてくるとは。

悪いが、それは俺も知らん。俺もただ教えられただけだからな。

この力は俺が中学1年の時に表れた。それから俺はこの力を使いこ  
なすために、鍛錬を積んできた。」

「なら誰に教えてもらったの？」

「分からん。」

ただ手紙がポツンと置いてあっただけだ。それに従って、俺はこの身体の特性をみて鍛錬していったんだ。

もういいか？」

高城はまだ納得してないようだ。他のみんなも今言ったことを信じられないような顔だ。

「信じたくないなら信じなければいい。

俺だって全てを知っているわけじゃない。

どんな副作用があるか分かったもんじゃないんだ。」

「副作用？」

「そうだ。

ああ言ったものは大概なんらかの副作用があつたりするのがデフォだ。

実際俺は今めっちゃくちゃ腹がすいている。

どうも変身するとカロリーの消費がすさまじく速くなるようだな。それだけで済めばいいんだがな。」

その言葉に誰もが反応する。

「下手すれば寿命を縮めている可能性もあるからな。」

これにはみんなも黙る。

「さて、俺はちょっと着替えと飯探しに行ってくる。返り血で気持ち悪いし、腹が減って仕方ないんだ。

ちょうど飯時だしな。ついでに見回りもしてくる。

じゃ、ここは頼むぞ。」

俺は化学室を出て行くこととする。

「待ってください先輩。」

教室から出て行くこととする俺を小室が呼び止める。

「なんだ？

まだ聞きたいことがあるのか？」

「先輩は最初からその力を使えたはずですよね。

なんでもっと早く使わなかったんですか？

そうすれば、もっとたくさんの人を助けられたはずですよ。」



やはりそう来たか。

力を持たないものが力を持つものによく問いかける質問だ。

「なぜ早くから使わなかったか、という質問の答えは簡単だ。

俺が使いたくなかったからだ。」

## 第五話 その後の説明と戦う理由（後書き）

司は小室たちを結構冷たく突き離します。

そのあたりの説明や心情は次回で。

読んでいただき、ありがとございます。

## 第六話 持つもの 持たないもの（前書き）

今回は主人公 司の戦わなかった理由です。

かなり他のキャラクターが勝手なことを言ったりしますが、ご容赦ください。

アニメも2話まで放映されましたが、あの高城沙耶の脳天ドリル・・・あれは絶対トラウマものです。

原作よりもずっとリアルに、グロく表現されていたと私は思いました。

## 第六話 持つもの 持たないもの

第六話 持つもの 持たないもの、

どうしてももっと早くから変身してみんなを助けなかったのか、そう  
小室に聞かれた俺は、

「なぜ早くから使わなかったか、という質問の答えは簡単だ。

俺が使いたくなかったからだ。」

こう答えた。

この答えに室内は静まりかえった。

「なんでですかー！」

なんで使いたくなかったんですか！！！！

それだけの力を持つてるのに！！

なぜ！！！！！！！！！！

小室がキレたように怒鳴る。

こんな世界になりながら、人間としての価値観を捨ててないのは美德になるな。  
時には欠点にもなるが。

「恐いからな。」

俺は率直に答えた。

「何言ってるんですか！！」

奴らを簡単に吹き飛ばしておいて、今更何が恐いって言うんですか！！

あんたがもつとは早くから戦っていれば永だってもしかしたら……  
……

これは親友を失ったこと、自分で殺めたこと、幼馴染のこと、そんな今まで抱え込んでいた不満が爆発したってところかな。

さっきまで俺のこと「先輩」って言ってたのが、「あんた」になっ  
てるし。

まあ、この騒ぎが始まって2〜3時間くらいしか経っていないから、  
心の整理がしていないのだろう。

元々起こることを予期していた俺たちと違ってな……

でも、俺も言わしてもらおうよ。自分勝手がすぎる奴は嫌いだから。

「誰がゾンビどもが恐いって言った？」

俺が恐いのは人間だよ。

正確には『群れた人間』だな。」

この答えに小室は言葉が出てこない。おそらく分からないのだろう。

「な、なんで……」

「それは自分で考えな。」

中世において行われた魔女狩り、それはいったいなぜ起こったのか。これヒント。

じゃ、今度こそ行くから。」

「待て、司。」

私も行こう。」

冴子も行くと言ってくる。まあ、冴子なら大丈夫だろう。

最も何かあっても俺がそうさせないがな。

「そか、じゃ行くか。」

俺は冴子と一緒に化学室を出る。

さて、こいつらはどんな答えを出してくるのかな。

最悪敵対することになるかもな。  
俺はどこぞの赤い正義の味方じゃねえんだよ。

S i d e - 沙耶 -

先輩の説明、一応筋は通ってる、でも納得はしてないわ。  
何か隠しているのは確かだね。  
副作用の件もどうかしら。

でも、先輩のおかげでアタシたちが助かったのは事実。  
今は先輩のことよりもこれからのことを考えるべきね。  
先輩がアタシたちの味方であり、同行してくれる限り生存率がグン  
と上がることは間違いないわ。  
奴ら がまったく相手になってなかったし。

それにしても先輩の早くから戦わなかった理由が、『群れた人間が  
怖い』か……  
あの言葉は今後の行動にも注意が必要になってくるわね。



「先輩のことはとりあえず終わり。これからのことを考えないと。」

小室、あなたはどうする気？」

いきなり話を振られて悩んでいた小室はうつろたえている。

「え？……いきなり言われても、麗はまだ起きないし。」

「起こしなさい、もう大丈夫でしょ。」

これからの方針決めるくらいしとかなないと、何もできないわよ。

学園から脱出するのか、立て籠もるのか、今日行動するのか、もう休むのか。」

「そういうことは先輩たちが帰ってきてからの方がいいんじゃない？」

「あんだ、さっき先輩から何を聞いてたの？」

『群れた人間』っていうのは、アタシたちも含まれてんのよ。」

アタシの言葉に小室はまた呆然とする。

「どう言うことだよ。」

なんで先輩が俺たちを恐がんなきゃならないんだよ。

先輩なら俺たちが束になっても敵わないのに。」

「それはね……」

「ねえ、変じゃない。」

突然アタシの話に割り込んできたやつがいた。

「そもそも、なんでいきなりあんな 奴ら が出てくるの？」

ああいう 奴ら が出てくるには必ず原因があるはずなんだ。

その原因は、映画とかじゃ 奴ら の親玉がいて、そいつが振り撒いた何かだったりするんだよ。

解決するにはその親玉を倒すしかないんだ。

それで親玉を倒せば、みんなもすべて元通りになる。 奴ら に

なつた人間もみんな、みんな。

もし、先輩がその親玉なら、僕らでなんとかしなくちゃいけないじゃないかな。」

後からバスに乗り込んできた長めの黒髪をした根暗っぽい奴が言い出した。

この言葉に周りの連中もざわめき始める。

一刻も早くこの地獄から出たい。

それができるかもしれない。

その原因がすぐそばにある、それを倒せば自分たちは救われる。

助けてくれたことも忘れて、そんな悪魔の言葉に耳を傾けている。考える余裕もないのだろうか。

そんなことをしてしまえば、後は流されるまま、ただ墮ちるだけだろつ。

事態は好転するどころか……………

先輩を殺すだけで全て終わる？

どごその映画じゃあるまいし、そんな単純なことでは済まないのはちょっと考えればわかるはず。

でもそれすらも考えようとせずただ周囲に流されるままやろうとしている。

ただ自分たちが助かりたい一心で。

「……………これが先輩の言った意味よ。」

もし先輩が最初から助けていれば、大勢の人間がこういった行動をとったかもしれないのよ。

先輩の言ってたヒントの魔女狩り。

あれってね、教会の権力を拡大させるためとか、共通の敵を作って世の中の恨みを向けることで社会の安定を図ろうとしたってというのが本当の意味だったりするのよ。

そんな魔女の位置に先輩がなるってことなのよ。」

周囲の状況と私の言葉に小室が考え込む。

「でも、先輩ならそんな相手……」

「水川先輩は大丈夫でも毒島先輩はどうかしら？」

家族とかはどうかしら？」

ああいった思想はね、理由があれば誰でも被害は及ぶわ。ただ仲がよかったって言うだけでもね。」

小室は黙り込んでしまう。

しかし、放っておいたら本気で先輩を倒しに行きそうね。

………返り討ちになるのが関の山  
でしょうけど……

たぶん襲い掛かってくる相手は人間でも容赦しないわね、先輩は。

最悪アタシたちも同類とみなされて皆殺しに………

そんなことを思っていると、

ド

ン

突然の爆発と衝撃が教室を揺らした。

「な、なんだ!?!」

「爆発!?!?!?!」

「きゃー!?!?!?!?!」

みんなもビククリして慌てふためいている。

凄い衝撃だったけど、棚とかが倒れるほどでもなかったわね。

おそらくあの爆発は、

「どうやら、バスの漏れたガソリンに引火したみたいね。

あと30分も遅ければ、アタシたちも一緒に死んでたわね。

で、そんな私たちを助けてくれた先輩をあんなたちは殺しに行くの?」

私の言葉に金髪が反論する。

「でも、あいつさえ倒せば全部元に・・・」

「本気いや、正気で言ってる??」

そんな単純なことで終わるはずないわ。

世界中で同じことが起こってるのよ。先輩一人でどうこうできるレベルじゃないわ。

それに、あんたたちの理論は穴だらけどころか柱さえ立ってないわ。何を証拠にそんなと言えるの？

ただ映画のことを先輩に当てはめただけじゃない。行き当たりばったりもいいとこだわ。」

「うっせー！ー！じゃあ、どうするって言うんだよ！ー！」

「それを今から話合っつんでしょ。

とっくと話し始めるわよ。

気絶している奴、起こしなさい。

小室も宮本を起こす。

ほら、とっくと。」

アタシたちはこれからどうするかの話を、ようやく始めた。

S i d e - 司 -

へー、俺を体よく利用するくらいは考えていたけど、本当に俺を殺そうと考える奴も出てくるとは……

こりゃ、原作がどうとかもう無視して、早々に別行動とった方がいいのかな??

俺はそんなことを考えながら、冴子と共に壊れた学園を歩く……



## 第六話 持つもの 持たないもの（後書き）

まだしばらく学校での準備編が続くとも思います。

小室孝は結構感情で動くタイプなので、司に突っかかってみました。司が犯人じゃないかって示唆したのは、原作で高城の家に潜り込んで手引きをした黒上くんです。原作でも一刻も早く安全を確保したい行動をとっていたので、こうしてみま

これからもよろしくお願いします。

**第七話 化学室から出た2人は？ 修正版（前書き）**

前回の七話を書き直したので、投稿します。前回の分はしばらくしたら削除する予定です。

今8話を書いているのですが、思ったより時間がかかりそうなので、同時投稿する予定だった修正版を先に投稿します。

## 第七話 化学室から出た2人は？ 修正版

第七話 化学室から出た2人は？

S i d e - 司 -

化学室から出た冴子と俺は寄宿舍へ向かっていた時、外からバスの爆発音を聞いた。

「凄い音だったな。」

もう少し遅かったら、あれに巻き込まれていたのか。冗談じゃないな。」

冴子がバスの爆発音を聞き、俺に話しかけてくる。

今俺たちは校舎内を通らず、校庭から寄宿舍へ向かっていた。まだ校舎内のゾンビどもはたくさん残っている。

最初、寄宿舍への通り道にいるものだけ倒していた。冴子は木刀で俺は先ほど用具入れから拝借した箒で、だ。1〜2匹の時は生身で倒していたが、それ以上になると変身して一気に倒している。

しかし、倒した時の音でまた寄ってくるのでなかなか終わらず、途中で面倒になって外に逃げた。そして校庭から直接行くことにした。部室までの通り道だけでも掃討するのは時間がかかりそうなので、まず食事と武器・衣服の調達を済ましてしまう予定だ。

「あの爆音のせいでゾンビどもが校庭に集まってくるだろう。」

動いてくれてたほうが音で把握しやすいし、そのまま火に近づいて燃えてくれれば手間も省ける。

それから、さつき化学室のあいづらが面白いこと言ってたぜ。俺がゾンビどもの親玉で、俺を殺せば全部元通りなんだと。」

確かにそんな映画あったけど、エイリアンみたいな敵だったはずだ。バイオハザードの場合はそんな簡単に解決しないっての。

高城が言っていたように、明確な終わりは感染する相手が居なくなるくらいじゃないか？

なぜ高城たちの会話内容を知っているのかと言うと、オルフェノクになれるようになって聴覚も異常に発達しているからだ。化学室の会話も丸聞こえだ。

盗聴器要らずで経済的。意識すれば切り替えができるので、頭痛や精神的に悩まされることもない。

それにしても、人間追い詰められると、何するか分からんのは本当の怖いところだな。

それが集団になるとさらに厄介だ。

「ほお・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それは面白い

ことを言っているのだな……………」

……………今の冴子も何するか分からんのが恐いところだ……………」

「……………大丈夫だ。」

小室や高城は常識をまだ持つてるよ。あの根暗っぽいのが言いだしで、金髪とかが乗っただけだ。

ちよつと爆発が起こつて冷静になつたみたいだけど。」

冴子に若干恐怖を感じつつも、フォローを入れ話す。

「そうか。」

しかし本当にこうなつてしまつたな。

司から話を聞いた時は、なにを世迷言を、と思つていたが、こう実際に起こると司と巡り合えて本当に良かったと思えるよ。

もし会わなければ、過去のことも含めて、わたしは壊れてしまつていたかもしれない。」

冴子にはオルフェノクのことだけでなく、近い未来、バイオハザードが起こることも話してある。オルフェノクに覚醒した時、こんな

世界になることを予知したという設定で。

最初はさすがに信じてくれなかったが、俺が家の要塞化や装備の購入などを本気でやっているのを見て、冴子ももしもの時に備えてくれるようになった。

おかげで、今回俺と冴子は迅速な行動と取ることができたんだ。

「俺としては、外れてほしかった未来なんだがな。

政府やマスコミに言っても、そんな映画や漫画みたいなことが起こることなんて信じてくれないだろうし。最悪、社会に無用な混乱を起こすキチガイとか言われてヤバいところに放りこまれそうだよ。

だから個人でできる範囲でしかないのさ。自分とその周りを守るくらいいな。

それよりも、化学室の奴らどうする？もうこのまま別れて行動するのも有りなんじゃないかって俺は思ってる。

ちよっとやりにくくはなるが。」

「移動手段はどうする気だ？」

「何のためにバイクの許可貰ったと思ってるんだよ。」

どうせ町は渋滞してるだろうし、バイクも積める容量増やして、ちよっとしたセーフティー・ボックスに改造してるしな。問題ない。」

俺と冴子は校庭を歩いて寄宿舍に向かいながら、これからの予定について話し合う。

「その辺は部室に行った時にでも話そう。今は寄宿舍へ行くのだから。」

「先に食堂の方に行っていていいか？なんか腹に入れたい。たしかギリギリ、パンの運送時間だったから、パンのトラックが来れば購買用のパンがあるはずだ。」

フフフ、選びたい放題食い放題。ちよつと夢だったぜ。」

「ずいぶんと庶民的な夢だな。」

冴子がちよつと呆れている。

「おう。俺は庶民だからな。加えてケチだ。」

「威張って言うことか？それと、庶民という貯金額じゃないだろう。」

俺たちはそんな他愛のない話をしながら寄宿舎の近くにある食堂に向かうことにした。

ここは全寮制の学校だが、食事の全てを学校内で賄っているわけではない。購買のパンなどは外部から運び入れてくる。

案外、そのときにゾンビが入ってきたのかもしれないな。……

さて、無事食堂近くまで来た。

小型のトラックが止まっているところを見ると、パンの搬入のために来たようだ。もう運び込まれているのか、まだ積んだままなのか・

その前に掃除しなきゃな。落ち着いて食べられない。

「見たところ2匹か。いくぞ、冴子。」

「ああ、司。」

ありゃ、業者の人だな。南無阿弥陀仏。

ああ嗚呼ああアアーーーー

あつっと言つ間に倒して、冴子がトラックに近づこうとする。それを、

「ちょっと待て。」

俺が止める。

「どうしたのだ？中身の確認をするのだから？」



「いや、こういう場合、まだトラックの中にいるか、コンテナの上に居たりするパターンがあるからな。そんなところから襲われて、やられた展開もあったんで。」

原作の空港であつた出来事を思い出す。不意のゾンビ襲撃は対応しきれないからな。

「なんで、俺がちよい変身するわ。で、見てみる。」

俺は変身してトラックの屋根を見る。

変身すれば2mをかるく超える身長なので、そのままトラックの上を見ることが出来る。

案の定居やがった………襲われてコンテナの上に逃げたが力尽きたってところだろう。

俺の心配性も捨てたもんじゃないな。

「イタヨ。ヒキズリオロシテ、ツブスヨ。」

あ啞ああ嗚呼————

ズルツ　　ドシャ　　ズリズリズリズリ　　グチャ！！

落として車からちよつと離れたところまで引つ張ってから踏み潰す。せめて食べる時くらい血生臭いのは勘弁してほしいからな。

他にも運転席やコンテナの中も確認したが、居なかった。

パンはどうやら運び込まれる前だったらしく、小さなコンテナ一杯に惣菜パンから菓子パンまで詰め込まれていた。

「安全確保したし、ここで食うか？コンテナの上にも座って。」

「ふむ。それもいいな。トラックの上で昼食なんて経験はなかなかできないものだしな。」

そういつて、まず冴子をコンテナの上にあげる。で、パンの入ったケースを3つほど上げる。

「あ、飲み物がないな。その自販機で買ってくる。先にパンを選んでくれ。」

で、冴子は何飲む？」

「ふむ、パンならやはり牛乳かな。金は後で返すよ。気をつけてな。」

「りよゝかい。」

俺はすぐそばの自動販売機でパック牛乳を2個買う。自動販売機の音でゾンビどもが来るかと思ったが、聞こえる範囲には居ないみたいだ。

ちなみに、自分の財布はちゃんと持って来ておいたから金はある。

「ほい、買ってきたぞ。パス。」

上にいる冴子に渡す。

「うむ、ありがとう。」

牛乳を2個渡し、俺も上に上がる。

それでパンを吟味する。

ふむふむ、人気高のカツサンドがこんなにあるとは。他にもサンドイッチやパイといったものまである。結構種類があるな。食堂派の俺からしたら初めて見る光景だ。

「わたしはカツサンドとアンパンをもらおう。司は？」

「俺は………カツサンドとサンドイッチとカレーパンと特製バーガーとブルーベリーパイとチョココロネとメロンパンとアンパンと………」

「ちょっと食べすぎじゃないか……？大丈夫なのか………  
……？」

「おう。変身したからすつごく腹へつて。

また変身して暴れるだろうから、食い溜めしておかないとな。カロリー補給カロリー補給。」

「まあ………大丈夫だろう。」

俺たち2人は壊れた学園で、購買で人気のパンを食べる。

うん、シユールだね。

空は雲が浮かんでいていつもと変わらないのに、屋上にゾンビの歩く姿が時々見えるし、呻き声も聞こえてくる。

こんなに穏やかに昼食を取っていると忘れてしまいそうだ。

「ふう、やっと一息つけたな。

司、これからの予定はどうする？

時間がとれる今決めておいてもいいと思うのだが。」

「そーだな。

化学室に戻るまでの予定として、まず寄宿舎の荷物の回収だな。

この時のために用意しておいた脱出用バッグを持ちだしたあと、俺の部屋へ行つて、そこで装備を整えよう。

冴子の刀とかも寄宿舎の部屋だろ？」

「そうだ。うむ、それがいいだろう。

はあ、しかし司の力、あんなに早くばれることになってしまつとは、私も予想外だったよ。」

そうなんだよね〜これからどうしようかね〜。

死ぬはずだった人が生き残ったりするのは問題ないとしても、まさかバスが横転して絶体絶命になって、あんなに早く正体をさらすことになるとは……………

約束もあるし、どうしよう……………

「まあ、あの状況じゃ変身しないと助からないのはほぼ確定だったからな。後悔はしてないよ？たぶん。」

「なぜ疑問系なんだ？」

「ふふふ。司、安心しろ。わたしはお前を置いていたりはしないぞ。ずっと君のそばにいる。」

「///////////////////////」

「じーんと俺はいまモーレッツに感動している!!」

「所で、横転した時の鞠川校医を抱きしめていたのは？」

「ここで蒸し返すのかよ!? いい雰囲気だったのに!!俺の感動を返せ!!」

「.....あれは本当に偶然だ。それに俺が掴まえてなかつたら先生叩きつけられて大怪我してた可能性もあったんだぞ? まあ、役得ではあったが.....」

「私の胸では満足しないのか？」

「普段から揉んでるような話し方するなよ。まだそういうところまで.....」

お腹が一杯になって緊張が緩んだせいか、痴話げんかのようになってしまう。

しかし、この会話は俺にとっても冴子にとっても大切なことだったのかもしれない。

世界が変わってしまった事、力が他人に知られてしまった事、これからの事、待ち受けている問題に挑むには必要な息抜きと切り替えだったと思う。

絶対に生き残って、また冴子と共に安心して日常を送れる場所に辿り着く、そんな決意をまた俺は固めた。

第七話 化学室から出た2人は？ 修正版（後書き）

前回のラグシーンはしばらくしたらまた使う予定です。  
小説内時間では……6時間〜半日後です。

アニメが始まって、原作とは微妙に違った展開がなされているので、  
漫画とアニメの設定を組み合わせるのが難しいです。  
平野コータの釘打ち銃に手製のサイトをつけたのは私的にHEETで  
した。

そんな彼の出番をポツポツ入れたいです……  
拙いところもありますが、どうぞよろしく願います。

## 第八話 迫るタイムリミット!? (前書き)

どうも遅くなりました。

寄宿舎の状況、化学室の話し合いなど何度も軌道修正していたら遅くなってしまいました。

次回投稿も遅くなるかもしれません。すみません。  
では、どうぞ。



## 第八話 迫るタイムリミット!?

第八話 迫るタイムリミット!?

司と冴子は痴話げんかをしつつも、これからの決意を確かにしていった。

そして、次の行動を取るべく動く。今はまだ食堂近くのコンテナの上にいる。

「寄宿舎はどうなっているのだろう。ここからじゃ、詳しい様子が分からない。」

司と冴子はすぐに持ち出せるよう着替えなどを入れた脱出用バックを準備している。

司の部屋に置いておけばいいのだが、通帳などはさすがに置いておけないので、寄宿舎に置いている。入れてある着替えやタオルも定期的に換える必要がある。

「だな。」

ゲームとかじゃ寄宿舎はゾンビの巣窟になっるのが王道なんだが、この学校で起こった時ほとんどの学生は校舎だったし、案外少ないかもな?」

「逃げ込んだ生徒が居て、その生徒が噛まれていたら?」

「巣窟になってるな……。」

ちょっと確認してみるよ。」

司は異常聴覚で、寄宿舎を探る。  
まずは女子寮から。

「んんん、んげ!？」

「どうしたのだ？」

「あゝゝ、もろ聞いちゃったよゝゝ。肉噛む音とか、骨を噛み砕く音とか、内臓引き摺り出す音とか。ぐちゃぐちゃ。」

さすがにこれはホラー映画のマニアでもなければトラウマものの音であつただろう。

「それは・・・女子寮なのか？」

冴子が恐る恐る聞く。

「そ。

という訳で、女子寮はダメでござーい。

かなりのゾンビが入り込んでるよ。ゲームの王道になってくれなくてもいいのにさ。

ん？

なんか最上階に、1、2・・・5人ほどいる。驚いた。これは生存者だ。」

「生存者が居るのか。助けるのか？」

「なんかゾンビどもが三階への階段の前あたりに集まってる。女子寮って階段ごとに扉があるのか？」

「ああ、防犯面のことを考えてか、それぞれの階段の前に檻のような防犯シャッターがついていてな。それを作動させたんだろつ。」

「女子寮って何気に豪華だな。立て籠もるのはいいのかもな。宿舎周りの柵とか男子寮にはないからな。でも、ここまで攻め入られると効果は薄い、か。」

まあ、周りのゾンビどもの駆逐くらいはしてもいいだろう。その後は責任とれん。学校を出るなら小室たちのこと教えとくくらいはいいだろう。」

「男子寮の方は？」

「どれどれ。」

うわ、こっちも女子と同じくゾンビが入り込んでるぜ。

生存者は………なしだ。

ギリギリ生きてるって奴は居るけど、もうじきゾンビ化する。数はこっちのほうがいい。」

男子寮は絶望、女子寮は若干ましという状況である。

女子寮というのは元々防犯面で男子より強固にしているケースが多い分、生存者がいたようだ。

「どちらを先に行く？男子寮か？」

「そうだな。男子寮へ行って速攻で荷物取ってきて、女子寮の方へ

行こう。

男子寮は俺ひとりで行くよ。5分で戻る。」

司は冴子を残して一人で行くという。そのことに冴子は不満げだ。

「おいおい、わたしを残して行くのか？それはつれないんじゃないのか？司。」

「いや、男子寮は安全地帯の確保が難しそうだから、俺ひとりの方が動きやすい。最初から変身して行ってくるから、5分で戻ってこれると思う。」

それに：脱出するとき是最悪壁をぶち抜いて出る事になるかもしれないから。」

冴子は納得したような顔をした。

「たしかにそれなら一人の方がいいな。だが、寄り道せずに戻ってきてくれよ。」

わたしをあまり独りにしないでくれ。」

「おう。」

あ、トイレとかが行きたくてもここ動かないでくれ。目を離してからの行動って仲間が死ぬ展開が多いから。お前を失うことになったら俺は生きてく目的ないぞ。

本当に5分で戻ってくるからな。」

「なら、計ってあげよう。腕時計を貸してくれ。」

「え……マジで…?」

司のしている腕時計はストップウォッチ機能が付いている。それを冴子がかもぎ取る。

「5分で戻ってくるのだろう?行くぞ、スタート。」

「早いぜ、おい!ああ、くそ!」

すぐさまコンテナから跳び下り「ミノタウロス・オルフェノク」に変身し、

「オリヤアアアアア

」!

強靭な脚力で跳び上がる。

「ミノタウロス・オルフェノク」状態でのジャンプ力は50m、当然水平方向の移動は50m以上となる。何度か地面を中継し、約20秒で男子寮の前に着いた。

だが、体重が300キロを超える巨体での着地は凄まじい音を伴い、

ズ

ン!

周りのゾンビどもを誘き寄せせる。

ああああアアアアああああああああ

アああガアガアああアああ

アアアアアア

群がってくるゾンビたち。

「ジャマスルナ。オマエタチニ、カマツテイル、ヨユウハナイ！」  
八工を追い払うかのように切り捨てるミノタウロス。ミノタウロスは寄宿舍の方へ走っていく、ゾンビたちを薙ぎ倒しながら。司は寄宿舍の入り口には向かわず自分の部屋の窓の下に来る。

司の部屋は三階にある。三年生は基本最上階の三階が与えられる。つまり、冴子の部屋も女子寮の三階にある。

ついて来たゾンビはすでに死体となっている。

そして、

ブウン

ズゴン！

三階の司の部屋の窓まで跳び上がり、壁に拳を叩き込み急停止。当然、壁に腕が突き刺さる。そのまま窓を開け、変身を解き侵入を果たす。部屋の窓は基本鍵をかけないようにしているので、窓を破る必要はない。

壁に大穴を開けたので、あまり変わらないかもしれないが、なんとも大胆な侵入方法だ。

部屋のドアの鍵を確認する。鍵は掛かっている。部屋は四人部屋だが、今は誰も居ない。ただ4人分の私物が乱雑においてあるだけだ。司は自分のベッドの下の脱出リュックを引っ張り出し、机の中から通帳やカードを取り出しリュックに入れる。着替えも追加し、ついでに読みかけの小説などの本類も一緒に入れる。さらに外出用カバンも取ってくる。こちらのカバンは普段から外出するときに使っているもので、中には折り畳み傘やライターといった、もしもの時に便利な道具がいろいろ入っている。それらを持ち、窓から跳び降りる。着地する前に再び変身し、急いで冴子の元へ向かう。

タイムリミットが迫る！！

## 化学室

「だから、寮とか学校の中で安全な所を探せばいいじゃないのか！？わざわざ街に戻らなくても！なんで小室たちに俺らまで付き合わなきゃいけないんだ？」

「そつだよ、どこかに立て籠もった方が。怪我人も居るんだし。」

「先輩がいれば 奴ら が幾らやってきても大丈夫だよ。」

学校に立て籠もることを主張する側。紫藤と一緒にバスに乗り込んできた連中が中心。

「僕たちは家族の安全を確かめるために動いたんだ。それにここに居てもいつまでも安全というわけじゃない。学校は未だに 奴らで溢れかえっているんだ。」

「近い順にみんなの家族を回る予定だったわ。バスはもう一台残ってるからそれを使えば。」

「父さんや母さん、無事かな…。」

学校を脱出して家族の安否を確認しに行きたい側。小室や目を覚ました宮本などの原作メンバーが中心。

この2つの話がまとまらず、ずっと続いている。

ある意味どちらの言い分も正しく、どちらもいつ死ぬかも分からないのが事実であるが。

「だ・か・ら！声落としなさい！ 奴ら に聞きつけられたら今度こそお終いよ。アタシたち。」

この延々とした同じことの繰り返しに、高城もキレ気味になる。

「あの、高城さんも声を抑えたほうが。」

「うっさい！デブヲタ！」

平野がそれをなだめる。このやり取りも続いている。



これだけ騒いでゾンビがここを襲わないのは、先ほどのバスの爆発でそちらに注意がいつてこの近辺から離れていったことと、司たちが近くにいたやつらを軒並み倒して進んでいったという2つの幸運が重なっていたからである。

「ねえ、ちょっと息抜きにテレビでも点けない？音量小さくすれば大丈夫よ、きつと。情報はどっちみち必要だし。」

鞠川校医の気の抜けた声に周りは顔を見合わせるが、このままでも決まりそうにないのでテレビを点けることにした。ちなみに、もう気絶している者はいない。怪我のため横になっている者はいるが。

テレビを点けると職員室で見た時と同じように報道規制が敷かれていた。ただ、世界中で起こっていて、尋常じゃないということは全員が分かった。

職員室で一度見たものは何も好転していない事に落胆し、それをはじめてみた者はそのニュースが信じられないようだった。

「何よこれ…？どういうこと？ここだけじゃなくて世界中で起こってるっていうの！！？一体どうなるの！？私たち！！」

「なおみ…。」

肩にタオルをかけていた生徒とその彼女が互いの身を寄せ合う。

「やはり何も変わっていないか。政府も具体的な対策は取れていな

い。鞠川先生。もう一つのバスのキーって持ってきてますか？」

「え？うん。」

どっちに乗るかわからなかったから両方持ってきたわよ。

燃えちゃったバスの鍵は刺したままにしちゃったから、一緒に燃えちゃったけど。」

「また職員室に向かうなんてことはしなくて良い。

釘はあるけどマガジンが少ないから戦闘はできるだけ避けて…ブツブツ…。」

テレビを見た平野が鞠川校医に鍵の有無を聞く。

もう一つのバスの鍵は持っているらしく、職員室にまた行く必要はない。

「おい！なんで脱出する必要があるんだよ。ここで立て籠もれば良いじゃんかよ！！！」

脱出する事に関して話していた平野に金髪が突っかかる。

「じゃあ聞くけど、どこに立て籠もるの？安全な場所なんてあるの？これだけ学校中に 奴ら がいるのよ。あてにしている寄宿舎とかもやられちゃってる可能性が高いの。

食料もどうするの？備蓄なんてあんまりないわよ。

第一、どうやってその安全な場所を探すの？」

金髪の叫びに高城が問いかける。

「んなもん、あいつがやりやいいんだよ。あいつなら 奴ら がい

くら襲い掛かってきても問題ねえ。

あいつが学校の 奴ら 全部ブッコロシテくれたら、もう安心じゃねえか。」

その言葉に誰もが希望を持つ。たしかに司が変身して戦えば学校の 奴ら の殲滅は時間はかかるが可能だ。それだけの力を持っている。そしてそれは、あの場であるの戦いを見たものなら誰でも信じられる事だろう。

「確かに先輩の力があれば、アタシたちの無事は約束されてるわね。でも……。」

高城はそううまくいくとは思っていない。

あの時司が言い残した言葉「魔女狩り」。それは、ただ異形は排斥されるという事だけなのであるうか。

化学室では高城の不安を他所に、司がみんなを救うことに希望を持ちはじめている……。

#### 食堂近くのコンテナ

「ただいま……！時間は……!?!?」

「4分44秒。時間どおりだ。さすが司。」

司は荷物を持って、猛スピードで冴子の元へ向かった。しかし、あまり音を立てすぎるとまたゾンビが寄ってきてしまうので、途中で変身を解いてからコンテナに近づく必要があった。そのため、かなりギリギリの時間になってしまった。

「あれだけ急がせておいて何を言う……ホントに焦ったんだぞ。しかし、縁起でもないタイムだな。444って。」

「はははは。無事で何よりだ。」

さて行くのか。ついでに言うなら、さらに下も44だぞ。」

「マジで縁起でもないな!？」

ちょっと休憩させてもらっても?」

「もう一仕事してからな。さあ。」

「へいへい。い。」

「あ、手土産にそのパンのケースも一つ持っていこうか。頼むぞ。」

「おまえ、絶対バスのこと根に持つてるだろー!」

自分の荷物を確保した司はパンのケースも抱え、冴子と共に今度は女子寮の方へ向かう。

女子寮にはまだ生存者が居る。そこでは何が起るのか。そして化学室にいる者たちはどう行動を起こすのか。

そんな世界で司と冴子は何を思い、生きていくのか。

## 第八話 迫るタイムリミット!? (後書き)

今回難産でした。

できるだけ自然な流れになるように持っていくことは難しいです。

あと、平野くんがまだあんまりしゃべってません。今回の台詞強引かもしれません。やはり、武器持って戦闘直前くらいが一番輝くのでしょうか。

アニメ3話観ましたが、あの紫藤、漫画では二流子悪党のように感じましたが、アニメでは最後まで生き残る参謀のように思えました。しかも、無駄にカッコいい。敵にするなら速攻で倒す必要があると感じました。

つたない展開ですが、どうかよろしくお願いします。

## 第九話 寄宿舍での予期せぬ出会い（前書き）

また修正とかするかもしれませんが、出来上がったので投稿します。  
化学室組は今回ありません。

生存者たちは・・・やってしまったとしかいえないかもです。

では、ごうごう。

## 第九話 寄宿舎での予期せぬ出会い

### 第九話 寄宿舎での予期せぬ出会い

化学室が不穩に空気になりつつある中、司と冴子は生存者のいるであろう女子寮へ向かう。

途中、司は思い出したように男子寮から取ってきた自分のリュックを漁りだす。

「おい、何をやってるんだ司？ゾンビたちが居ないとはいえ、立ち止まるのは危険だぞ。」

「いや、ちょっと思い出したんだ。このリュックに入れてた武器を、な。」

そう言って司が取り出したのは

全長30センチほどの銃だった。ぱつと見、大型の自動拳銃である。

「…それは本物かい？それとも改造したエアガンかい？」

冴子がおそろおそろ司に聞く。

「いや、これ銃じゃないんだ。組立てんと使えんから、ちょっと待って。」



そう言って司はリュックからさらに歪曲した長さ40センチほどの細い板と丈夫そうな紐を取り出し、先ほどの銃に組み込んだ。

「なるほど、確かに銃ではないな。しかし、これはゾンビに有効なのか？」

完成したそれは、クロスボウだった。大型のものではなく、小型で携帯に便利なピストルクロスボウである。

「これは80ポンドのピストル型クロスボウでな、有効射程は20mくらいしかないが、威力はかなりある。ネットじゃ対人殺傷は低いつて言われてるけど、ゾンビの頭をぶちぬく位は簡単にできちまうと思う。」

音もほとんどしないし、小型だから室内で使うならかなり便利だと思うぞ。」

「矢はあるのかい？」

「ああ、今5セット（60本）ほどある。部屋にはあんまり置いてなかったけど、部屋に行けばまだあるぞ。」

そう言ってすぐ取り出せるように外出用カバンの外ポケットに矢を入れる。

「後はこのパン、リュックに入れていいか？このまま持つていくのは邪魔すぎて。」

司は冴子に言われて持ってきたパンのケースを指す。

「ああ、そうだな。これから戦闘があるかもしれないのにこのままでは無理だな。」

周りを見張っているから早いとこ詰めてくれ。」

「りょくかい。」

冴子が周囲を警戒し、司は脱出用リュックにパンを詰める。匂いがついたりしないようにビニール袋にまとめてパンを入れてから、だ。

「パンは全部で15個くらいだな。よし、行くか！」

司はリュックを背負い、カバンを左肩に掛け、右手にクロスボウ、左手に箒棒という変な重装備。

「うむ、周囲にゾンビはまだいない。行こう。」

一方冴子は木刀のみという軽装備。

重装備と軽装備の2人は警戒しながら女子寮への道を進む。

## 女子寮前

「(やってきました女子寮です。)」

「(何をやっているんだ？司。)」

「(いや、ホントは叫びたいところだけど寄ってきちゃうから。)」

女子寮はまわりを頑丈な柵で囲まれているが、その周りにもゾンビがうろつろしている。門は空いていて、寮の入口も空いている。寮の敷地内にも少しいる。

声を抑えないとすぐにゾンビが声を聞いて襲い掛かってくるだろう。

「(どうやって入るつもりだ？門の中に入れてたとしても、ゾンビたちを避けながら寮の中で行動するのは困難だぞ。)」

「(まず、この寮を隔離しちまおう。門を閉めればそう易々と入ってはこれまい。)」

柵の中にいるのは5匹いない。門を一度閉めてしまえば、掃討は楽になるだろう。

しかし門の周りにはかなりのゾンビがうろついているので、閉めた後鍵をかける前に門に突っ込んでくるだろう。

「(さっそく、これを使ってみる。威力も確認しておきたいし。)」

司はピストル型クロスボウを冴子に見せて言う。

「(ちょっと警戒しながらついてきてくれ。)」

司たちは門から離れ、柵の外側の角の方へ向かう。そこにもゾンビ

が居る。距離は10mほど。矢をセットし、そいつに狙いをつけて引き金を引く。

パスッ

ほとんど音はせず、ゾンビの頭に矢が刺さる。矢は半分くらいまで頭に埋まっている。

そしてゾンビは膝をつき倒れた。その倒れた音を聞きつけ、他のゾンビたちが矢の刺さったゾンビの方へ向かっていく。

それを何回か繰り返し、門の周りのゾンビは離れていった。

「（こんな回りくどいことする必要があったのか？さっさと入って閉めてしまえば。）」

「（柵の内側にいたゾンビどもも門から離れていったから、これなら閉めた後、鍵もしっかりかけられる。鍵かけるのに手間取る可能性があったからな。）

変身して戦ったら、寮の中の奴らに見られてまた厄介なことになりそうだし。）」

「（確かに司の変身を見られると、あとあと面倒だな。とにかく門を閉めよう。その後、戦闘はどうする？）」

「（門を閉めた音でゾンビどもは寄ってくるだろう。けど、遠いから無視して非常階段へ行くぞ。あの階段なら一度入ってしまえばゾンビどもは来れない。）」

女子寮の非常階段は外付けだが、階段の入口に扉があり、簡単には入れないようになっている。（原作6巻のショッピングセンターのような非常階段）

2人は非常階段の手すりを越えて階段に辿り着く。

「（しかし、非常階段から中に入るには鍵が必要なんだが、それはどうするつもりだ？）」

「（無問題。鍵はほら、ここにある。）」

そう言って司は鍵の束を冴子に見せる。

「（どうしたのだ、それは？）」

「（寄付金積んだ時にコピーさせてもらった。いや、お金の力って偉大。）」

バイクだけでなくこんなところまで根回しをしていたようである。

「（……まさかとは思つが、それで女子寮に入りこんで覗きなんかを……。）」

冴子がすごく冷たい視線で司を見る。答え次第で赤い花が咲くだろう。

「（やってないやってない！！冴子がいるのにそんなことしない！！……）」

「（それは私が恐ろしいから、という意味か…？）」

「（違うって！！冴子を裏切るようなことはしないって意味だ！！）」

冴子が木刀を握りしめ構えるので、本気で焦る司。

司の答えに冴子は構えを解く。

「（よし、行こうか。三階だな。一階と二階はゾンビだけだな？非常階段近くには？）」

「（あれだけ怯えさせといてスル するのによ……）」

大丈夫だ。一階と二階はゾンビのみ。非常階段の近くにもいない。いきなり階段の扉が開いてワッってのはないよ。」

司は異常聴覚で再度確認した。生存者たちは部屋に立て籠もっていらしく、階段付近にもいない。

「（なら安心だな。行くぞ。）」

2人は三階へ向かって非常階段を昇る。

「司、鍵を。」

「おう、ってすまん。荷物多いから開けてくれるか？これがそうだ。」

あまりの重装備で細かい作業が難しいのか、鍵を冴子に渡す。

「うむ、心得た。」

開けるぞ、一応警戒を。」

キー

非常階段から扉を開けて女子寮内へ入る。

中はそれほど荒れていないが、階段の方から声が聞こえる。

嗚呼あああああ

という。

おそらく防犯シャッターに止められているゾンビである。

「司、生存者は？」

「えっと…反対の非常階段のほうだな。階段のゾンビの確認もする必要があるので会いに行ってみるか。冴子の部屋もそっこのほうだろ。」

「ああ、そうだ。あと階段のゾンビ、クロスボウで倒せそうなら頼む。」

「OK。」

司と冴子は寮内を歩く。そして階段が見えてきた。

嗚呼ああ唾嗚呼ああ

アアう

ああああああ

三匹のゾンビが防犯シャッターに群がっていた。それをクロスボウを使い、至近距離で仕留めていく。あっさりとは片付いた。

「あっけなかつたな。しかし80ポンドでもほぼ零距离ならすごい威力だな。頭に半分以上めり込んでたぜ。」

「ふむ。こういったゾンビ相手には銃を使うのがよく見られるが、クロスボウも意外と使えるのだな。」

「発射時、音がほとんどしないっていうのが一番有効かもな。」

階段のゾンビを片づけた2人は、冴子の部屋の方へ歩いていく。

「先に荷物をとってくるか？」

「いや、先に話を聞いておきたい。生存者に会おう。」

生存者に会うべく、2人は立て籠もっている部屋の前まで来る。

「しかし、どうやって入る？ぶち破るか？」ダイナミック！エントリー！』って叫びながら。」



「なんだそれは…？  
普通にノックして説明すればいいだろう。扉の脇にいればたとえ襲  
いかかられても大丈夫だ。」

「じゃ、さっそく。」

コンコンコン

「すいませ〜ん。今日こそ家賃払ってください〜い。」

ドタドタ！

ガタ！

ガサガサ！

「……………何を言ってるんだ…司…。」

「ほら反応した反応した〜。」

「いや〜、宅配便です〜す、と迷ったんだけどね。」

あまりの予想外の確認の仕方に部屋の中の人には反応に困り、冴子は  
頭を押さえている。

しばらくして。

「あの……誰か居るんですか？無事なんですか？」

部屋の中から声がする。声の質からして女子である。

「ああ、私は3年A組 毒島冴子だ。もう一人は同じクラスの水川司。」

荷物を取りにここまで来たんだ。非常階段から昇ってきたから、今のところゾンビどもは入ってきていないぞ。」

「…階段のところは…？」

「先ほど倒した。中に入れてもらえないか？購買のパンくらいならあるぞ。」

中でガタガタを音がする。バリケードを撤去しているのだろう。食料が在るといふのは大きい。トイレや洗面所で水分は取れても食料の確保はここでは難しい。

「どうぞ。」

先ほどの女生徒の音がする。

司は荷物と箒を置き、クロスボウを構える。冴子は少し戸惑いながら扉の脇にどく。

次の瞬間

バン！

ズダン！

サッ

「キャツ！」

「なんだ！！？」

「動くな！」

「うわ！」

扉を勢いよく開け、部屋の中に転がり込みクロスボウを構える司。その予想外の行動に驚く事しかできない生存者。呆れながらも強ちこの行動も間違っていないと思う冴子。

カオスである。

生存者たちはいきなりクロスボウを向けられて驚いたものがほとんどだった。内1人は反撃しようと構えていたが。

「驚かせてすまない。改めて自己紹介だ。私は3年A組毒島冴子だ。こっちが。」

「冴子の夫の水川司です。さっきはごめんね。」

「まだ結婚はしてないだろ。」

「ま・だ・ね。」

いきなりぶっ飛んだ自己紹介にさすがに戸惑い気味になる部屋の中の人たち。

「えっと、オレは1年D組の仙石アキラです。」

「私は1年A組の赤神りおんです。」

「1年D組 真理谷四郎だ。」

「私も1年D組佐久間雪です。」

「アタシは1年C組 宮内真夜。さつきはどういうつもりだ。あ？  
順番に自己紹介をしていく。最後の女生徒が反撃しようと思えたものである。」

「驚いた。男子が居るだけじゃなく、みんな一年生なのか。よく生き残れたな。」

「しかもここ三年の部屋だろ？何があつたんだ？」

司がそういった途端に暗い雰囲気になる。  
無理もないだろう。学校が地獄に変わってまだ3時間くらいしか経っていない。今まで必死に生き延びたのだろう。死んだ友達もいただろう。

「とりあえず、これ食えよ。購買から失敬してきたパンだ。腹が減つてたら何もできんぞ。」

司はそう言つてリュックからパンの入れた袋を取り出す。その出てきた食料で少しは暗い空気が払拭できたようだ。

「（しかし、この一年生ども、どっかで聞いた事のある名前だな。）  
」

そう思う司であった。その疑問は間違っていなかった。

## 第九話 寄宿舍での予期せぬ出会い（後書き）

生存者はあの漫画のキャラたちです。別作品で使おうかと思って読み込んでいたら登場させたくなくなってしまいました。

出てきたクロスボウは

ピストルクロスボウ 80A-1 というものです。

また設定を作ったときに部屋装備と共に上げる予定です。

勢いで書いたのでとんでもないことになってしまいそうです。

つたない作品ですが、これからもよろしく願いします。

## 第十話 繋がっていた世界（前書き）

大変遅くなって申し訳ありません。

十話を投稿します。

前回登場したのは、少年マガジンで連載中の「エデンの檻」の登場人物たちです。かなりのオリジナル設定なのでご容赦ください。今回も黙示録キャラたちが全く出ていません。

まだしばらく女子寮から出られそうにありません。

あと、修正前の七話削除しました。

## 第十話 繋がっていた世界

### 第十話 繋がっていた世界

女子寮のいた生存者たちは男子も含め皆一年生だった。

どうして一年生が男女入り混じってここで立て籠もっているのか、一体何があったのか、これからどうするつもりなのか、司たちが聞きたいことはいろいろあった。

しかし、まずはこちらを信用してもらうためにも先ほどトラックから失敬してきたパンを配った。空腹を満たすことで落ち着いてもらい、さらに警戒心を解いてもらう。

立て籠もっていた5人は思い思いのパンを取り食べていた。

現在は昼もとづくに過ぎた時間帯である。もしあの事件の後、ひたすら立て籠もっていたなら極度の緊張もあってかなりの空腹だったであろう。特に仙石は貪るように食っている。15個あったパンを5人に2個ずつ配ったのだが、仙石は足りないらしく残りの5個も食べようとしたが赤神と佐久間に止められていた。その後、2個以上食べない人を聞き、結局仙石は最初に配ったのも含めて計7個のパンをたいらげた。

一段落したところで冴子が事情を聞き始めた。

「君たちはどうしてここに？この寮で立て籠もっていたのか？」

言い難そうにしていたが、佐久間が答え始めた。

「私たちも最初は逃げようとしたんです。けど、正面玄関とかはもう化け物と学生で溢れかえっていてとても通れる状況ではありません



んでした。違うところから出ようということになったんですけど、正門とかもとても通れる状況じゃなくて。なら落ち着くまでどこかで隠れてようつてことになって、防犯設備の整っている女子寮に逃げ込んだんです。」

「なるほど、しかしなぜこんな状況に？立て籠もるなら門や扉もしつかり閉めておくだろう？なぜ三階まで追いつめられるような形に」

佐久間の答えを聞いた冴子は納得しながらもさらなる疑問を問うた。立て籠もるなら入口に鍵をかけバリケードを張ったりするのだが、ここは鍵すらされておらず、建物の中にまでゾンビの侵入を許している。

「バカが飛び出して行ったんだよ。」

冴子の疑問に今度は宮内が答えた。

「どついつことだ？」

「ああ、思い出すのも腹が立つ！」

冴子はどついつことなのか聞こうとするが、宮内は思い出すのも嫌な風になっている。他のみんなも表情が暗い、もしくはやるせない怒りを感じる。

「おそらくこの状況に耐えきれなくなったものが出て行ったんだろう。それも扉と門を開け放して。恐怖でおかしくなったのか、化け物どもを倒せるなんて思いあがったのか、はたまたパニックになったのか、そんなところだろう。」

宮内たちが言い難そうにしているのをみて、司が自分の予測を言う。

「極限状態におかれた人間は冷静な思考が出来なくなる。さらにそこに内乱でも起これば、避難所も簡単に殺戮の場になっちまう。避難所とかで必要なものや食料や水だけでなく、精神状態を保つ娯楽品とかだったりするんだぜ？ラジオとか聞いてるだけでも結構マシになるもんだ。」

司の答えに仙石たちは少し驚いた表情になる。

「？ どうした？」

「いや…その通りだったんで。あと、さっきと先輩の雰囲気全然違うんで、ちょっと変だなって思ってる。」

仙石が先ほどの司とのあまりに違うと言う。

「（う、まあさっきは悪ふざけしすぎだな。（ああ、あれは。」

「気にするな。さっきの司はちょっとふざけていただけだ。」

ここに来るまで何だかんだで気を張り詰めたままだったからな。安全が確保されたせいか、悪戯心が出たんだろう。司は意外と人をおちよくったりするのが好きだからな。」

「まあ、その、すまんかった。不謹慎だった。」

冴子が司を遮り説明を入れる。それに続いて司が謝る。

「そんな、頭下げないでください！先輩のおかげでこうして飯にあ

りつけたんですから。」

慌てたように仙石が言う。ほとんど閉じ込められていたところに貴重な食料を持ってきてくれたことは5人にとってかなり大きなことだったようである。

「それよりも、さっき司が言ったことは、だいたい当たっているのか？」

「はい。」

最初は私たちを含め20人以上の人が避難していたんです。最初は門も扉もすっかり閉めて、逃げてきた疲れのせいか大人しくしていったんですけど、些細な意見の違いから喧嘩が起こり、それがみんなを巻き込んだ暴動になってしまつて。包丁とかを振り回す人もいて

「

説明していた佐久間が口ごもる。それを赤神が引き継いで説明を続ける。

「…私たちはそんな中、三階にシャッターを下ろして避難したんですけど、誰かが正面入り口を開けて出て行つて、結局化け物にやられてしまったらしくて。さらに化け物たちが開け放した門や正面入り口から入ってきて、結局私たち以外の人はみんなやられちゃったみたいで。」

この説明を聞いて思い出したのか、宮内は不機嫌そうだった。

「中には混乱に乗じて女子を襲おうとした奴もいたし。まあ、アタシが蹴り飛ばしといたけどな。」

宮内は拳を握り締めて誇ったように言う。それを見た冴子は宮内に尋ねる。

「君は格闘技の経験があるのか？」

「ええ、ウチは空手の道場やってて、アタシはこれでも参段だよ。先輩たちこそそうだよ。『夫婦侍』なんだからな。」

「めおとざむらい？なんだよ、それ。」

聞き慣れない呼び名に仙石が首をかしげる。

「アキラくん。『夫婦侍』っていうのはね、剣道の全国大会男女それぞれで優勝した人たちの名称だよ。しかも2年連続でね。他にも『侍夫婦』っていうのもあるんだけど。」

毒島先輩と水川先輩はスポーツ界じゃ有名なんだよ。入学したときに聞いた事ない？」

「最初見たときはふざけた奴だったから人違いかと思ったが、その雰囲気からしたら本人みたいだな。」

赤神が説明し、宮内がにやけた様に言う。

「へー。すげー人がいたんだな、この学校。」

「アキラ君もバレー部じゃなかったけ？」

仙石の暢気な答えに佐久間が不思議に思う。

「先輩たちに聞いていいですか？なぜ今になってこの寮に？事件発生から二時間以上も経っているのに、今までどこにいたんですか？」

今まで黙々とパソコンを操作していた真理谷が司と冴子に問いかける。

「俺たちは最初、合流した生存者たちとバスで脱出するつもりだったんだけど、バスが横転しちまってな。みんな命辛々逃げてきた。他の奴は化学室で立て籠もってるよ。」

「じゃあ、前にした凄い音ってバスがひっくり返った音だったんですね！」

「じゃあ、ついさっきの爆発音はそのバスから漏れたガソリンにでも引火したのか。よく無事でしたね。」

司の答えに佐久間が驚き、真理谷が感想を述べる。

「しかし、なぜわざわざここに？化学室からここまでかなりあります。そんな危険を冒してまでここにくる理由なんてあるんですか？」

「ここには私の荷物を取りに着たんだよ。着替えとか武器とかを、な。それに司と一緒にだったからさほど難しくはなかったよ。ゾンビとの戦闘の基本は逃げる事だからね。」

「逃げること、ですか？」

続けた真理谷の質問に今後は冴子が答える。その答えが赤神はわか

らない様である。

「ゾンビってというのは、基本物量で攻めてくる。しかも掴まれたら噛まれておしまいだ。そんなのいちいち相手にしてられない。戦うなら安全地帯から狙撃して数を減らすのが有効だと思ってる。

ゲームと違って部屋を出たら安全ってわけじゃないんだ。遠距離から攻めるのが一番危険が少ない。だから、クロスボウと違って意外と有効だったりするんだぜ。」

「でも、ゲームじゃ銃で倒すのが基本ですよ？それに連射できるから結構倒せると思いますけど。」

「そもそもどうやって銃を手に入れるつもりだ？弾丸の補給も。ゲームと違って敵が落としたり、そこらに落ちてるわけじゃないんだぞ。」

「そうだ。さらに言うなら、音がすごく響くせいでかなり広範囲のゾンビまで呼び寄せてしまう。バンバン撃ってたら、あつという間に囲まれて終わりだ。

その点クロスボウならほとんど音がしないから、気付かれる可能性も少ない。

連射はできんがな。」

仙石がゲームでのセオリーを唱えるが銃や弾薬の入手の困難さを真理谷が指摘、さらに司がクロスボウの無音声の有利と連射の不利を説く。

「言われてみれば確かに。日本じゃ銃なんておいそれと手に入れないだろうしな。

でも、なんて先輩そんなもの持つてるんです？」

「趣味と同好会の備品を兼ねている。それで納得しておいてくれ。」  
仙石は銃の入手の困難に納得するが、司がクロスボウを今持っていることに疑問を抱いた。それを司はぶつた切るように説明した。

「ところで、君たちは全員知り合いなのか？クラスが違うものも居るようだが5人とも顔見知り以上に思えるのだが。」

冴子が仙石たち5人に抱いた印象からの疑問を尋ねる。

「私たちは同じ中学出身なんです。だから、みんな知り合いなんです。」

「どこの中学だ？」

「えっと、それは……。」

冴子の質問に佐久間がみんな同じ中学出身と答えるが、なぜかその中学校の名前を答えるのに言いよどむ。

「？ どうしたんだ？」

その不自然な言動に司も不思議がる。

「……………俺たちの中学は明協学園です。」

「明協学園？この辺りにあったか？冴子。」

「いや、私も記憶にない。」

仙石から中学校の名前を聞くが、司も冴子もこの辺りでは聞きなれない名前に悩む。

「横浜明協学園中等部。」

「ちょっと、真理谷くん！」

「物事は正確に伝えるべきだ。それに今更意味はないだろう。」

真理谷が正確な答えを言ったことに赤神が注意する。

「横浜！？そんなに遠くから来たのか。俺もさすがにそっちの方はよく知らなくて。」

「横浜明協……どこかで聞いたことがあるな。」

司は遠い所か来たことに驚いているが、冴子はその名前に何か引っかかっているようだ。

「他にも同じ中学から来た奴はいるのか？」

「いいえ、今年そこから来たのは僕たちだけです。」

司は他にも同じ中学出身の者がいないか聞くが、真理谷はこの5人だけだという。冴子はまだ悩んでいる。

「おい、冴子どうした？なんでそこまで悩むんだ？」

「その学校の名前は聞き覚えがあるんだ。一時期ニュースで話題に



ならなかったか？」

「え？いや、俺覚えてないな。」

冴子はニュースで明協学園の名前を聞いたというが、司は覚えてないという。

「旅客機行方不明事故。」

「え？」

「ああ、思い出した。そうだ、旅客機事故で乗っていた中学生の団体の学校の名前だ。飛行機が行方不明になったのに生存者がかなりの数いたことが話題になったんだ。」

また真理谷の答えに冴子は納得した。しかし、その答えに司は逆に引かなかった。最初この5人の名前を聞いたときに引かなかった違和感だ。

「まさか、君たちがその生存者なのか？」

そう冴子が答えると、仙石たちは頷いた。

「すまない。だから中学の名前を言いたくなかったんだな。いやな事を思い出させてしまった。」

「いえ、気にしないでください。もう終わった事ですから。」

冴子の謝罪に佐久間が暗い表情をして答えた。

「すぐに僕たちが対応できたのは、事故での飛行機の集団パニックを経験したからです。あの経験がなければ、化け物の餌食になっていたかもしれません。さんざんな修学旅行でしたけど。」

事故の際の経験が役に立ったと真理谷が答える。司は嫌な事を彼らに思い出させた事を悪いと思いながら、先ほどの違和感のことを考えていた。

「（仙石、赤神、佐久間、真理谷、宮内、こいつらは普通の学生だ。なぜか場慣れしてるような感じがしたのは、一度事故の経験があったからなのか。」

待てよ：仙石は悪ガキって感じた。赤神は見たところかなりしなやかな体をしている。運動部の経験がありそうだ。佐久間は大人しい感じ。真理谷は見るからのガリ勉秀才タイプ、宮内は空手ヤンキー。なんだか典型的な漫画の主人公メンバーって感じだな。

！！？

こいつら名前、確か仙石はアキラ、赤神はりおん。アキラはともかく「りおん」なんて名前はめずらしい。旅客機行方不明、生存者がかなりいた、飛行機で行く修学旅行、まさか！！！！）

「どうしたのだ、司？今度は君が悩み出したりして。」

司は引っかかりの答えかもしれないものに辿り着いた。しかし、それがもしそうならば、この世界はさらに複雑になってくるという事になる。冴子が司が悩んでいたのを不思議に思い声を掛けた。

「なあ、仙石たちに聞きたいことがあるんだけど、いいか？その事故のことなんだが。」

「司！彼らにこれ以上辛い事を思い出させるのはよくないぞ。」

司の質問を冴子は止めるように言う。

「いや、これは聞かせてほしいことなんだ。今後のためにも。」

仙石、おまえたちはその事故で太古の大地をサバイバルすることになったんじゃないのか？」

この質問に仙石たち5人は目を見開いた。しかしすぐにその動揺を隠した。冴子は見当違いの質問に首をかしげた。

「何を言ってるんですか先輩。そんなこと」

「絶滅動物や毒を持った木の実、友達を含めた人間通しの殺し合い。そんな中を生き残った。」

真理谷が反論しようとしたのを次なる言葉で遮る司。この言葉に5人はさすがに声を失った。

「おい、司。いい加減にしろ。一体なにを言ってるんで知ってるんですか？」え？」

冴子が止めさせようとするのを遮り、仙石が鋭い目をして答えてきた。他の4人これまでで一番の敵対心を持った目をしている。

「僕たちは猛獣に襲われたというのはテレビにも話した事があります。でも、絶滅動物とかのことはまったく話したことはありません。」

なんでそれを、あの事故の体験者でもない先輩が知ってるんですか？」

仙石に続いた真理谷が司に問いつめる。他の3人も司に視線を向けている。

緊張した空気が続き、冴子もそれを理解できないながらも見守っている。

張り詰めた空気を壊したのは、司だった。

「ふう。そんなに睨まないでくれ。俺だって最初お前らを見たときは普通の学生だって思ったんだよ。でも、お前らの過去を見たことがあって、それが本当に実在する奴のだとは思わなかったんだ。」

司が溜息をついて、自分の思っていた事をありのまま話す。しかしその言葉は司の力を知っている冴子以外は理解できなかった。

「過去を見る？」

「まさか！先輩、ESP能力者なんですか！！？」

「過去を見る」を言う言葉に宮内が反応し、佐久間がなにやらやたらと嬉しそうに尋ねてきた。

「おいおい、俺たちは超能力者に縁でもあるのかよ。」

「真美さんのときもそうだったよね。」

「すぐに判断はしないほうがいいぞ。安易な判断は現状では命に関わる。」

仙石と赤神は事故のときに出会った「千里眼の巫女」のことを思い出し、真理谷は冷静に判断しようとしている。

「俺はただお前たちが事故でどんな事を体験したかを漠然と知っているだけだ。細かくまでは知らん。その事故の時のことを知ったのは本当に偶然だし、その事故以外のお前たちのことは知らない。俺が言うのも変だけど、あんまり気にしないほうがいいぞ。俺自身も当時、事故のニュース見ても気付かなかったくらいだ。あの体験をしたお前たちが実際に存在しているなんて思いもしなかったんだ。」

司の答えに困惑する仙石たち。宮内にいたっては、警戒を解いていない。冴子は司の力に関係していると納得したのか、特に意見はなかった。

「最初、仙石たちがこんな異常事態なのにやけに場慣れしているのに違和感を感じたからなんだ。加えて冴子が聞いた事故の事がなかったら完全に気付かなかったよ。」

それより聞かせてほしい。俺と冴子はこの学園から脱出するつもりだ。お前たちはこれからどうするのかを。」

2つの作品が実は同じ世界にそれぞれ存在していた。そんな予想外な出会いをした司たち。まったくこれからどうなるのか。原作知識もあまり役に立たなくなったこの世界で、いったい何が起るのか。

## 第十話 繋がっていた世界（後書き）

やっつけてしまいました。

「黙示録」と「エデンの檻」が同じ世界だったというところでもない設定。

登場した五人は、明協学園からそのまま進学せず、事故の事もあって違う県の高校に進学したという設定です。

次は冴子の部屋から荷物を持っていくことを中心にする予定です。

すみません。感想の返信遅くなってしまって。

つたない作品ですが、どうぞよろしくお願いします。

第十一話 『エデン』と『黙示録』 前編（前書き）

またまた遅れてしまって申し訳ありません。

今回前編と後編に分けました。それぞれの主人公たちがどう思っ  
て、これからどうするのか、というのが主な内容です。

PVが27万を超えました。これも皆様のおかげです。ありがとう  
ございます。

これからもがんばります。

サブタイトルの数字を修正

## 第十一話 『エデン』と『黙示録』 前編

第十一話 『エデン』と『黙示録』 前編

立て籠もっていたのは皆一年生であっただけでなく、漫画『エデンの檻』の主人公たちであった。この世界が『学園黙示録』の世界だけでなく、『エデンの檻』の世界でもあり、彼らはあの魔境を生き抜いてきた者たちだった。

そんな異なる世界の者たちが出会った時、この世界の未来はどうなっていくのであろうか。

司は仙石たちに尋ねた。自分たちがこれからどうするつもりなのかということ。

「オレたちがどうするか、ですか？」

「そうだ。元々俺と冴子は脱出の際の荷物を取りに来るためだけにここに来たんだ。

出会った数少ない生存者だ。もう会えない可能性もある。だから、これからどうするのか聞いておきたい。」

司の質問に仙石は考え、そして話し出した。

「オレたちも最初脱出するつもりでしたがとてもできる状況じゃな



かったんで、一旦ここに立て籠もりました。でも、もし脱出できるならオレたちは家族の無事を確認するために行きたいです。」

「たとえここに立て籠もるにしても水も食料もないです。どのみち脱出しなくてはなりません。しばらく様子を見てからとも考えていましたが、もし他にも脱出する人が居るなら合流しようと思えます。もし車で脱出するなら生き残れる可能性も高くなりますから。」

仙石は小室と同じで家族の安否を確認するため脱出するという。真理谷もここに長期間立て籠もるつもりは食料とかの関係でないという。

「家族の無事って、横浜までいくのか？すごく遠いぞ。」

「はい。私たちの家族はみんな横浜ですから。危険なのは分かっていますけど、行くつもりです。」

「小室君たちも脱出するつもりだったから一緒に行けばいいのではないか？もう一台のバスで脱出するつもりだろうから、頼めば乗せてくれるだろう。」

赤神は横浜の家族の元に行くという。冴子は小室たちが残ったバスで移動するであろうと言う。いつ脱出するかまではさすがに分らないので、一度会う必要があるであろう。

「なるほど。」

俺たちは冴子の荷物を持ったら一度部屋に行くつもりだから。それから化学室に向かい、脱出する。

無事だった奴は化学室にいる。さっきのパンは食堂近くのトラック

の中にまだあるだろう。じゃあ後はがんばってくれ。」

そう言っつて、司は部屋を出ようとする。

「え？どこ行くんですか？」

突然の行動に仙石は困惑する。

「あとは自分たちでやれつてこと。おまえここのリーダーだろ？サービスで情報はやったんだ。あとは仲間と相談して決めてくれ。」

そう言っつて扉を開けようとして、

「待つてください。お願いがあるんです。」

佐久間が呼び止めた。

「なんだ？一緒に行ってくださいっていうのはだめだぞ。こちらにも予定がある。」

「いいえ、そうじゃなくて。」

先輩のESP能力、教えてくださいー！！

一瞬部屋の時が止まる。佐久間が聞いたかったのはこれからの事で

はなく、化け物のことでもない。司の持っている能力がどんなものかということだった。

「未来視なんですか！？過去視なんですか！？それとも他の！！」  
なにやらやたらと興奮した表情で聞いてくる佐久間。まだ司は答えるとも言っていないのに、である。

「……まあ、おまえらの事故のことを言い当てたんだし、言っておかないと気持ち悪いか。」

未来視、過去視、両方できるがひどくあやふやなものだ。見ようと思っただけではできないし、これから起こる事、過去に起こったことが見れるとも限らん。

しかし、今回のこの事件は予知していた。だから、このクロスボウとかも準備できた。

それから、この能力のことはあまり他の奴らには話さないでくれ。面倒事が起きかねん。おまえらにもあつただろ？」

そういわれた佐久間は、ハツとした表情をした。予知を利用して人心を操ろうとしていた人たちを思い出した。仙石たちもそれに気付いていた。

「分かりました。先輩の力のことは他言無用ということ。いろいろな情報ありがとうございます。」

「おう。じゃ、また化学室でな。」

助言をくれた司に真利谷が礼を言った。司は冴子と共にこの部屋を

出て、扉を閉めた。

「（よかったのか？司。彼らのあそこまでお前のことを話して。）」  
冴子が仙石たちに過剰な情報を渡したことを心配して聞いている。  
下手をすれば、いつか司の首を絞めることになりえるからだ。

「（たぶん大丈夫だ。あいつらはあの魔境を生き抜いた猛者だ。こんなになっちまった世界でもやっていいこととダメなことの判断できるぞ。」

それでも、もし俺たちの命を脅かすようになるならキッチリ後始末はするぞ。）」

司はそう言う。そんな司の手を冴子が握る。

「また一人で背負うつもりか？私のことを忘れないでくれ。約束しただろう？」

そう言い、冴子は互いの手の指を絡める。

「うん。そうだったな。すまん。」

司も答えるように冴子の手を握り返す。そうして2人は荷物のある部屋を目指す。

すぐ隣だが。

## エデンのメンバーたち

バタン

扉の閉まる音がする。司たちの登場は、仙石たちにとってはただ生存者がいただけではすまなかった。あの時のことを体験していないものが、自分たちのことを知っていたからである。

「先輩の言ってたこと、どう思う?」

「あまり信用しない方がいいだろう、といつもなら言っただが、今回ばかりはそう簡単に言えないな。まるで本当に見ていたかのような口ぶりだった。警戒しておく必要はある。」

「でも、絶滅動物はともかく毒の木の実はおかしくない?あれって私とアキラくんと真理谷くんが食べたやつでしょ?なんでそんなところだけ。」

「そういえばそうだな。毒の実なんてアタシは食ってねえし。生徒同士の殺し合いなんてのもアタシはなかったな。」

「うん。あれは宮内さんに会う前だったから。」

ほんとにすごい!ESP能力所持者がまたこんなところにいたなんて!」

仙石たちは司の言っていたことをそれぞれ話し合っている。司たちへの対応をこれからどうするかについて。1人は感動して興奮しているが。

「おい雪。いい加減にしるよ。信じるも信じないも、こんな世界じゃホントに命取りにかかるんだからな。」

「そうだぞ、実際に僕たちも同じことを体験したんだから。」

「それって真実ちゃんのことだよ。無事かな〜真実ちゃん。」

「アイツ、予知でアタシ達が危険な目にあつたことも知ってやがつたな。こりゃどこまで知ってるのか、とことん問い詰めたくなるな。」

「佐久間の暴走を宥めつつ、司の言っていることがそれぞれの的を射ていることに注目する。」

「過去視と未来視だけなのかな!? 今回の事も予知してたって言うし。他にも念動力とかも持ってたたり…!」

佐久間は別の事に注目しているが。

「だから、いい加減にしるって。おまえってこの手の事になると見境なくなるな。」

それは無事脱出できてからいくらでも聞け。

それより、これからどうするか、だ。」

暴走の止まらない佐久間を止め、これからのことを話し出す仙石。

「脱出する人が居るならそれに便乗するのがいいだろう。バスに乗って脱出するみたいだから、街に行くのも比較的無事に行ける。」

ただ、日本中どころか世界中がこうなっているから、脱出したところで安全な場所に行けるかとわけでない。」

「おいおい、いきなり希望を砕くなよ。」

「物事は正確に伝えるべきだ。実際ネットで調べてみたが、世界中でこうなっている。最悪の場合に備えなければ、全滅は必至だ。今回のことは前回よりもはるかに難易度が高い。知性のない化け物が相手なんだぞ。」

「どっちがうの?」

真理谷がこれからの行動を話す、あまり幸いいいことではない。それを宮内が咎めるが、知性のない相手は遙かにやっかいだということに赤神が疑問を持つ。

「野生動物は基本無駄な殺しはしない。腹が減っていたり、テリトリーに入らなければ安全地帯の確保はできる。」

しかし今回の化け物は、容赦なく襲ってくる。しかも少しでも噛まれたりすれば感染して化け物になってしまう。相当シビアなものだぞ。」

「そう言われると、確かに前より厄介だな。アタシの蹴りも効いていないみたいだったし。」

真理谷の説明に納得する一同。

「まとめるぞ。」

俺たちの目的はまずこの学校からの脱出。そのために先輩から教えてもらった化学室へ向かう。途中でパンももらって行こう。食料は欲しい。あとは無事に脱出してからでいいな。」

「先輩たちの言う事を信じるのか？ウソで僕たちを囮にでもするつもりだったらどうするつもりだ？」

「俺は先輩たちの言う事を信じる。」

みんなもそれでいいか。」

仙石が他のメンバーに聞く。

「私はアキラくんの意見に賛成だよ。いつか脱出しなくちゃいけないことだし。」

「私も。」

「アタシはあんまり信用できねえが、行ってみる価値はありそうだ。」

「問題点は言った。それでも行くだけの価値があるならリーダーに従うだけだ。」

仙石たちの意見はまとまったようだ。



「ねえ、先輩たちを待つて行ったほうがいいんじゃない？」

「いや、雪。さっき先輩は俺たちで決めて行けって言っただ。先輩たちは何かやる事があるのだろ。俺たちだけ先に行くぞ。使えそうな荷物はもらって行こう。」

真理谷、正面の門から出れそうか？」

「いや、かなり集まっていて危険だ。だがその分裏門が空きだろ。裏門を確認して出よう。」

「よし、行くぞ。」

仙石たちは動き出す。あの未開の地での経験を糧に、この変わってしまった世界で生き残るために。

第十一話 『エデン』と『黙示録』 前編（後書き）

後編は化学室の原作キャラたちを書くことと思います。

次はもっと早く更新できるように頑張ります。

いつまでたっても学校から出られないですが。

拙い作品ですが、これからもよろしくお願いします。

第十二話 『エデン』と『黙示録』 後編（前書き）

遅くなってしまうて申し訳ありません。

今回小室君の扱いがちょっと悪いと思います。高城嬢がかなり聡明です。でも、これも成長の糧にしてもらおう予定です。

ではごっご。

## 第十二話 『エデン』と『黙示録』 後編

第十二話 『エデン』と『黙示録』 後編

司と冴子の2人は冴子の部屋に向かい、『エデン』のメンバーたちは化学室にいる生存者と合流するために動き出した。その一方、この世界の主人公たちである『黙示録』のメンバーたちもこれからの事を話し合っていた。

### 化学室

あの金髪不良は司が学校全ての 奴ら を倒す事を前提で話を進め、その考え賛同する者たちも出始めていた。

そんな中、高城は黙々と自分たちに今後の行動を考えていた。今の状況と、立て籠もった場合と脱出した場合の危険度、今後の事を考えた場合の対応など様々な形で考えをめぐらせていた。

「なんだか立て籠もるような流れに勝手になってるけど、あんたたちはどう思ってるの？」

高城が立て籠もる話に参加してない面々に話しかける。その面々は、小室、宮本、平野、鞠川校医の原作メンバーに加え、保健室で

助かった石井、タオルを外したおかげで死ぬのを免れたカップルの合計7人である。

「どうって、僕は脱出するほうを選ぶよ。今なら 奴ら の気が爆発したバスに向いているから大丈夫だと思う。」

「私も孝に賛成かな。怪我とか皆してるけど、動けないほどじゃないみたいだし。」

「骨折した人がいても腕とかだから移動する事に特に問題はない。武器をまた確保すればなんとかなると思う。」

「でもバスって運転しにくいのよ。もっと運転しやすい車ってある？」

鞠川校医だけが少しずれた意見を言う。

「先生。この人数じゃたとえワゴンでも厳しいですよ。例えあったとしても、鍵はどうするんですか？また職員室まで行くのは危ないですよ。」

「俺は自分となおみの両親のところへ行きたい。無事に行けるか分からないけど。」

「私も卓造と一緒によ。」

その鞠川校医の意見に突っ込む石井と家族の無事を確かめたいと小室たちに同意するカップル。

7人の意見を聞き、さらに質問をする高城。

「じゃあ、先輩たちがもし立て籠もるほうと選んだらどつする？」

この質問には7人の誰もが顔を見合わせる。

「それはないだろう。先輩たちは脱出しようとしてたんだぜ。脱出するほうを選ぶだろう。」

「まあ、それについては私も同感ね。先輩たちは脱出するほうを選ぶと思うわ。問題は私たちと一緒に行くのか、つてところね。」

司たちが脱出するほうを選ぶと小室は言い、それに高城も同意する。しかし、次の言葉は一同の言葉を奪った。

「えっと、なんで？脱出するのに一緒じゃないの？」

「そうだよ。先輩たちと分かれる理由なんてないよ。先輩たちも街への足は必要だし。それに、先輩たちと一緒にならまず大丈夫だし。」

尤もな疑問を宮本が言い、続いて石井も司たちの同行の利点を言う。

「そう。先輩たちがいればまず私たちの安全性は相当よくなるわ。たとえバスを囲まれても問題ないわ。」

でも、先輩たちの私たちに同行する理由と利点は何？」

高城は司たちが同行することそのものを問う。

「え？理由は先輩たちも街へ行くこと、ですよ。利点は…あれ？移動手段だけ。」

釘打ち銃の手入れをしていた平野が答え、そして気付く。司たちの同行する利点は移動手段が得られること。

「でも、車の運転ができるのは先生だけだ。鍵もここにあるし。」

「そう、だよな。なのになんで別々になる必要があるの?」

平野の言った答えに、助かったカップルが同意する。しかし、その答えに高城が一石を投じる。

「水川先輩って自分のバイクを学校においてる事でも学校では結構有名だったわよね。しかも学校が認めてるし。もし先輩がそれに乗って脱出する事をえらんだら?」

「あゝ、そういえば水川君、バイク持つてるって先生たちの間でも結構話題になってたわゝ。いくら理由があっても特別許可なんて許されないとかなんとかで。」

高城の意見に鞠川校医も思い出したように言う。他の面々も司がバイクを所持しているという噂を思い出したらしく、動揺が走る。

「でも、先輩たちは最初僕たちに同行してたんですよ。それは車で脱出したほうが良いって判断したからなんじゃ…」

「職員室にいたときと現在じゃ決定的に違ってる事があるわ。小室、

何だと思っ?」

司たちが自分たちに同行する事を選んだという平野の意見を遮り、過去と現在の違いを高城は小室に尋ねる。

「えつと……みんなが怪我をしている事?」

小室が周りを見回して、変化した事を言う。

「はずれ。それも確かにそうだけど、先輩には関係ないわ。」

高城は間違っではないが正解ではないという。

「もしかして、水川君の変身のこと?」

鞠川校医がポヤヤンとした声で答える。その答えに何人かがハツとする。

「そう!バスに乗る前と今じゃ決定的に違っのは、先輩の力が私たちにばれてるか、いないかよ!!」

もし、先輩がばれるのを恐れていたのなら、私たちに同行したのも理由が説明付くわ。でも今じゃ先輩の力は私たちにほとんどばれてる。隠す理由も出し惜しみする理由もないわ。実際にここに来るまでメチャクチャやってたし。

毒島先輩と一緒にさっさと脱出したほうがずっと効率的よ。」

高城の答えはあくまで空想の範囲である。しかし、司の化学室を出る前に言った「群れた人間が怖い」という言葉と、これまでの行動



を考えると、否定できないのも事実である。  
その答えに小室が反論する。

「でも、先輩が俺たちを見捨てていくなんて。そんなことするわけないだろ。」

「なんでそう言えるの？」

それに高城が聞く。

「だって、そんな助けられる人がいるのに見捨てていくなんて、人間としてやっちゃだめだろう。」

小室がしつかりとした常識を説く。これは小室の美点であろう。人として、人間として失っていない証拠であろう。しかし、その美点を高城はあえて突く

「小室。人を助けると言うのは当然の事よ。でも、それは現在、こんな私たちが明日の朝日も拝めるか分からない世界じゃ、ただの理想論でしかないわ。自分の身を守るかも分からないのよ。」

「でも、だからって、見捨てて言い訳じゃないだろ！！」

高城に突きつけられた現実を小室は常識を持って反論する。見捨てると言われて若干感情的になっている。

そんな小室を見て高城は溜息をつく。

「はあ、小室。これはあんまり言いたくなかったことなんだけど。みんなも気付いてないことなんだけどね。」

「な、なんだよ。」

その行動に小室は不満げに聞く。

「バスがひっくり返った原因の1つは、あなたのその正義感よ。」

この言葉に話に加わっていた全員が息を呑む。

「え?」

小室が一番理解できていないにようである。

「バスがひっくり返ったのは予想以上に 奴らがバスの前に集まった事よ。あんたが紫藤たちを乗せるために出発を遅らせなければ、

バスが横転することはなかったかもしれないわ。あくまでこれも予測の範囲だけど、その可能性も充分あったわ。

正義感を振るのは良いわ、人の常識で動くのも良いわ。でもね、今の状況じゃ少しの失敗が命取りになるのよ。ちよつとの判断が生死を分けるのよ。

人を助けようとして、自分が死ぬどころか、私たちも巻き添えで全滅するなんてことも充分起こりえるのよ。実際に、先輩がいなかったら私たちは死んでた可能性は高いわ。」

高城の辛辣な言葉に絶句してしまう小室。紫藤の名前が出たせいか、宮本も何も言わずに聞いている。

「……………じゃ、じゃあ。これからも見捨てろっていつのかよ？」

「そうは言っていないわ。でも覚えておいて。この先、今までの常識じゃ生きていけないのは確かよ。

でもね、小室。あんたのそれは失くさないでいたほうがいいのかもね。」

高城が最後はちよつとやれやれと言った笑顔で締めくくる。小室としては微妙な心境だろう。宮本も違う意味で微妙だが。

「あの。」

そんな空気を平野が壊す。

「何よ！デブチン！！せつかく纏めたのに！！！」

「いや、今気付いたんですけど、その紫藤先生が見えないんですけど」

ど。それも、この教室に入った時から。」

「「「「「え？」「」「」「」

「ああ〜」。誰かいないと思ったなら紫藤先生だったんだ。やっぱりあの時からかな？」

平野の疑問に鞠川校医が思い出したように言い、他の面々はたった今気が付いたとばかりの声を上げる。

「あの時って？」

鞠川校医の答えに石井が尋ねる。

「えっとね〜、バスがひっくり返って皆を起こしてる時に外に1人で戻っちゃったのよ〜。それから見てないのよね〜。」

その答えに全員が沈黙する。尤も、その沈黙は犠牲者が出たと言う後悔や死んだ事に対してあっけなかつたという気持ちなど、それぞれにおいて様々な意味があった。

第十二話 『エデン』と『黙示録』 後編（後書き）

今回は冴子の部屋に行った司と冴子です。できればそのまま部屋にも行けたらと思っておりますが、部屋でもいろいろあるのでまとめきれぬかどうか。

次の更新もできるだけ早くできるようにします。

これからもよろしく願います。

第十三話 贈り物を使う刻（前書き）

また遅くなってすみません。

今回もまだ女子寮です。

誤字修正しました。あと、ほんの少し太刀と打刀のところに説明追加しました。

## 第十三話 贈り物を使う刻

### 第十三話 贈り物を使う刻

#### 冴子の部屋

「冴子、荷物は？」

「ああ、これだけだ。だが、ちょっと拵え（こしらえ）を弄るのに時間が欲しいのだ。かまわないか？」

「ああ、ちょうどいい。ちょっとシャワー借りるぞ。いい加減着替えたくて。」

「確かに、司はドロドロだったな。」

「一応俺も警戒はしとくが、冴子も気をつけてくれよ。」

「ああ、分かった。私も後で着替えるときにシャワーを使うから。」

「了解。」

司たちは何事もなく冴子の部屋に着いた。部屋には鍵が掛けられていて、中には誰もいなかった。

女子寄宿舎は2人部屋が基本となっていて、大浴場のほかに其々の部屋に簡単なシャワー室がついている。司は自分の着ている服に血の匂いがかかり付いていたため、着替えるついでにシャワーを借りる事にした。

普通なら女性である冴子に譲るのだが、冴子には少しやらなければならないことがあったため、司に先に使ってもらった。

「まさか、司の贈り物を本当に使うときが来るとは。」

冴子がそう言い、微笑みながら柵の上に飾られていたものを手にした。

それは、白木の鞘に包まれた日本刀であった。

司と冴子がバイクで街に出るとき、よく足を運んだイベントがある。それは刀剣即売会である。冴子も日本刀には興味を持っていた。

先のことを考えると日本刀の一本は持つておくべきであると司は考えた。剣道をしていた分、真剣に憧れていた理由もあるが。

司は冴子の誕生日に日本刀をプレゼントしたのである。即売会に足を運んだ時、司は冴子と共にどんな日本刀が良いのか話し合った。その時に冴子がどの日本刀が気に入っているのかを確認したのである。そしてそれを密かに購入し贈った。日本刀は安いものなら十万円しないが、良い物だと五十万円を軽く超える。

司が贈った日本刀の銘は、「吉次<sup>くじつよ</sup>」。長さ66・6センチ、反り17センチの室町時代中期に創られたものである。価格は65万円。一般的な日本刀より軽くて振り回しやすいものだった。

贈られたとき冴子はものすごく喜んだが、学生の身分でこんな高価なものを受け取れないと言った。だが司は万が一の事を考えて受け取って欲しいと冴子に言った。冴子も最後は納得して受け取った。



この「吉次」は「太刀」と「打刀」に分類すると、「打刀」の方に当たる。刃を下にして腰に吊り下げるのが「太刀」、刃を上にして腰に差すのが「打刀」であり、一般的な刀は「打刀」の方を指す。そして、創られたのは室町時代中期という、およそ五百年前の日本刀である。

日本刀は時代によって材質が変わってくる。例えば、室町時代と江戸時代に作られたものでは、鉄の含有量が異なり硬度に差があるのである。だが、鉄分が多く硬い方が優れていると言っわけでもない。室町時代のものはまだ製鉄技術が甘く、鉄以外の不純物が含まれている分やわらかい。しかし、やわらかい分折れにくく、たとえ歪んでも時間がたてば自然に元に戻ることもあるのである。反対に硬い場合、切れ味も耐久性も良いが、一定の負荷がかかるとあっさりと折れてしまう可能性がある。

室町時代は戦国時代であり、充分に手入れができないまま戦に臨むこともあった。そんな時代で生き残ったのが、この「吉次」である。なので、ゾンビとの長期間の連戦を考えて古いものを司は選んだのである。

冴子が今行っているのが拵え（こしらえ）の交換である。これは意外と時間がかかり、またしつかり行っておかないと戦闘中に柄から刀身が外れてしまう事もあるので、冴子は念入りに作業としている。白木の拵えから別の拵えに交換しているのにもちゃんと理由がある。

日本刀を普段部屋に飾っておく場合、白木の鞘に入れておくことが好ましいとされている。侍が普段持ち歩くときの鞘は「外着」とされ、持ち運ぶための形と言われている。反対に白木の鞘は、刀を休

ませ良い状態で保存することができるのである。

「ふむ、刃に異常はない。握りも鞘もしっかり入っている。よし。ふふ、これを振るい、司と共に歩むのか。」

冴子は「保存」の拵え（こしらえ）から「戦い」の拵え（こしらえ）への交換を終えて、また微笑むのであった。

「冴子ー、出たぞー。」

しばらくして司がシャワーを終えて出てきた。服装はもう制服ではなく、ジーパンと黒いロゴ入りの長袖の服になっている。男子寮から荷物を持って来るときに余分に詰め込んだ服である。

「司、こちらも終わった。特に問題はない。自分の荷物の整理も終わっている。では、私もシャワーを使おう。」

冴子も自分の着替えなどを持って司と入れ替わりでシャワー室に向かう。

「司、制服は？」

冴子が司のさつき着ていた服の在りかを聞く。

「袋に入れてゴミ箱だ。もうさすがに着れないし、余計な荷物はないほうがいいだろう。」

「それもそうだな。では、見張り頼んだぞ。」

「おう。ゾンビが来ても死守するからゆっくりしてこいや。」

冴子はシャワー室に行く。司は冴子が出てくるまでに自分の荷物の整理をしておくことにした。リュックとカバンの2つあると邪魔になるのでリュックの方にまとめ、カバンも折り畳んでリュックに入れておく。元々リュックには充分に余裕があり、無理なく入った。

クロスボウの矢は2セットをジープンのポケットに入れすぐに取り出せるようにしておく。このシーパンのポケットは腰回りだけでなく太ももの部分にも1つずつある。そこに矢を入れておけば楽に取り出せ、かがんだ時などに足に矢が刺さる事もなく、移動の際にも邪魔にならない。

「さて、次の目的地は俺の部屋か、これから一体どうなるのやら。もう原作知識もあてになりそうにないな。あ、そうだ。メールしとかないと。」

身支度を整えながら司はメールを送った。そしてこれからのことを考えながら、冴子が出てくるのをただ待っていた。

ジャー—————

適温のお湯が冴子の全身を流れていく。腰まである漆黒の髪、引き締まりながらも無駄な筋肉が無く、むしろ柔らかかな肌を感じさせるその姿は、まるで刀剣のような美しさを持っている。

「はあー、これからいったいどうなるのやら。」

冴子はこれからもことについて少し不安になっていた。突然今まで自分が暮らしていた世界が壊れたのだから。

「ゾンビよりも人間に方がよっぽど厄介な気がしてしまうよ。」

冴子は司が化学室の会話を盗み聞きしたときのことを思い出した。司をこの事件の元凶だとし、排除しようとしたことである。

「だが、私たちの邪魔をするならたとえ人でも。」

冴子は意志を固めようとしていた。自分たちに害を及ぼそうと言うのがゾンビだけでなく、人間であっても容赦はしないということ。

「私は必ず司と生き抜く。」

あの刀を振るい、司の背を守っていきたいと。

「司、待たせたな。」

冴子がシャワー室から出てきた。

「おう。さっぱりしたか。」

そう言っ冴子を見た司が固まった。なぜかという、上は制服を着ているが、下はスカートを履いておらずパンツ一枚だったからだ。それも黒。

「なんで下履いていないんだ？」

司が尤もな質問をする。

「ああ、持つて行くのを忘れた。」

ごく簡単な理由を返した。

「もうちょっと慎みをもってほしいよ。他に人がいたらどうする気だよ。」

と言いながら、冴子から目を離さない司。

「なに、司に隠すものなど無いさ。それに司以外に見せる気は無いよ。」

微笑みながら言う冴子。とてもいい笑顔なのだが、下半身下着だけという姿はすごく妖艶だった。

「凄く嬉しい言葉なんだが一応聞いとく。下、何履くつもりだ？ズボンか？」

「いや、スカートを履く。ほら、これだ。」

そういつて自分の荷物から出して見せたスカートは、ものすごく深いスリットがはいったスカートだった。スリットが入っていない部分の方が短い。

正直に言おう、エロい。チラリズムよりすごい衝撃を相手に与えるだろう。

「さつき、俺以外には見せないって言ってたよな。」

「そうだぞ。何を言っている。」

冴子は真顔で司にそう言う。

「（毒島流服飾術：お義母さん、あなたは何という地雷を残したんですか！俺が見る分にはいいんだけど、他の野郎に見せたくないぞ！…）」

心の中で叫ぶ司。しっかり冴子の母をお義母さんと言っているが。

「他のスカートは？」

「？どれも同じようなやつだが。」

最後の希望まで素直に砕く冴子であった。

「分かった。早いところ着てくれ。ぼちぼち行こう。」

「うむ。」

着替える冴子。

そして着替え終わった冴子の姿は、先ほどの深いスリットが入ったスカートに加えて、黒いガーターベルトという、さらに凶悪な組み合わせをした姿となっていた。

その姿を間近に見た司は襲い掛かりたい本能と、これからの行動の効率を考えた理性との凄まじい攻防がなされたという。

### 第十三話 贈り物を使う刻（後書き）

未だに学校を脱出できなくて、十話を越えてしまつとは。

次はいよいよ部室で学校に持ち込んでいた装備が出てきます。

よほど危ないものは出てこないつもりですが。

どんどん黙示録のSSが増えてきて、楽しみな反面、すごく不安だったりします。

アニメも独自展開を見せていますし、いったいどんな終わり方をするのか。

これからもよろしくお願いします。



**第十四話 この日のために準備したんだけど（前書き）**

できましたので、投稿します。

なんだか今回説明ばかりです。

このところ1週間で1話のペース、がんばりますのでよろしくお  
願いします。

修正で持ち物に充電器 追加しました。

## 第十四話 この日のために準備したんだけど

第十四話 この日のために準備したんだけど

司と冴子は服装や武器を整え、女子寄宿舎を後にした。寄宿舎の正門は侵入の際の行動で案の定ゾンビたちが集まっていたが、反対に裏門は全然居なかった。寄宿舎を出た後、来た道を逆にたどり、次に向かうのは司の「災害対策研究会」の部室である。そこに保管してあるこの日のために持ち込んだ装備や保存食を回収しておくためだ。

途中でまたトラックのパンを失敬することにした。こんな手作りのパンはもうしばらく食べることが出来ないと思ったからである。

「あれ？なんかパンが減ってる。」

「おそらくあの一年たちが持っていたのだろう。司がトラックの場所を教えただろう？」

トラックのパンが最初持って行った時より減っていた。これは仙石たちもパンを持って行ったからであろうと2人は納得した。リュックの余分なスペースにできるだけパンを詰め込み、トラックから離れた。

「あ、そうだ。」

「どうしたんだ？司。」

部室に向かっている途中で、司は何か思い出したように立ち止まった。

「寄らなきゃならない所、もう一つあった。」

そういつて司が向かったのは……

ATMだった。

「司、なんで金を下ろす必要があるんだ？こんな事態でそう金が必要になるとは思えんのだが。」

ATMの周りで警戒している冴子が金を下ろしている司に非難がましく言っ。

「そうでもないぞ。最近無人化が進んでるから、金を入れんと出てこないものが意外とあるんだよ。下ろすのは…50万くらいでいいかな。」

「私には自販機くらいしか思いつかんが…それから、ちょっと多すぎないか？」

「まあ、備えあれば憂いなしって言うじゃないか。金も意外と役に立ったりするもんだ。」

「そんなものか？」

そんな会話をしながら、大金を下ろした司が出てくる。

「よし、OKだ。行こう。」

「はあ、そうだな。」

そして、2人は部室へ再び向かった。

「災害対策研究会」の部室は部活棟（文科系の部室）ではなく管理棟（職員室など）の空き教室を使っている。それも使われなくなつた教室を使っているの、管理棟の一番端にある。教室棟から行くのはとても遠く、寄宿舍の方が近いぐらいである。だが、出入り口が複数あつて、今2人は外から直接入ることができるドアの前にいる。

「じゃあ入るか。」

司は鍵を取り出して言う。

「司、ゾンビたちが中にいるかもしれないから気をつける。」

「大丈夫だと思うけど。一応確認するよ。」

司は異常聴覚で確認する。

「よし、大丈夫だろ。」

そう言つて司は鍵を開け、クロスボウを構えながら部屋に入る。

中は特に荒らされた様子もなく、司がいつも使っている部屋のままであった。

「冴子いいぞ」

ガシヤン

突然、隣の準備室のドアを突き破つて2体のゾンビが現れた。すぐに司は矢を撃つがあまりの突然の事で狙いがずれ、ゾンビの肩辺りに刺さる。ゾンビは刺さつた矢を気にもせず向かってくる。冴子はすぐに反応し、2体のゾンビのうちの近い方の1体の顔を日本刀「吉次」で突き刺す。その間に司も次の矢を装填し、もう1体の頭をクロスボウで射抜く。

「どうしたのだ、司。狙いが甘かつたぞ。それにゾンビたちは居ないんじゃないのか。」

刀の血を拭つた冴子が司に言う。

「いや、いきなり出てきたのに驚いちゃって。」

「司は想定外のことに相変わらず弱いな。そんな事じゃこの先、生き残れないぞ。」

「うう、すまん。それから助かったよ、ありがとう冴子。」

「うむ。どういたしまして。」

咄嗟の事に反応できなかったことや確認したはずなのに敵が居たことなどを冴子が注意し、司が謝る。素直な謝罪とお礼に冴子が満足したように微笑む。

死体を外に放り出した後、準備室へ確認に行く。準備室はもう誰もいなかった。ただ部室側のドアの二画が血だまりになっていた。どうやらここに逃げ込んだ2人が共に噛まれていて、そのままゾンビになったようである。準備室の扉もしっかり閉めて、司と冴子は部室で一息つく。

「なんで俺、気づかなかったんだ。たしかに音はしなかったはずなんだけど。」

オルフェノクの異常聴覚を持つ司がなぜゾンビの存在に気付かなかったのか、それが謎であった。

「聞き逃したのではないのか？」

「いや、音がすればいるんだから、聞き逃すとかの問題じゃないよ。」

「では、生きている人間とゾンビをどうやって判断してるのだ？」

「ああ、それは心臓の音だよ。心臓が動いていれば人間で、心臓が動いていないのに動いているのがゾンビ。それで聞き分けてる。」

司の人間とゾンビの音の聞き分け方を聞いた冴子はなるほど、と思った。人間が生きている以上心臓は絶えず動いている。それが動いていないのに体が動いているのはあきらかに異常である。だが、冴子はこんな疑問を持った。

「もしゾンビが動いていなかったら？」

この言葉に司はハツとした。

「そうか。確かに動かないゾンビは死体と同じだ。たぶんさっきのゾンビは活動を休止してたんだ。だから音がまったくしなかった。で、俺の音に反応して活動を再開したってところか。こりゃ、思ったより厄介だぞ。」

司は異常聴覚の音による判断の落とし穴に気付いた。ゾンビたちの心臓は基本止まっている。ゾンビになったばかりだと食料を求めて彷徨っているが、この『学園黙示録』のゾンビは音や光などの刺激がないままある程度時間が経つと動かなくなってしまう。しかし音を聞いたりするとすぐに反応して動き出す。原作の診療所の薬の回収のイベントで、いきなりゾンビどもが大量に現れて襲ってきた展開を思い出した。

「はあ、いくら超人でも弱点や落とし穴はあるってことか。」

「しかし良かったではないか。この早い段階で知ることができたのは幸運だったと思うよ。」

「まあ、そう考えるといい経験になったってところか。」

冴子の言葉に司は肩をすくめながら言う。

「落ち込んでても仕方が無い。早いところロッカーを開けよう。冴子もいくつか持ってくだろ？」

「そうだな。武器はともかく、グローブとかは欲しいな。」

2人はそういいながら、頑丈な鍵の掛けられたロッカーのほうへ向かっていった。

### 『エデン』のメンバーたち

寄宿舎を脱出した仙石たちは司の情報どおりに化学室を目指していた。途中食堂近くのトラックでパンもしっかりと頂いていた。

「校舎の中を通ったほうが速いんじゃない？」

「いや、校舎はまだ化け物たちがいるはずだし、そのまま化学室まで連れて行きかねない。外から回り込んだほうが、もしものときにも逃げやすい。」



後衛・荷物持ちをしている佐久間と真理谷が言う。

「とりあえず先輩の情報は正しかったようだ。トラックはあつたし、化け物どもも今はほとんどバスの方に引き付けられているみたいだし。」

「これで化学室にいれば完璧ね。」

前衛を担当している仙石と赤神。2人とも箒の柄を武器にしている。

「だが、安心はできねえぜ。もし化学室が化け物しかいなかったら？」

宮内は蹴りを主体とするため、無手である。

「なら窓から覗きやいいだろ。それなら逃げやすいし。」

「…それもそうだな。」

そんなやり取りをしつつ、5人は化学室に近くまで来た。そのまま校舎に入るのではなく、一旦窓の方に回り、外から覗いて内の様子を確かめる。

「仙石、どうだ？」

宮内が聞く。

「うん。ちゃんと人間がいるよ。なんか分かれて話してるみたいだけど。」

「よし、行こう。でも気は抜かないように。」

真理谷の声に全員が頷く。

校舎に入ると、化学室の前は防火扉がしまっていた。

「これ、入れるの？」

「大丈夫だ。そのために防火扉にはドアがついてるんだ。」

赤神の疑問に真理谷が答える。慎重にドアを開け、何もいない事を確認し、化学室のドアに前に来る。

「開けるぞ。」

「仙石、一応気をつけとけ。人間でも危ない奴は危ないからな。」

「ああ、そうだったな。」

宮内の忠告に仙石はあの魔境での事を思い出す。

ガラガラ

そして『エデン』の主人公たちは『黙示録』の主人公たちと出会う。

災害対策研究会部室

「冴子、サイズはどうだ？」

「ああ、問題ない。握るときも邪魔にならないよ。」

2人はロッカーの中のをいろいろ装備しながら話している。このロッカーには司がこの日のために準備してきたものがいろいろ溜め込まれている。

その中から司たちが装備し、持って行くのは次の通りである。

まず司の装備品。

？ タイプ タクティカルバックパック 12900円

寄宿舎に着替えを入れて脱出リュックにしていたもの。頑丈で、外付けポーチをつけることでさらに容量を増やす事ができる。

リュックの中身

- ・ 着替え一式 一日分
- ・ 簡易救急セット（消毒薬 傷テープ 包帯 湿布 胃薬 下痢止め 熱さまし）
- ・ アーミーナイフ（十徳ナイフ）

- ・ 財布 預金通帳
- ・ 折り畳み傘
- ・ 筆記用具
- ・ 鍵各種
- ・ 携帯電話
- ・ 携帯電話充電器
- ・ ターボライター
- ・ 防水双眼鏡  
カローリメイトなど
- ・ 携帯非常食
- ・ 500mlペットボトル×2本 ウーロン茶
- ・ 購買のパン
- ・ 小説「○が家のお稲荷さま 7巻」 1冊

? タクティカルベスト ブラック 8800円

サバイバルゲームのインターネット販売で見つけたベスト。  
左胸に大型ナイフ、右胸にマガジンや弾丸が入るポーチがついてい  
る。素材もヘビーウエイトポリエステルで丈夫であるが、リミッタ  
ーの外れたゾンビの噛み付きには無理だろうと思っている。あくま  
で適度な収納を目的として選んだ。

? グローブ ハーフフィンガーマッシュタイプ ブラック 29  
80円

スワットグローブの指先がないタイプ。指先が無いものを選んだの  
は、矢の補充などは手袋越しでは難しかったからである。  
皮製で丈夫なのでさまざまな用途に利用可能。また手の甲の部分も  
補強されていて、メッシュ地なので通気性も良く、蒸れない。

? 軍用ブーツ 13800円

耐久性と強度に優れた三重縫製の甲皮で、丈夫で長持ちする蒸れにくい裏張りがされている。靴底も特殊ゴムで作られていて、足音も目立たない。

ガツチリと足を包み込むブーツ。スニーカーのままでいいかとも考えたが、ゾンビに靴を掴まれた時などを考えて、ブーツにした。

続いて、お待ちかねの武器系統である。

? 大型サバイバルナイフ 1980円

全長380ミリの大型サバイバルナイフ。柄の部分に防水マッチや釣り針、糸、方位磁石が内蔵されている。ブレードはボーイタイプ。背側は非常に鋭いザイルカッターのセレーションを装備。

ベストの左胸に斜めに装着している。大型のナイフはもはや鉈と同じくらいに大きい。

? 催涙スプレー 3580円

ピストルグリップ型の催涙スプレー。缶タイプと違って噴出し方向

を間違えずに使えるので便利。CNガスタイプのスプレーなので、皮膚に付着しただけでも火傷の様な激しい痛みがあるらしい。

ゾンビには効かないが、暴徒相手には充分。専用のホルダーで右腰に装着している。

? ロックオングレネード(小) 3799円×2個

凄まじい音と光を出すのではなく、催涙スプレーの手榴弾。大きさは小型の発汗スプレーより少し小さい。(小)は室内用だが、(大)だと持ち運びに不便だったのでこちらにした。

これも暴徒専用。右胸の3つの縦長ポーチの内の2つに入っている。

? 防犯ブザー 100円×3個

100円均一ショップで購入したもの。形はUSBスティックのように細長い。通販より安価で種類もあるので、実際に店に行って選んだ。意外と凄い音がするので、ゾンビの囿にはぴったりのものがある。

安価で手に入りやすいので、心置きなく使い捨てできる。

左胸のナイフの上の小さめの3つの縦長ポーチにそれぞれ入っている。

? フラッシュライト(懐中電灯) 31395円

リチウム電池2個使用の超高性能ライト。光の強さの調節から点滅

の速さまで調節できる。全長約160ミリ 重さ約130グラム

右胸の3つの縦長ポーチの内1つに入っている。

? ハンドアックス 14700円

刃の重さ600グラム、柄の長さ380ミリの小ぶりな斧。軽く扱  
やすい。最近では分解して刃を付け替えることのできる斧があるが、  
これは完全に固定されているもの。前面鏡面仕上げでプラチナのよ  
うに輝いている一品。

これは左腰に装着されている。脇差や小太刀も考えたが、鈍器の方  
が使い回しやすい事を考え、斧を選んだ。

? ピストルクロスボウ 5800円

寄宿舎に持ち込んでいた小型のクロスボウ。引きの強さ80ポンド  
重量520グラム 全長30センチ。射程はおよそ20メートル  
と短い。校舎内で使用するには充分だとして購入した。

現在司の主要武器。連射できないが、隠密性に優れているのでゾン  
ビたちにほとんど気付かれずに倒す事ができる。

? ピストルクロスボウ用矢 12本入り999円 x10

硬質樹脂製の矢。矢は回収できるが消耗品なので、曲がったりすれ  
ば精度が落ちてしまう。予備を常に持ち歩いている。

ジープの太もものポケットに12本×2が入っている。残りの矢はポーチに入れてリュックに外付けしている。

続いて、冴子の装備品。

? 市販リュック 2980円

軍用リュックではなく、普通に売られているリュックサック。司は軍用のやつを渡そうとしたのだが、リュックくらいは自分で調達すると言い、冴子を選んで購入した。形はシンプルなもので、色は蒼。

リュックの中身

- ・ 着替え一式 一日分
- ・ 女性用品
- ・ 携帯電話
- ・ 携帯電話充電器
- ・ 日本刀手入れ道具
- ・ 携帯非常食
- ・ 500mlペットボトル×1本 緑茶
- ・ 購入のパン

? グローブ ハーフフィンガーマッシュタイプ ブラック 2980円

スワットグローブの指先がないタイプ。司の装備しているものと同



じ。

? エルボー&ニーパット 3580円

肘と膝を保護するプロテクター。コンパクトで使いやすく、邪魔にもならない。

白兵戦を主眼とする冴子には絶対に必要と思ったので。

? スナイパータクティカルベルト 3500円

ベルトと一体化させるポーチ。ベルトに3個のポーチが並んでいるようになっている。

容量は少ないが、激しい動きを想定しているのでその邪魔にならないように選んだ。

### 冴子の武器系統

? 日本刀「吉次よしづく」 650000円

長さ66・6センチ、反り1・7センチ 室町時代中期製造

司が冴子の誕生日に贈った日本刀。刀剣即売会で購入。一般的な日本刀より軽く振り回しやすい。

? ライナーロック 多機能救出ツール 6630円

全長140ミリ 収納時82ミリ

普通の多機能ナイフとは異なり、ロープを切ったりガラスを割ったりするための荒事用の折りたたみナイフ。

タクティカルベルトの3つの内のポーチの1つに入っている。

? ロックオングレネード(大) 5800円

凄まじい音と光を出すのではなく、催涙スプレーの手榴弾。司の持っているものの大型版。

大きさは殺虫剤スプレー缶くらい。これは室外でも充分な量の催涙ガスが放出される。

タクティカルポーチの3つの内のポーチの1つに入っている。

? 防犯ブザー 100円×2個

司の持っているのは違い、丸っこい分掴みやすいブザー。これも100円均一で購入。

タクティカルポーチの3つの内のポーチの1つに2個入っている。

こんなところである。

冴子のほうがかなり軽装備であるが、戦闘で動き回る冴子にとってかわす事の方が重要なので、荷物の事も考えて最低限の装備となった。

「しかし、思ったより余っちゃったな。」

そう、ロッカーの中にはまだ装備がいくつもある。じつはロッカーは全部で3つある。武器系・衣類系・食料&カバン系にわけてあるのだ。

ベストやレッグポーチ、グローブからブーツまで予備も準備したし、非常食も缶詰やそれを過熱できるミニコンロなどまだまだある。軍用の迷彩服も一式準備していたし、ヘルメットやスタンガン、ヌンチャクやトンファー、斧も入っている。

「司、これは持っていないのか？」

そうやって冴子が指したのは、クロスボウであった。それも今司が装備しているピストルクロスボウではない。ちよつとした小銃くらいの大きさの185ポンドのクロスボウである。

? クロスボウ コンパウンド 109800円

引き約185ポンド 重量約4キロ 全長約1メートル 本体アルミニウム

このクロスボウの威力は半端ではない。マネキンの頭を貫通し、そのまま壁すらも貫通したすさまじい代物である。それを5丁もロツ

カーに入れてある。さらに言うならば、矢もちよつと一工夫してある。

この185ポンドクロスボウの矢は全部で500本ほど準備していたのだが、その全てにブレードヘッドを着けている。

? クロスボウ用アルミ矢 3本セット20インチ 4980円  
? ブレードヘッド 1800〜2100円

このブレードヘッドというのは鹿などの大型動物の猟に使用されていて、3枚か4枚の刃が付いており、貫通力落ちるが威力が上がるものである。貫通力よりも対象物を破壊する事を目的とした形状なのである。

そんな矢を500本も準備していたのだ。

「ああ、持って行かないというか、たぶん持って行けない。」

「なぜだ?」

「積みん……。」

「……確かに。今回の脱出に必要なのは速さだからな。あまり必要以上持つて行くのは邪魔でしかない。しかしもつたいないな。こんなにあるのに。」

ロッカーに積み込まれている武器や防具、食料などを見て冴子は言う。

「ああ、俺もそう思う。あんなだけ準備したのに、実際に持つてくの

はこれくらいだもんな。」

今の自分たちの装備を見て司は言う。移動する事を考えれば、それほど武器は必要ではないのである。何より司には「変身」という最終兵器がすでに使用可能になっているのだから。

**第十四話 この日のために準備したんだけど（後書き）**

装備で不自然なところがあればまた修正していきます。

説明だけでもすごい文章量になりました。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

第十五話 邂逅した主人公たち（前書き）

ちよつとスランプです。

ごめんなさい。

継続的に投稿している作家の方々の凄さが身に染みました。

スプレーの間違い直しました。

## 第十五話 邂逅した主人公たち

### 第十五話 邂逅した主人公たち

ギイイ

「先輩たちようやく帰ってきたみたいだよ。」

防火扉を開く音を聞いた石井が声を出す。それにつられて全員が扉の方に目を向ける。

「なんか、人数多くない？ホントに先輩たちなの？」

扉のガラス戸越しに見える人影は明らかに2人以上いる。

「まさか、 奴ら が!？」

そう言い放ち、急いで武器を手にする小室。それに続き、戦うのに支障がないものはそれぞれ武器を手にし、戦えないものは後ろに下がる。平野も釘打ち銃のサイトを扉に中てている。 奴ら が入ってきたら、即撃つ気だ。

「待ちなさい。もし 奴ら なら扉を開けることなんて出来ない筈よ。扉を突き破るならまだしも、扉を引いて開けるなんてできないと思うわ。」

全員に緊張した空気が佇む中、高城が待ったをかける。



防火扉を教室の外側から開けるには、付いているドアを引くだけでいい。鍵も付いていない。だが、外側からだとは押して開けることはできないのだ。人間なら簡単に侵入できるが 奴ら には出来ない。奴ら は腕力にものを言わせて扉ごと突き破ってくるのが主な侵入方法だ。ドアのノブを引いて開けるといった動作を行えるほどの思考能力はない。

ガラガラ

扉を開ける音に全員が注目する。

そこにいたのは、自分たちと同じ制服に身を包んだ5人の男女であった。そしてその5人から見たら、自分たちに武器を向けて警戒する司の言った通りの生存者たちであった。

ここに「学園黙示録」と「エデンの檻」という、交わることがなかったはずの2組の主人公たちが出会ったのである。

## 化学室

化学室に入った当初は武器を向けられていてビックリしたが、お互

い生存者だったこともあって、すぐに迎え入れられた。パンを持ってきていたことも大きな要因である。ここにいる全員は事件発生の後、ほとんど何も口にしておらず、空腹であった。

仙石たちはパンを全て配り、簡単な自己紹介のあと、仙石たちの話を聞くことになった。それぞれパンを食べながら。

「君たちはどうしてここに？」

アンパンを持った小室が代表して聞く。

「俺たちは女子寄宿舎に立て籠もってたんです。」

「なんだって？おまえら、寄宿舎に居たのか？」

立て籠もっていたことに反応するのはカツサンドを食べている金髪の不良。自分たちも立て籠もる予定なので、その場所の把握や状況などの情報は気になるのだろう。

「はい。でも、化け物どもが入ってきて、3階以外はもう駄目でした。そこに荷物を取りに来た先輩にあっただんです。」

仙石の「先輩」という言葉にお互いの顔を見る小室たち。パンを片手に。

「先輩って、水川先輩と毒島先輩？」

「はい、そうです。その先輩です。先輩たちここに無事な人がいるから、脱出するつもりならこっちのほうがいって教えてくれたんです。」

仙石に続いて赤神が話す。

「先輩たちは？一緒じゃなかったの？」

「なんだか、先輩たちは用があるから自分たちだけ先に行け、みたいなこと言われて。寄宿舎で分かれました。」

サンドイッチの選んだ高城の質問に答える赤神。その答えに

「まさか、2人だけで逃げたんじゃー！！」

司たちがこのままここに戻ってこないかもしれないという不安を口にする根暗っぽい生徒 黒上。持っているパンはウインナーロール。その言葉に途端に不安となる一同。特に、司の力を当てにしていた者たちのうろたえ様は歴然である。小室たちは高城の機転で司が別行動する事も想定していたので、それほどうろたえてはいないが、落胆は隠せない。司の力は 奴ら を相手にする場合、本当に絶体絶命な状況でも覆せるものなのだから。

「何で先輩たちが来ないとダメなんですか？」

周囲がうろたえている事に疑問を持った佐久間が質問する。

「あんたたちは先輩の力、知らないの？」

「え？知ってますけど。」

高城の答えに返す佐久間。

「なら、分かるでしょ。先輩がいればアタシたちの生存率がグッと

上がるのよ。もしないんなら、いないで行動を考えないと。」

両者の会話は一応終結した。ただ司の能力が「オルフェノク化」と「未来視・過去視」というすれ違いがあったのだが、仙石たちは「未来視」が今後の生存率の上昇に係わってくると受け取ったので、それ以上は質問しなかった。なので、両者の間で司の力についてのすれ違いがそのままになった。

「それよりも、ここにいる人たちは脱出する事を考えている人たちいいのですか？」

昼食や自己紹介、先輩についての話が一段落したところで真理谷が切り出す。司たちが戻ってこないことでもかなりざわついていたが、全員の空腹もなくなったせいが意外と落ち着いている。

「僕たちは最初バスで脱出するつもりだったんだけど……」

「バスが横転しちゃってここに避難したのよ。」

小室が言い籠った答えを宮本が答える。

「それも水川先輩たちから聞きました。それで、先輩たちはこれからどうするつもりで？正直もうこの学校に安全な場所は無いと思います。防犯設備の整っていた女子寮も3階以外は化け物がうろついています。もし、寮内の化け物を全部駆逐できれば場所の確保は出

来ますが、食料の確保が面倒です。」

真理谷が自分たちのいた寮の状況を話しながら自分の考えを言う。

「男子寮はどうなんだよ。」

立て籠もる事を前提にしていた金髪が聞く。

「おそらくもう化け物だらけでしょう。女子寮は防犯の面でシャッターなどもあつたんですが、それでもやられてしまいましたから。」

「くそ！まだ遠くにはいつてないよな。やっぱりあいつを見つけないと。」

「止めたほうがいいわよ。」

金髪の会話に高城が割り込む。

「なんでだよ！」

「戻ってくるかも分からない人を当てにしているも、どうにもならないわよ。探しに行つてやられたら本末転倒よ。第一、先輩が寄宿舎で暴れたらどうなるのよ。最悪、寄宿舎が倒壊するわ。」

変身した司が狭い寄宿舎で戦う様子を化学室の面々は予想した。あの斧が 奴ら ごと壁を叩き壊し、風通しがもの凄く良くなった寄宿舎の姿を予想した。そもそも寄宿舎の廊下や天井がああ姿で歩けるだけの幅があるのだろうか。

この答えにはさすがの金髪も黙る。

仙石たちは司たちがそんなに周囲を破壊するほどすごい使い手なの

か、というように受け取っている。

「戻ってくるぜ？先輩たち。」

この宮内の答えに注目する小室たち。

「なんで分かるんだ？」

「だって、先輩たちは部屋寄ってからここに来るって言ってたぜ。だから、そのうち来るだろ。」

小室の疑問に再び答える宮内。仙石たちにも聞くがそうだと聞く。その答えに一同安心したような顔をする。

「とりあえず先輩たちがここに来るのなら、一安心なのかしら。」

ピリピリした空気が少し緩んだのか、高城が溜息をつきながら言う。

「先輩が来るまで、情報を整理しといたほうが良さそうね。ねえ、あんたたちが 奴ら を見て思ったこと話さない。余裕があるうちに対策は立てとかないと。」

一応は纏まりを得た化学室の面々。気付かないすれ違いもありながら、 奴ら の事について検討を始める。その中心となるのは2年の才女高城と新入生のトップ真理谷。

この2人がする論議がいったいどんなものになるのか。

災害対策研究会部室

「こんなものか？しかし、使わない物の方が圧倒的に多いな。勿体無い。」

ロッカーの中にある備品を見て言う装備を整えた司。3つのロッカーの中はそれほど減っておらず、まだまだぎっちり入っている。

「化学室のものたちに渡したらどうだ？」

同じく装備を整えた冴子が小室たちにこれらの装備を渡すことを提案する。

「いや、止めとく。渡した途端に向けられたら冗談にもならない。そもそもこれだけ準備したのは俺なのに、なんで俺を利用しようとする奴らにわざわざあげないといけないんだ。」

司は化学室の会話を盗み聞きしたときのことを思い出し、渡すことを止めるように言う。

「しかし、数少ない生存者だぞ。それにあの1年生たちもいるのだろっ。」

「悪いけど、いくら俺が一方的に知っているからといって、赤の他人である事は変わらないんだ。そこまで面倒みてやる義理は無い。情報やパンはやったし、いいだろ。」

そう言ってロッカーの扉を閉める司。

「そうか…」

少し残念そうに言う冴子。

「ま、俺たちがいなくなった後でここをどうしようが知るところじゃないけどな。」

扉を閉めるがロッカーの鍵は掛けない。

「司。」

「はあ、俺も甘いのかな。後ですっごい後悔しそうなことになったらどうしよう。」

少し嬉しそうに名前を呼ぶ冴子。

「あ、そうだ。念のためこれしておくの忘れてた。」

そう言って再びロッカーを開けて司が取り出したのは、

ファブリーズ。

「そんなものどうするのだ?」

当然の如く冴子は疑問を言う。



「いや、ゾンビどもが、もし匂いに反応する可能性も無いとはいえないと思うから念のため。」

「正面玄関で小室君が証明したじゃないか。」

「念のためだから、そのへんも気にしない。」

服やリュックにファブリーズを吹き付ける司。体の方はシャワーのあとにちゃんと制汗スプレーをしたから特に問題は無い。

スプレーし終わった後、それらもリュックに入れて背負った。

司はクロスボウをすぐ撃てる状態に、冴子はすぐ刀を抜ける常態になっている。

「じゃあ、行くか。冴子。」

「そうだな。」

2人は警戒しながら部室を後にする。

ようやく学校の生存者たちが1箇所に集う。いったい彼らはどういった行動をとるのであるうか。

## 時間経過表

10:00	事件発生
11:30	学校脱出失敗　バス横転
12:00	化学室避難
12:30	司　冴子　昼食後　寄宿舎へ
12:45	エデンの檻のメンバーと会う
13:00	冴子の部屋にてシャワー
13:20	エデンのメンバー　化学室へ
13:45	災害対策研究室へ到着
14:10	司　冴子　化学室へ

一応これが大まかな時間の流れです。アニメでは夕方でしたが、私は朝に発生したようにしました。司と冴子は2時間近く外出していました。

第十五話 邂逅した主人公たち（後書き）

なんとかできましたので投稿します遅くなっていますみません。

また今後の展開では修正するかもです。

時間の経過を上げてみました。

よろしくお願いします。

## 第十六話 集った生存者たち（前書き）

出来あがりでしたので、投稿します。

纏めるのって本当に難しいです。本当は2年才女高城と1年TOP  
真理谷の 奴ら に対しての検討会の幕間を考えていたのですが、  
それだとまたいつまでたっても学校から出られそうにないのでとば  
しました。

かなり勝手な司かもしれませんが、よろしく願います。

気絶していた人たちの記述を加えました。

## 第十六話 集った生存者たち

第十六話 集った生存者たち

ザン！

「しかし、今思えばずいぶんと時間がかかったな。」

部室で装備を整え、化学室へ向かう2人。校舎を進みながら冴子は司に言う。

「確か、化学室を出たのが12時過ぎくらいだったから、2時間近く出ていた事になるな。もう誰もいなかったりしてな。」

パッシュ！

司は自分の左手首を見て言う。司の左腕にしている時計は午後2時を示していた。この時計は司が中学の頃から愛用している耐衝撃・防水に優れたG・SHOCKである。この世界にもあった。

「いない場合はどうする気だ？」

「どの道脱出するだけだよ。しかし、予想以上にまだ校舎の中にいるな。やっぱり行きと同じく外から廻ったほうが良かったかな。」

パッシュ！ガチャ

パッシュ！ガチャ

そんな会話を小声でしながら廊下を進む2人。しかし、ただ会話をしているだけではない。まだ校舎の中にはそれなりの数のゾンビたちがうろつろしている。バスの爆発音に釣られてそのまま窓を突き破って落ちたゾンビもいたみたいだが、全部のゾンビが上手く落ちるようなことはなかった。

そんな未だにゾンビが徘徊している校舎を冴子は日本刀を振り回し、司はクロスボウを撃ち時には斧を振りおろし、ゾンビたちを倒しながら進んでいく。

「この 吉次よしづくの具合も確かめておきたい。実戦を兼ねてこのまま行こう。」

最初来たときのように外から迂回する案を司が出すが、冴子は校舎のルート我希望する。

「ま、それもいいか。クロスボウの練習にもなるし。しかし、矢の装填の手間だけじゃなく、矢の残数を気に掛けるほうが面倒に思えるよ。」

司も冴子の実戦演習に同意する。クロスボウの練習はしていたが、不規則に動くものに当てる練習はほとんどしていなかったため、これはちょうどいい経験になるであろうと思った。

だが、弱点である頭が左右だけでなく上下にも動くゾンビに当てる

のは意外と難しく、また一発で仕留めなければならぬという気概からか、仕留められない事が多かった。ピストル・クロスボウの矢はブレードヘッドを付けて殺傷力を上げることができないのも仕留め切れない原因の1つだった。

「平野の凄さが改めて分かるよ。連射できるとはいえ、ああもヘッドショットを決めてるんだもんな。」

数をこなすうちに、5メートル以内では確実に、10メートルではそれなりに仕留める事が出来るようになった。矢は倒したあと回収できるものは回収して使っているので減りは少ない。しかし、46回も繰り返し使っていると歪みが酷くなつて使えなくなってしまう。120本持つてきていた矢だが、外したものも含め30本は無くなつた。

「こりゃ、本当に戦闘は控えるべきだな。全滅させるなら変身した方がずっと経済的だよ。冴子、刀の方はどうだ？」

司は冴子に聞く。

「問題ないよ。柄もグラつくことなく、しっかりと手になじむ。刃も歪みも無く、軽い。さすが戦国時代の刀だよ。」

「おい、なんかすつごい笑顔なんだが。そんなに実戦で刀を振り回せるのがいいのかよ。というか、ただ刀で斬ってみたくてこのルート選んだな。」

興奮したような笑顔の冴子を見て、司は指摘する。

「そんなことはないぞ。」

「めちゃくちや笑顔で返すなつての。説得力ゼロだ。もうさっさと行こう。」

そう言い、倒す事をよりも進む事を優先し、2人は化学室を目指すことにした。

「なんか、長かったな。他の人たちはとっくに脱出してるのに。」

「まだ中にいるぞ。話し声がかすかに聞こえる。」

「いや、そつち（生存者）じゃなくて、あつち（他の黙示録の作者の方たち）の話。」

「?????」

司のメタな発言に首をかしげる冴子。

「とにかく入ろう。仙石たちも来てるみたいだし。」



「そつだな。」

化学室の扉を開ける。

ガラガラ

「遅すぎるわよ、先輩たち。いったいなにしてい」

高城が真つ先に文句を言ってくるが途中で途切れる。他の化学室にいた者たちも司と冴子を見ているが、誰も言葉を発しない。あまりに静けさに司たちの方が居心地が悪くなってしまっくらいである。

「なんだ？なんで皆してポカンとしてるんだ？」

「司、それはお前の格好がすごいからじゃないのか？」

司の疑問に冴子が予想した答えを出す。

司の現在の服装は制服から普段着になっているのは特に驚くことはないが、上半身は特殊部隊が使うようなベストを着ていてミリタリーなりユックを背負い、左胸にはデカイナイフが見え、腰に血のついた斧、手にはクロスボウが握られている。

そんな司の姿を指摘した冴子だが、こちらも負けていない。

着ている服は制服だが、まず何より腰に差している刀に目が行く。一見模造刀に思えるが、司の格好の本格的なことからして、本物であろうと推測する。背負ったリュックは普通だが、なにやらスカートがやたら短くなっていることに目が行く。特に男性陣の目が。

そんなバリバリ戦闘スタイルの2人の姿に化学室のほとんどの者が思った。

あんたたち、いったい何者???

「仙石たちも無事に来れたみたいだな。」

「ええ、先輩のおかげです。ありがとうございます。」

化学室の中に入った司たちは先に来ていた仙石たちに話しかけた。しっかりとパンも持ってきたみたいで、みんなに配ったという。

「裏口から出たのか？」

「はい。正門は化け物だらけでしたから、裏口からこっそりと。」

「俺たちも同じだ。裏口は全然いなかったからな。」

無事寮から脱出した話をしていた。

「ところで先輩。あんた、その格好どうしたんだ？」

「そうよ、なによその格好。毒島先輩は刀まで持ってるし。」

「先輩の持ってるのはピストル型クロスボウ！強さは50 80ポンド！！室内などの近距離では充分に殺傷力があるクロスボウですね！！！！」

司たちの姿に対する質問を、宮内・高城・平野がする。平野に至っては装備の説明になっているが。

「こりゃ、私物だ。趣味も兼ねて部室に持ってきてたもんだ。」  
と答えるが、

「そんなんで納得できる範囲じゃないわ！！クロスボウとかはともかく、なんで斧があるのよ！！どんな趣味よ！！！！」

高城が吠える。まあ仕方がないかもしれない。クロスボウはサバイバルゲーム、日本刀は剣道部と繋がりが分かるが、斧をわざわざ使うような部活はそうそうないだろう。血が付いているが。

「気にすんな。部活とプライベートを兼ねてる。」

「じゃあ、毒島先輩のその格好は！？」

「どこかおかしいか？」

「……………もういいわ。」

司のうろたえる様子も冴子の疑問の欠片も感じないことから、疲れたような、諦めたような声を出す高城。

「先輩、それよりもこれからの事に付いて話しましょう。動くとしても、早い方がいいです。」

真理谷がそう進言する。

「そうです。とにかく先輩の意見を聞かせてください。」

小室もその進言に乗ってくる。

「意見って言っても、俺は冴子と脱出するぞ。で、家に帰って立て籠もるつもりだ。」

その答えにいち早く反応するものが居る。

「なんでわざわざ危険な街に行くんだよ。ここに立て籠もればいいじゃんか！」

「そうです！学校なら避難できますー！」

そう言ったのは金髪不良と根暗の黒上だった。元々学校の外に出るのは反対していたので、司が脱出を選ぶことが納得できない。

「いや、まだかなりゾンビたちいるぜ。こんなところじゃ落ち着いてトイレにも行けんぞ。」

「じゃあ、あんたが何とかしろよ！武器もあるんだしよー！」

「そうだよ。そんなに武器を持つてるなら何とかしてよー！」

まくし立てる2人。立て籠もることを考えていた者たちも期待しているような眼よりも「早く何とかしろ」のような非難の目をしている。

「悪いが俺は脱出するから余計な戦闘はせん。学校に立て籠もることを考えるなら、自分たちで何とかしてくれ。」

と司は言う。

「ふざけんな！！なんてあんな化け物たちの相手をしなきゃならないんだ！テメーがやれ！そんだけ力持つてるならテメーがやれよ！テメーにはその義務があるんだよ！！！」

狂ったように、そして悦に入ったようなことを言い放つ不良。その姿に羨望するものもいれば、言ったことの危うさに顔を引きつらせるものもいる。前者が立て籠もるもの、後者が脱出するものである。そんな金髪不良の姿を見て、動きだそうとするものが居る。日本刀を腰に差した冴子だ。

冴子は日本刀を抜き放ち、金髪不良の首筋にあてる。

「ヒイツ！？」「キヤア！」

自分の現状を見て声を出す金髪。それを見た周りの者たちも悲鳴を上げる。そして冴子は言い放つ。

「いい加減にしろよ、屑。貴様は何もせず全部他人任せか？何様のつもりだ。これ以上聞くに堪えない戯言を喋るなら、ここでお前を切り捨てる。」

冴子の声は本気だった。本気でこの金髪を切り捨てるつもりだった。

「ちょっと！？何してるんですか！？」

それを止めようとする仙石。場数を踏んでいるせいか、エデンのメンバーたちはいち早く回復して動いていた。

「ちょっとやめてください！ここで仲間割れしても仕方ないでしょう！」

赤神が仲裁しようとする。

「仲間？違うな。これは私たちを都合よく使おうとするゴミ虫だ。」

「な、なんだと！？」

ゴミ虫と言われて怒る不良だが、首に刀を突き付けられているので迫力がない。

「それでもやめてください。騒ぎ過ぎると化け物たちが来てしまいます。」

冷静に返す真理谷。ゾンビたちが来ると聞き、しぶしぶ刀を納める冴子。金髪不良はホツとしながらもしてやったりといった表情をしている。冴子は踵を返して司の傍に行く。  
一応殺戮の場にならずに済んだが、空気は果てしなく悪くなっている。下手をすればまた起きかねない。

「先輩たちは脱出する方向でいいんですね。」

空気を変えようと佐久間が切り出す。

「ああ。」「そうだ。」

そっけなく答える2人。司も動きはしなかったが不機嫌だった。ただ冴子が先に動いたので動かなかったただけである。

「はあ、なんで動く前に疲れなきやいけないのよ。」

高城がこの騒動に心労を感じたようであった。

「で、仕切り直すけど。もう一台のバスを使って脱出。それでいいわね、みんな。」

高城はそう言うが、全員が納得しているわけではなかった。立て籠もる組も、どうしようもないから、といった感じである。

「ところで先輩。その武器ってまだ余ってたりするの？」

武闘派の宮内がそう聞いてくる。

「ああ、まだあるぞ。」

その声で更に希望が出てくる。 奴ら を倒せる武器がある。 それだけでも充分心強い。

「なら早く持って来いよ！それにテメーは武器なんていらねーだろ。とつと寄こッガ!？」

金髪は最後まで言葉を言えなかった。司が殴り飛ばしたからである。

「ヒイ!!!??」「イヤーーーー!!」「キャーーーー!!!」

それも「ミノタウロス・オルフェノク」に変身して。手加減はもちろんしている。しなければ潰れたトマトの如くに弾ける。

だがイキナリ巨大な化け物が現れて人間を殴り飛ばせば、知っている人間でも驚くだろう。気絶していて直に見ていない宮本たちも驚いているが、知らなかった仙石たちの驚きはすごいものだった。今までに絶滅したデカイ猛獣とかは見たことがあるだろうが、人間がいきなり化け物に変わるなんて誰が予想できただろうか。あの冷静な真理谷も声も出せずに驚いている。

「イイカゲンニシロ。ソンナニ シニタイノカ?」

ミノタウロスのまま喋ると化学室の中の喧騒もウソのように静まり返る。司は変身を解き、全員に向き直る。

「俺が準備したもんをなんでわざわざお前らにやらないといけないんだ?甘えるな。頭の一つでも下げてることを考える。」

ケータイ持つてるやつで、赤外線機能の奴いるか?」

司は赤外線装置付きの携帯電話を持っているものが居ないか問う。全員が戸惑うまでもなく自分の携帯で当てはまるものはすぐに取り出そうとする。持っていたのは全体の三分の一程度。携帯は校則違反なので、持っているものはそれほど多くなかった。

「えっと、赤神と佐久間、おまえら、俺のケータイに番号とアドレス送ってくれ。」



その中から2名選んで司は自分のケータイに番号とアドレスを送らせる。

「よし、来た。登録完了。じゃあ、俺たちはもう行くからな。頑張っ  
って生き残れよ。」

「司、もう行くのか？」

「ああ、ここにいっても仕方がない。」

「それもそうだな。ではな。」

そんなやり取りを冴子として司は化学室から出ようとする。

「ま、待ちなさいよ！どこいくつもりよ！？」

出て行こうとする司と冴子を止めようとする高城。

「どこって、脱出するんだよ。俺のバイクで。悪いがお前らと居ても厄介事が増えるだけみたいだっ  
て分かったからな。」

やっぱりか、そんな思いが高城の中を通り過ぎる。高城が懸念したように司たちは自分のバイクで脱出するつもりであった。学校に許可を貰ってバイクを学校に置いておけるようにしておいたのもこのためである。

「先輩、待つてください！これからどうするつもりなんですか！？」

小室が焦ったように訊ねてくる。

「さつきも言ったと思うけど、家に帰るつもりだよ。避難場所とかも安全とは思えないからな。家族はいないから問題ないよ。」

取り付く島もない、司たちを引きとめる材料はないだろう。

「私たち、どうすればいいんですか？」「助けてください。」

と言った声も聞こえる。

「俺にはお前たちを助ける義務も理由も、利益もない。自分の命くらい自分で責任持ってなんとかするんだな。」

司は冷たく言い捨てる。

「待ってください。」

教室を出ようとする司に今度は仙石が呼び止める。

「先輩、武器とかあるんですよね？」

「ああ、部室のロッカーに置いてある。」

「ならお願いします。その武器を使わせてください。どうかお願いします。」

そう仙石は言い、頭を下げてきた。周囲の人間は仙石の行動に戸惑っている。確かに司は頭を下げることを考えると言ったが、それをしたからと言って使わせてくれるとは思えない。

司たちは仙石をそのままに化学室の扉に手をかける。

「俺の部室は一階の一番端の第三化学室だ。鍵は空いてる。」  
そう言い残し、教室から出て行った。

「司、どうして教えただ？」

化学室から出た2人はバイク置き場を目指している。その途中で冴子は司が仙石に教えたことについて尋ねた。

「きちんと頼めば俺も無碍にはしない。もう戻ってくる予定のないこの物資は無駄になるからな。愛着のある部室だがかまわない。でも、あいつらは全部他人に任せて、文句だけ言うしかしない奴らだ。そんな礼儀知らずの奴らにやりたくない。」

そういつて進む司。

「ふふ。本当に優しいな、司は。」

そういつて冴子は腕を絡めてくる。

「おい、冴子。」

「いいではないか。司はいつでも司だって分かって、私はうれしいのだから。」

そんな会話をしながら、司と冴子は2人だけで脱出する。

主人公メンバーと早くも分かれることになった2人。一体どんな未来になるのか。

## 第十六話 集った生存者たち（後書き）

こんなに早く主人公たちから分かれました。

仙石たちは司の事を聞くよりも生き残ることを優先し、武器の事を尋ねました。このあたり修羅場をくぐった経験からだと思っていただけば。

ようやく学校から出られそうです。

これからもよろしく願います。

## 第十七話 脱出！藤見学園！（前書き）

思ったより早く出来上がったので投稿します。

今回もあまり進んでいませんが、ようやく学園から脱出します。それまでにもちよっとイベントがあるんですが。

では、ごっご。

読み直してちょっとおかしいと思ったので、構成を変えました。

## 第十七話 脱出！藤見学園！

### 第一七話 脱出！藤見学園！

小室や仙石といった「学園黙示録」や「エデンの檻」の主人公たちと別行動をとることにした司と冴子。2人は自分たちだけで脱出するために司のバイクが置いてある学校の裏門の近くの自転車置き場に向かっていた。

「こつちはほとんどいないな。なんでだろ？」

「おそらくほとんどの生徒が逃げるときに校庭の方に向かったのと、バスの爆発音に釣られたせいだろう。だが油断するなよ、司。」

「分かってるよ、冴子。油断が死にマジで直結しちまうからな。」

そう言いながら2人は人間どころかゾンビもない校舎の裏庭を通りながら、自転車置き場へ向かう。

「確認を忘れていたのだが、司。バイクの鍵は持っているのか？」

「バッチシ。ほらこれ。職員室に行ったときに回収しといた。」

鍵を見せる司。普段司のバイクの鍵は教員の車のカギと一緒に職員室に保管されている。もし司がバイクを乗るときには届け出をしなければ乗れないというのが、学園側が出した条件の1つであった。

話をしているうちに裏門が見え、その近くにある自転車置き場に着いた。周囲にゾンビは一体だけいた。裏門の警備員だった。

「あのおじさんもやられちゃったか。いろいろ話したことあるんだけどな。」

「そうだな。知っている人が亡くなるのではなく、化け物になってしまう。こんな不条理がこれからの日常になってしまうのか。」

2人は裏門の警備員と面識があった。ほぼ毎週土日にはバイクを使って学校の外に出る司たちである。その際に注意を受けたり、司の乗っているバイクの事で話したり、そんな世間話を警備員のおじさんとしていた。

アあ嗚呼

こちらに気付いたのか、警備員”だった”おじさんが向かってくる。その足取りは遅いが着実にこちらに近づいてきている。

「おじさん、ごめんなさい。成仏して。」

そう言った司はクロスボウを向け、引き金を引く。

パツシュ

バタン

司が撃ったその矢は警備員の頭に吸い込まれ、その警備員は二度と



起き上がらなくなった。

「司、大丈夫か？」

「え？」

司の目は少し潤んでいた。

「はは。覚悟していたことなのに、本当にやるのは結構辛いね。仲の良かった人が死ぬだけじゃなく、自分の手で殺すってこんなに辛いんだな。」

そう言いながら目を拭う司。

「司。彼をどこかに運ぼう。せめて眠る場所くらい良い場所にしてあげよう。」

「うん。そうだな。無造作に道路の上は嫌だよな。」

そう言つて2人は警備員の死体を芝生の上に運ぶ。司は自分のリュックからシャツを取り出し、死体に掛ける。近くに咲いていた花も添え、そして2人で手を合わせる。

「おじさん。このネーム、形見として貰っておきます。」

「せめて来世で幸せになってください。」

司は形見として警備員の胸にあったネームプレートをもらい、バイクの置いてある方向に向かった。冴子が司の肩を抱きながら。

2人は警戒しながらバイクに近づく。自転車置き場は簡素的なものながらしっかりと屋根がついていて、片面には壁もある。

司のバイクはしっかりとボディカバー（9450円）もかけられていて、風雨にさらされることもない。

司がカバーを取り外し、バイクの準備をする。冴子は周囲を警戒する。

? フォルツァZ・オーディオパッケージ（ホワイト） 7612  
50円（アクセサリ別）

全長約2メートル、重量約200キロ、燃料タンク容量12リットル、排気量248ccの大型スクーター。2人乗りが可能。

後部にトップボックスを搭載して積みこめる容量を増やし、グリップにもグリップヒーターを付けて雨天や冬も快適に運転できるようにした。他にもいろんなアクセサリを付けている。

司のバイク。司は中型自動二輪免許を持っているので400ccの排気量のバイクまでの乗ることが出来るが、司は250ccの大型スクーターを選んだ。

その一番の理由が荷物を積みこめる容量である。大型スクーターは座席の下に荷物を積み込む事ができるラゲージボックスがあり、そ

の容量は63リットルで、ヘルメットだけでなく小さめのボストンバックまで入ってしまうほどである。さらに後部にトップボックス（容量40リットル）を付けることによって倍近くにする事が可能。司と冴子のヘルメットを普段から入れておくだけでなく、現在背負っているリュックも余裕で入ってしまう。

ボディの色がホワイトなのは学校の条件の1つ。目立たない色でなければならなかった。司は黒や赤にしたかったが。

司はまずクロスボウをハンドルの中央のアタッチメントに固定する。これはもともとバイク用の灰皿を取り付けるためのアタッチメントだったが、これにクロスボウを固定できるようにした。小銃くらいあるクロスボウは無理だが、ピストルクロスボウなら多少計器が見辛くなるが固定できる。もちろんすぐに取り外し、クロスボウを撃つこともできる。

次に後ろのトップボックスを開け自分のヘルメットを取り出し、そこに自分のリュックを入れる。ちなみに現在手袋はしているので、普段使っているバイク用の手袋はしない。続いて座席のラケージボックスを開け、冴子の分のヘルメットを取り出す。

「よし、冴子荷物を。それからメット。」

冴子にヘルメットを渡し、冴子の荷物を入れる。

司と冴子のかぶるヘルメットは違う。

司のはシステムと呼ばれる種類のヘルメットで、チンガードが開く新しいスタイル。オープンフェイスとフルフェイスの特性を持ち合わせる独特なモデルである。モデルによってはオープンフェイスにスタイルチェンジできるものもある。

【長所】 利便性が高い。フルフェイスまでとはいかないですが、高い安全性をもつ。

【短所】 ギミックが多い分、他のモデルに比べ重さ、大きさがあ

る。  
冴子のかぶるヘルメットは、ハーフキャップである。さつと被れて携帯性のいいヘルメット。125cc以下のみの使用となるが、スクータークラスには便利の良いモデル。

【長所】 携帯性、利便性がよい。

【短所】 安全性では他のヘルメットより断然劣る。125cc以下の車両にしか使えない

冴子は耳まで覆われるのがあまり好きでないようで、このヘルメットになった。剣道の面で慣れているはずなのだが、あまり感覚を阻害したくないとのこと。

色は2人とも合わせて黒になっている。

「司、バイクのカバーはいいのか？」

冴子は司がバイクのカバーを積み込んでないところを見て、聞いた。

「ああ、もうだいぶ痛んでるし、結構かさばるから。」

「そうか。」

そう言っつてバイクを動かかし乗りやすい場所に移動させ、まず司が乗り安定させる。続いて冴子が乗り込む。

「冴子、刀は大丈夫か？」

「ああ、それほど邪魔にはなっていないよ。」

冴子の腰に差している日本刀がバイクに乗るとき邪魔になるかと思っただが、特に問題はなかったようである。

「じゃあ、行くか。」

エンジンをかける司。そして裏門へ向かう。

裏門の大きいは閉まっていたが、小さいほうの門は空いていた。バイク一台に充分に通ることのできる広さだった。

門も無事潜り抜け、2人は学校から脱出した。

サクラ並木の坂を下りながら街が見渡せるところまで来た。街は所々から黒い煙を出し、日常とは明らかに異なる風景となっていた。

「冴子。」

「ん？」

「さっきはありがとうな。」

「なんのことだ？」

「なんでもない。」

「そうか。司。」

「ん？」

「私はずっとお前と居るからな。置いて行ったりしないから。」

「……ああ！」

そんな会話をしながら2人は街に向かう。

こんなに自分の事を思いやってくれる冴子を守ると司は誓い、司と共に生きるという想いを冴子は誓う。

崩壊してしまった世界で、これから何が2人を待ち受けるのであるうか。

## 第十七話 脱出！藤見学園！（後書き）

今更な疑問なんですが、「藤見」学園と「藤美」学園、どちらなんでしょう。

原作や公式サイトでちまちま違っていて、自分でもどちらで書いているのか時々分からなくなります。（その時見る資料で）

今回ちょっとした別れがありました。この世界ではこうというのが溢れているのでは、と思いききました。

次は化学室の面々か、このまま司と冴子にしようか、ちょっと迷っています。

これからもどうかよろしくお願いします。

## 第十八話 主人公達が通るはずだった道（前書き）

遅くなりました。第十八話投稿します。

司たち脱出組みか、化学室の主人公組みかを書くのか迷いましたが、司たちを先に書くことにしました。科学室を希望した方たちが多かったのですが、すみません。一区切りまで行ったら、科学室組みに切り替えようと思います。

では、どうぞ。



## 第十八話 主人公達が通るはずだった道

第十八話 主人公達が通るはずだった道

無事に藤見学園から脱出した司と冴子。2人はバイクに乗って街を目指していた。街からは所々から黒煙が立ち上っているのが見える。現在の時刻は午後三時を廻った所である。まだ春とはいえもう2時間もすれば薄暗くなってしまう。早く安心して夜を明かせるような場所に辿り着く必要がある。

まだ街には入っておらず、周りには民家が立ち並ぶ住宅地や田んぼが続いている。ここから見える町並みはいつもとほとんど変わらないが、ただやたらと道路に事故車が多い上、静まり返っている。いくつも事故が起こってるのにパトカーも救急車も来ていないし野次馬もない。時たま対向車が来るが、ものすごいスピードで通り過ぎていく。

異常だと言うことが感じ取れる。

「ゴーストタウンって、こついうのを言うのかな!」

バイクに乗っているため、司が少し大きめの声で冴子に話しかける。

「もう少し行けば!正しくその言葉通りの!光景が見れるんじゃないのか!」

そんな会話をしながら2人はバイクを走らせる。

しかし、街に繋がっている道路の先に一際大きな黒煙が上がっていた。その黒煙に近づいていくと、道路が炎で寸断されていた。どうやらバスか何かが事故を起こして道路を塞いでしまったようである。相当激しく燃えている上、道路には大型車両の部品が散乱している。

「こりゃ、回り道したほうが良さそうだな。」

「どかさないのか？」

「どかしても通れる保障無いよ。まだ迂回したほうがいい。それにもともと街の大通りは迂回していくつもりだったし、迂回するのがちょっと早くなっただけだ。」

「なぜ迂回するつもりだったのだ？」

元々迂回するつもりだったと言っ司に疑問を持つ冴子。

「いや、もし暴徒に会う様なことになったら面倒くさいと思ってな。猟銃とか持ち出して来たら咄嗟に対抗できる手段が無い。」

「暴徒？いくらなんでもそれは無いんじゃないのか？一応こは日本だぞ？」

迂回する理由に首を傾げる冴子。平和な日本で銃を持った暴徒が発生するなんてことはなかなか思い当たらないであろう。

「念には念をとってことだよ。正直、ちょっとした油断が死に直結する

「からな。用心深いくらいでいいと思うぜ。学校でも身を持って知っ  
たし。」

「司がそう言うなら。確かに用心にこした事はない。」

「冴子も司の意見に納得した。」

そして2人を乗せたバイクは迂回して小さ目の通りを進む事にした。

「リアルゴーストタウン、マジで来た。」

「司、ふざけている余裕あるのかい？」

「いや、でもこれ。本気で不気味だぜ。」

2人は町に入ったばかりである。しかし、立ち並んでいる商店街も  
放置されている車にも、扉が開け放たれている飲食店にも、人影は  
全く無い。ただ所々におびただしい量の血溜まりが存在している。  
血の手型もある。これだけ殺戮の跡があるのにその原因がない。  
不気味な事この上ない。

「これがゲームなら店とかは入ってアイテム取るんだがな。」

「入ったところで襲い掛かられるのがおちだな。」

「で、怪我するのが映画での展開だな。」

「死ぬんじゃないのかい？」

そんな軽口を叩きあいながら2人はゴーストタウンを進む。しばらく進むと交差点の角から一台の車のフロントが見えた。

「おい、あれって。」

「パトカーだな。」

見えたのはパトカーだった。

「一応規則は守ってるから、補導はされんと思うが。」

「授業中に抜け出してるんだ。そのことで停止はさせられそうだな。」

そう言ってパトカーの方に進む2人。しかし、そんな軽口はすぐに終わる。

「これは。」

「ゾンビよりくるな、これ。」

パトカーの後ろには大型トラックが追突し、乗っていた2人の警官は座席に押しつぶされて圧迫死した状態になっていた。

「どつするのだ？これ。」

「銃とかあればもらっとくか。在って損はないだろうし。（これってたしか小室が体験した展開だよな。てことは、つぎは暴漢か？）」「バイクを降り、パトカーに近づく司。

「司、危険だぞ。ガソリンが。」

「大丈夫だと思う、たぶん。それよりも警戒を頼むよ。この事故死した人間ってゾンビになったりするの？」

警官がゾンビになって襲い掛かってこないかを警戒しながら、司は警官の荷物を探る。

「（バイクのガソリンは充分入ってるし、スタンドによる必要はない。暴漢イベントは起きないか。）」

荷物を探りながらそう思う司だった。

死体漁りを終えてバイクのところまで戻ってきた司たち。

戦利品は

? 取っ手の取れた38口径回転式拳銃 残弾5発

? 特殊警防×2

? 手錠×2

「銃はこれだけなのか？」

「ああ。もう一人のホルダーには銃は入ってなかった。壊れてた銃は撃てないけど、弾はあったから何かに使えるかと思って。（ここで銃入手イベントだったはずだが。脱出が遅くなった分変わったのか？）

「ふむ。この銃では撃てないことは無いが、安定しないな。」

「捨てるには惜しいよな。全部持って行こう。」

そういつて全ての戦利品をバイクの座席のラケージボックスに入れ、発進の準備をする。

「じゃあ行く「待ちな。「!？」

発進しようとして突然別の声に止められる。その声の方に目を向けると、銃を向けた太目の男がいた。

「そのバイクを寄越しな。殺されたくなかったらな。」

銃をこちらに向けつつにじり寄ってくる男。

「その銃、もしかして。」

「そうだ。その警官のだ。本物だぜ。」

冴子の問いに壊れたような笑みをして答える男。

「へー、すげー綺麗な女連れてるじゃねえか。そいつも寄越しな。」

「おまえ、ふざけてるのか。」

バイクを降りて司はその男に向かい合う。冴子はその後ろで戦闘態勢を取っている。

「ふざけてるか。ひゃわははは！大真面目だぜ。化け物だらけになった世界で生き残るには女がいねーとな。」

「（こいつ、たしかスタンドで現れる奴だったな。スタンドは近いけど、銃を持つてるなんて。予想外の展開だぜ。）」

予想外の事に頭を悩ませながら対処法を考える司。

「争ってる余裕は無いんだ。他を当たってくれ。」

「へ。」

パンツ

いきなり男がこちらに向けて発砲してきた。司は持ち前の反射神経でしゃがみ、銃弾は後ろの壁に当たった。

「てめえ。」

「運がいいな、お前。当てる気だったのに。でも今度ははずさねえぞ。弾も持っていたいねえし、とつとと消えな。」

再び狙いをつける男。冴子は刀を構え、今にも飛び出しそうにしている。

「冴子、大人しくしてくれ。」

「司!?!」

「そうそう、大人しくしりゃいいんだよ。」

司は立ち上がり、男に向き直る。そして一瞬で変身して男のすぐそばに移動する。

「な!?!?!」

ゴン!?!?!

拳骨を男の頭に振り落とす。男はばたりと倒れた。

「殺したのか?」

冴子は変身をといた司に近づきながら問いかける。

「いや、気絶しただけだと思うよ。殴り飛ばしても良かったんだけど、それだと銃がどっかに飛んで行っちゃいそうぞ。」



そう言つて男が落とした銃を拾つ司。

「すぐに移動しよう、冴子。俺達は音を立て過ぎたみたいだし。」

司の言葉に周りを見渡す冴子。そこには開け放たれた店からフラフラとこちらに向かつてくるゾンビの群れが見て取れた。

「やはり中にいたようだな。」

「家捜ししなくて正解だったぜ。」

回収した銃を今度は自分の腰のベルトに差す司。そして2人ともバイクに乗り込む。

「あの男はどうするのだ？」

「ほつとく。運がよければ助かるだろ。時間があれば身包みはがして早速手に入れた手錠で拘束して、道の真ん中に放置してやっても良かったんだがな。」

「それは……」

司の過激な処刑方法に言葉を詰まらせる冴子。

「今回も後で反省だな。危険地帯では気を抜かないようにしないと。」

「そうだな。ゾンビよりも人間に注意が必要だということだな。」

バイクを発進させる司。バイクの音に釣られてゾンビどもが振り返

るが、追いつけるはずがない。あの男はおそらく起きたとき驚いて声を上げ、ゾンビたちに食い殺されるだろう。今までゾンビはたくさん殺したが、人間を死に追いやったのは今回が初めてだ。だが、これがこれからの世界では日常になるのだ。それを拒絶すれば、いつか自分の命でツケを払う事になってしまうかもしれない。

「学校で大勢見捨てておきながら、言える台詞かな。」

「どうしたのだ？」

「いや、なんでもない。それより速いところ行こうか。暗くなる前に。」

バイクを走らせ迂回しつつ、御別川へ向かう。今日の夜を明かす場所に辿り着くために。壊れた世界で最初の夜を明かすために。

## 第十八話 主人公達が通るはずだった道（後書き）

微妙なオリジナル展開です。原作の脱出よりも数時間経過している  
ので、変化をつけてみました。

司たちは街中を通らずに、そのまま川の方に向かいます。それから  
は・・・

司が別の能力をもらい、別の世界に行っていたなら、というIFの  
世界を今創作中です。まだプロローグまでしか行っていませんが、  
行った世界は「怪物王女」です。ある程度出来上がったなら投稿しま  
すので、どうかよろしくお願いします。

これからも「獣戦士の誓い」をどうかよろしくお願いします。

第十九話 ようやく得られた休息、司の家へ（前書き）

ようやく出来上がりました。

今回も説明が多いかと思いますが、よろしくお願ひします。

## 第十九話 ようやく得られた休息、司の家へ

第十九話 ようやく得た休息、司の家へ

銃を持って襲ってきた暴漢を気絶させ、御別川の架かっている橋に向かつて再びバイクを走らす司と冴子。

街の中心部の大通りを通るのは避けて進む。

街のあちこちで車が炎上したりして火事が起こっていた。そんな中、生きている人間がゾンビ相手に戦っている。いや、戦っているとゆうより、なぶり殺しにしている。包丁や鉄パイプといった見慣れたものから、猟銃や日本刀といった入手方法を知りたい武器を振り回している者もいる。

全員に共通しているのは、顔が狂気に歪んでいることである。壊れたように笑いながら、ゾンビたちを殺しまわっている。

そんな狂った世界の様子を司は離れたところから双眼鏡を使って覗いていた。

「これは本気でシャレにならないな。」

覗いていた双眼鏡を冴子に渡す。

「司の言った通りだったな。完全に暴徒になっている。あの中を通り抜けるのは御免被りたいな。」

現在街の中心部の大通りでは市民たちが大暴れしている。正直、相手がゾンビだと認識しているのかも怪しい。傍を通ろうものなら、容赦なく襲いかかってきそうである。

司たちはその暴動の盛んな大通りではなく、平行して通っている細い道を使って橋を目指していた。そして現在、大通りの様子を見るためにここに来たのである。

「どうするのだ？このまま橋へ向かうのか？」

「とりあえずは橋の様子を見に行く。で、今日はもう休もう。思ったより学校の脱出に時間を喰ったからな。これじゃあ実家に着く前に夜になっちまうだろう。だから実家に向かうのは明日以降だ。」

「それじゃあ、“城傍”の家で？」

「ああ。そこで一晩明かしてからだな。」

今後の予定を簡単に話し合う。

司たちの言っていた「城傍」の家」というのは、司が購入した一軒家の名称である。司は原作が始まるまでに、世界のあちこちの土地を購入して家を建てていた。この床主市にも何軒かの家を購入している。どの名義も「水川司」であるから、場所にちなんだ名称で司と冴子は呼んでいる。「城傍」というのは、床主市の名所でもある“床主城”の近くにあるからそう名付けた。何の捻りもないが、ものすごく分かりやすい。

「じゃあ、行くぞ。」

Uターンし、大通りを通らず床主大橋に向かった。

「予想していたとはいえ、すごいな。」

「ああ、まっただ。」

あれから数分、司と冴子は床主大橋の前まで来ていた。だが、そこはすさまじい渋滞と混乱を引き起こしていた。

「機動隊の人たちすごいな。集団で盾を構えて押し返し、警棒で一人一人確実に潰していく。銃を使うよりずっと長く戦える。これは集団戦の参考になるな。」

「しかし相手がそれ以上の数だった場合、押し潰されてしまうとと思うぞ。ゾンビは異常な腕力を持っているのだから。」

「掴まれてもしない限りなんとかなるんじゃないか。腕力が強くても体重はそのままだろうし。1匹に対して2、3人でかかれば。」

そんな戦術論をしている2人。周りはひどい混乱だというのに、この2人の空間はものすごく落ち着いている。異様な光景かもしれないな

い。

「もう夕方も近いな。早く行こう。家に侵入者とかいたら困る。」

「その辺は抜かりないぜ。防犯システムのレベル上げておいた。超一流のプロでもない限り、侵入は不可能だ。」

「何時の間にか？」

「あの断末魔の放送の時。携帯で遠隔操作しておいた。」

悪戯っ子のように笑いながら言う司。その顔を見て冴子は呆れと頼もしさを感じた。

司の購入した通称「城傍の家」は、普通の一軒家とは明らかに異なる。見た目は小さな城である。

場所は床主大橋と御別橋のほぼ中間地点にあり、すぐ隣に床主市の名所である床主城がそびえ建っている。外観と隣に床主城もあるので、これも城の一部なんじゃないかと言われるほどである。

観光名所に便乗して建てたものらしいが、あまりに費用がかかり過ぎて売値が高いのと維持にも金がかかるということ、なかなか買手がつかなかったという設定がある。



そんな家を司は一括で購入したのである。買いに来た時、学生と言  
うこともあって信じられていなかったが、持ってきていた預金通帳  
の額を見せると態度を一変。さらに値段の倍額払うというところ、2、  
3日で家具の設置や水道なども使えるようにしてくれて、書類手続  
きまでしてくれたのである。

お金に力つてすごい、とつくづく思った司であった。

まず家の1階部分は駐車場と倉庫、そしてその周囲を石垣で囲まれ  
ている。その石垣の上に家が建っているのである。家は2階建の日  
本家屋でさらに周囲は頑丈な白い壁で囲まれている。石垣の高さも  
あって、実質3階建の高さで周囲を見渡せる。

出入り口は正面に車が入れるくらい大きな門があり、裏に小さな門  
がある。石垣の下にはさらに地下室もあり、その広さもかなりのも  
のである。

防犯設備として頑丈な扉や二重窓がついていたが、司はさらに設備  
を拡張した。その結果、

「着いたぞ。」

「なんだか、家の周囲がまずいことになっているな。」

家の周囲には死体が数体ある。ゾンビに噛まれたとか、殴り殺され  
たとかではなく、転落死したような死体だ。

「大方、家に侵入しようとして石垣をよじ登ったんだろう。で、壁  
の電気ショックで転落した。」

扉は金庫の如く頑丈なので、重機でも持つてこなければ扉をぶち破ることはできない。石垣も滑らかにして、そう簡単によじ登れないようにはなっているが、1階分の高さなので車などを足場にすれば登ることは可能なのである。

そこで司は壁の屋根の部分に電流を流す仕組みにしたのである。普段は流れていないが、司の携帯からくる信号でセキュリティレベルが上げられると作動する。その電圧は100V、家庭用の電圧であるが充分怯む。加えて壁は2メートルの高さがありネズミ返しのように外側に反っているため、電流に怯み、そのまま約4メートル下に落下したのである。

4メートルとはいえ打ち所が悪ければ死ぬ高さ。

ここに残っている死体は運悪く死んだ侵入者のなれの果てというわけだ。

「以前、セキュリティの事は聞いていたが、これはやり過ぎなんじゃないのか？」

冴子がこの現状を咎めるように言う。

「やり過ぎだとは思っよ。でも、こうでもしないと安全な場所が確保できないのが今だよ。悪いけど、無断侵入しようとした人を助けることはできない。下手をすれば自分たちが殺される可能性もある。」

司の言ったことは推測でしかないが、この壊れてしまった世界では充分にありえる事態である。実際に街中では殺し合いが起こつたことも考えると、悪意ある人間を排除することも必要な手段である。

「こんな世界がこれからも続くのか。」

「とにかく今日はもう休もう。冴子、警戒を頼むよ。家に帰ってくるのを待ち構えている奴もいるかもしれないから。」

そう言つてバイクを降りて鍵を開けようとする司、周囲を警戒する冴子。

何事のなく扉の鍵は開き、無事に入ることができた。

「家の中に異常はないな。」

「これだけセキュリティに守られているのに、見廻る必要があったのかい？」

「レベルを上げる前に入られた可能性もないとは言えないからな。」  
屋敷に帰った2人はまず屋敷内の見廻りを行った。もし侵入者が居た場合を考えての事である。ばらばらに見廻るのではなく、2人はあまり離れずに見廻つたため、すこし時間がかかつてしまった。

「風呂のスイッチは入れたし、後は夕飯と車の準備か。」

「冷蔵庫にあまり食料が残ってなかったぞ。どうするのだ？」

「しまった。ハウスキーパーの合間だったか。」

この家も含めて、定期的にハウスキーパーを雇って清掃を頼んでいる。家の掃除のほかに、食料の買い出しも最近追加で依頼したのだが、ちょうど補充する前にこの事件が起こり補充出来ていなかったようである。

「しかたがない、近くのスーパーに行くか。」

「危険じゃないのか？」

「でも、もう生鮮食材を食べなくなりそうだし、出来るだけ買ってきたい。」

もはや店が普通に販売することはできなくなるだろう。そうなる前に普通の食事をしておきたかったのが、司の気持ちである。

司たちは空のリュックを持ってすぐ裏のスーパーマーケットに来た。昔からある店で、司もこの家に泊まったときにはよく足りないものを買いに来ていた。

そのスーパーも今はがらんとしている。店の音楽はいつも通りに流れているが人の気配がほとんどしない。ただ、店内にフラフラとした人間が何人かいる。どうやらゾンビが店内の音楽に惑わされてフラフラ当てもなく彷徨っているようである。

「野菜とかはほとんど手付かずだな。魚も。」

「そりゃ、こんな災害が起こったときってカップ麺とか缶詰とか保存食を選ぶだろうな。すぐに腐って食べられなくなる肉や魚はあんまり手を出さないだろう。」

野菜や魚、肉を手当たり次第にリュックに入れていく2人。時々いるゾンビは司のピストルクロスボウで手早く片付けている。慣れたものである。

「米とかは大丈夫なのか？」

「保存の利く炭水化物系は相当の備蓄がある。でも、せっかくだから新米をもらっていくか。」

そういつて5キロ入りの新米を取る。

「あと牛乳とかも欲しいな。パンとかはもう残ってないか。アイスは……」

なんでも貰い放題だと思うとついついいろんなものに目が行く。そんなこんなでリュックは一杯になってしまった。

「司、入れすぎじゃないのか？」

「あははは。うん、俺もそう思う。」

レジまで来た司と冴子。司の持ってきた大きなリュックはパンパンに膨らんでいる。レジにももう誰もいなかったが、財布から5万ほど出して置いておく。

「置いても意味が無いんじゃないのかい。」

「ただの自己満足だ。せつかくATMで下ろしたんだし、せめて置いていきたい。」

変なところで律儀な司であった。

「もう暗くなってきたな。」

時間は午後5時前、季節は春なのでもうこの時間帯になると太陽が沈もうとしている。買い物を終えて家に向かっている2人。もう周囲は薄暗くなってきた。

「これが最初の夜になるわけか。一体どうなる事やら。」

「橋がうるさいから、大丈夫だとは思っけど。」

あああああ

パシユ！ガチャ

家に帰る道筋でもゾンビはうつっている。進路上にいるモノは倒して進んでいる。時々、生きた人間が戦っているのを見かけるが、うつろたえて逃げたり食われたりしている。また時々、司たちの持つ

ている武器を奪おうと襲い掛かる人間もいたが振り返ちにしていた。

ガチャン

「無事に帰ってこれたな。」

「ああ。もう一度シャワーを浴びたいよ。」

「俺もひとつ風呂浴びて寝たいよ。」

「でも時間はそれを許してくれない、だろ。」

「辛いことにな。」

無事に家まで帰ってきた2人。しかし、2人にはこれからやらなくてはならないことがある。

「冴子、夕飯と弁当を頼む、多めで。俺は車に荷物を積み込むよ。」

「ああ、腕によりを掛けて作るよ。」

「2人だけだと仕事量が増えるのが難点だな。」

脱出の準備を2人だけでやらなくてはならない。少人数行動をとると、1人でなんでもしなくてはならなくなるのが問題点である。

「そう文句を言うな。2人つきりなんだぞ。」

「ははは。」

行動を始める2人。

原作から離れた2人の、初めての夜が今始まる。



第十九話 ようやく得られた休息、司の家へ（後書き）

一応、ここで司・冴子のターンは一区切りです。

次は学校に残された原作メンバーとエデンのメンバーの行動を書く予定です。

これからもよろしく願います。

## 第二十話 学園の残された者たち（前書き）

遅くなってしまうてすみません。1カ月ぶりの投稿になります。

今回は学園に残された黙示録やエデンのメンバーの行動です。ご都合主義かもしれませんが、よろしく願います。

## 第二十話 学園の残された者たち

第二十話 学園に残されたものたち

「これって余ってるって言うレベルじゃないでしょう。先輩達が持ってたのより遥かに多いじゃない。」

「それには同感です。武器だけでも全員に配れるくらいあります。」

災害対策研究会の部室の中に設置されている3つのロッカーの中身を見て呆れたように言う高城と真理谷。

他の者達もこれらのロッカー満杯に詰まっている武器や防護服、食料といった物資に様々な表情をしている。あつけにとられている者、希望を抱くもの、過剰に興奮しているもの。

「これはクロスボウ コンパウンド！！狩猟で使われる強力な奴で、しかも全ての矢にはブレードヘッドが装着済み！！鹿どころか熊でも殺せる！！さらにさらに！！装填しやすいコッキング・メカが装着されてる！スコープまで！！これならいくらでも撃てるぞー！！！！！！」

……ロッカーの中身だけでなく、酷く豹変した平野にもあつけに取られている。

現在化学室に残された全員がここ、災害対策研究会の部室に移動している。司たちが出て行った後、みんながすんなり移動したわけ

はない。ここに来るまで、またひと悶着あったのであった。

《司たちが出て行った後の化学室》

司と冴子が化学室を出て行ったあと、仙石はすぐに行動を起こした。

「なあ、真理谷。学校の中の地図ってあるか？見せてくれ。」

「分かった。ちょっと待ってくれ。」

仙石に頼まれた真理谷は自分のパソコンを起動させ、藤見学園の全体地図を表示させる。仙石の行動性と判断力を知っているので疑問を持たずに行動に移す。

「僕達が現在居るのがここ、第一化学室。先輩が言っていた第三化学室はここだ。かなり離れているぞ。校舎内を通るより外から行つたほうが良さそうだ。」

表示された学園の地図を見せながら意見を言う真理谷。学園の地図までパソコンに入力させているのはさすがであると言えよう。

「なら、俺と雪、それと宮内来てくれ。俺達三人が其処に行つて取つてくる。何かあれば、りおんの携帯に掛けるから。」

「大丈夫なの、アキラくん。わざわざ行かなくても。」

「そうとも言えないぞ、赤神。先輩達はクロスボウや日本刀を持っていた。少なくともそんな武器が余っていると考えられる。それに携帯を持っている赤神と佐久間がいるから、何かあれば連絡を取り合える。」

「という事は、アタシと仙石が前衛で、佐久間の奴が荷物持ちと補助ってところか。」

「うう、私としては残って先輩の事を詳しく聞きたかったんだけど。」

「だから文句言つな、雪。雪と真理谷が残ると分けた戦力バランスが悪いんだよ。」

そんな段取りを手早く仙石・真理谷・赤神・佐久間・宮内の5人は話し合っていた。

奴ら に対する最大の戦力と思われた水川司が離脱して未だ立ち直ってなかった化学室の中で、その光景は異様だったであろう。

司から武器の場所を聞き出しただけでなく、即座にルートを詮索し、行動要員を適切に選別した。

これは、あの弱肉強食の世界を生き抜いた経験が仙石たちにはあったからであろう。今は迷うよりもすぐに行動しなければならぬ、と判断したのである。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。何をするつもりなんだ？」

小室は一年生達が自分達だけで行動しようとしている事に戸惑い、

声を掛けた。が、すでに仙石たち3人は出て行っていた。

「何をつて、先輩の言つてた残つてる武器を取りに行くんですよ。今なら化け物たちも少なそうですし、少ない人数なら大丈夫だと思います。」

小室の問いに残つた真理谷が答える。

「あまり大人数で行くのは化け物たちを呼び寄せる事になるので、返つて危険です。それに携帯で連絡を取り合えるものが残っているので、何とかあります。」

真理谷の的確な意見に黙つてしまふ小室。

「確かに、大人数で行くのは危険性を高めるわ。数がどれだけあるかも分からないし、偵察もかねて少人数のほうがいいわね。もしものがあつても、被害も少なそうだし。」

「高城！お前！」

「ちよつと孝！落ち着いて！」

横から割り込んできた高城の冷酷な意見に声を荒げる小室とそれを宥める宮本。

「何よりあたし達は全員が万全の体制で行動できるわけじゃないんだから。自然と動けるものが偵察に行く事になるのよ。何より今は時間がないわ。迅速に行動しないと最悪ここで夜を明かす事になるわ。先輩がいなくなつた今、私達だけで 奴ら に対処しなくちゃいけない。強力な武器は少しでも欲しいわ。」

「ここで寝るの？？シャワーもベッドもないのに。」

鞠川が化学室で夜を明かすかもしれない事に不満を言うが、防犯や食料など様々な面でここに立て籠もるのは危険だというのは事実である。未だこの学校内には100人を超える 奴ら が生存者を求めて彷徨っているのだから。

「それよりも静香先生、診察をお願いできませんか？一応。」

話に割って入った石井が鞠川に治療をお願いする。彼の指さす方には失神した金髪不良がいた。

「あ、忘れてた。」

「んな奴ほつときなさいよ。起きても厄介事しか起こさないわよ、きつと。」

高城が非難する様に言う。そもそも彼が自分勝手なことばかり言った事が司たちに見限られる事になった大きな原因である。そんな奴が起きたところでまた騒ぐだけである。気を失っているがちゃんと呼吸はしているようなので、鞠川が簡単な診察をした後放置されることになった。

「先輩たちに聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

仙石たちがいない間に情報を整理するため、真理谷が高城に話しかける。

「聞きたいことって、なによ。」

「まず脱出したとして今夜どうするか、ということ。あと3、4時間もすれば日が暮れます。家族の安否を確認するにも時間が足りませし、食料もありません。加えて夜の行動は危険です。安心して休める場所の確保が必要になります。」

「そうよね。家族を探すにしてもこのままじゃ夜になるわ。夜に奴ら に出くわしたら最悪。今夜過ごせる場所を見つけないと。誰かの家を借りるのが一番良さそうだけど。」

そう言つて高城は一同を見渡す。

「ねえ、この中で家が近い人っている？出来れば橋を渡らない距離がいいわ。」

化学室に居る者たちはそれぞれの家の場所を確認するも、誰も条件に当てはまる者はいなかった。

「あたしの家も小室の家も橋の向こうだし。あんたたちは？」

「僕たちの実家は全員横浜なので、県外です。」

真理谷たちに聞くも良い答えは得られない。

「最悪の時はバスで夜を過ごす事しましょうか。」

「そうですね。」

脱出した場合、場所を確保できなければバスで夜を明かすということとで結論が出た



「次に一番聞きたいことだったのが、水川先輩のことについてです。」

「あれって一体何なんですか？人間がモンスターに変身するなんて、水川先輩は一体何者なんですか？」

司がミノタウロス・オルフェノクに変身したことについて真理谷と赤神が聞いてきた。エデンのメンバーが聞いていたのは司には未来予知といった超能力があるということ。あのような姿になることはさすがに予想の範囲を超えていた。

「あんたたち、先輩から聞いてたんじゃなかったの？」

高城は意外そうな顔でそう返した。真理谷たちは司の力のことも知っていると聞いていたので、なぜそれを聞くのか分からなかった。

「私達が聞いたのは、先輩が超能力を持っているということだったので。」

「超能力？あれも超能力と言えるけど？」

「いえ、聞いていたのは未来予知と過去透視なんです。この事件が起こる事も知っていたみたいで。」

赤神と高城が司の力についての意見を交換する。超能力と聞いてあの変身も充分超能力だと思った高城であったが、今回の事を予知していたと聞いたとき納得したものがあつた。

「なるほど。だからあそこまで本格的な武器や装備をしていたのね。」

あんな変身見た後じゃ、もう何を出しても驚かないどころか納得しちゃうかも。」

米神を押さえながら言う高城。

「先輩がこのことを予知していたって本当？」

「はい。その可能性は充分あると思います。」

予知があつたことを聞いてきた石井に可能性が高い事を告げる真理谷。

「だったら、なんで先輩は黙ってたんですか。こんなに大惨事になることを知っていたのに。警察とかに言っていれば。」

「そうよ。防げたかもしれないじゃない。あいつなんで黙ったのよ。」

石井に意見に紫藤の一緒に乗り込んだ夕樹が賛同する。

「まさか、あいつ自分だけ助かるために」

「はいはい。バカな妄想は其処までよ。」

また変な方向に行こうとしていた意見を手を叩いた高城が止める。

「考えてもみなさいよ。こんなゲームや映画みたいなことが起こるなんて事を、なんの証拠もなしに警察や報道機関に行ってみなさい。門前払いどころかそのまま警察にやっかいになるわよ。」

「で、でも、予知してるんでしょ。だつたら。」

「だ・か・ら！！予知なんて事は証明のしようがないのよ！起こつてからでないと証明できないじゃない！こんな常識はずれの事が起こるなんて現在科学でも証明できるかどうか分からないわ。そんなことが起こると言つても、笑い話か精神異常者の烙印押されてお終いよ。」

そう言われてしぶしぶ納得する一同。小室も最初なにか言いかけたが、高城に予知の証明のしようがないことを言われて黙つた。叫んだせいで息が切れたのか荒々しい呼吸をする高城。そんな高城に再び真理谷が話しかける。

「先輩、そろそろいいですか。水川先輩の変身について聞きたいのですが。」

「と、そうだったわね。アタシたちもあんまり詳しくないんだけど。」

そういい、司が教えてくれたオルフェノクのことを話し出した。その話、もし佐久間がいたなら目をキラキラとさせていただろう。

ブーンブーン

なにやら音がする。なにかが振動する音である。

「あ、雪ちゃんからだ。」

音源は赤神の持つ携帯電話のバイブレーションだった。化け物たちに気付かれないようにバイブレーションのマネーモードにしていたのである。

「もしもし、雪ちゃん？」

『りおんちゃん？今先輩の言ってた化学室にいるんだけど……』

「無事着いたんだ。よかった。何かあったの？」

『いや、あつたにはあつたんだよ。むしろありすぎたというか……』

「ありすぎた？どづいつこと？」

『うんと、とりあえずアキラくんが変わるね。』

「うん分かった。」

『りおんか。こっちは無事に着いたぜ。化け物たちも全然いなかった。ただな……』

「良かった。でもどうしたの？雪ちゃんもそんなこと言ってたけど。」

「

『ちよつと真理谷に替わってくれねーか？これはあいつのほつが良  
さそつだから。』

「一体どうしたんだ？あつたんだろ。」

『あつたぜ。これでもかつて位。』

「？持つて来ればいいじゃないか。一体どうしたんだ？」

『量が凄いんだよ。とてもじゃないが、3人じゃ全然足りない。』

「何？いつたいどれだけあるんだ？」

『………大きいロッカー3個分。』

「なに！？間違いじゃないのか？多すぎだろ、いくらなんでも。」

『これが本当なんだつて。だから人がとても足りなくて。』

「分かった、ちよつと待つてくれ。」

そついい、化学室の面々に向き直る真理谷。

「仙石は無事に着けたそつです。でもどうやら予想以上に武器があるみたいなので、3人ではとても持つて来れないみたいです。増援に行くより全員で移動したらどうでしょうか。仙石は移動中も化け物には会わなかつたと言つてましたから。」

その意見に移動するものところに留まるものでまた揉めたが、ここ  
にいても解決しないと言う事で全員第三化学室に移動する事にした。  
校舎の外から向かったので、 奴ら と出くわすことなく、無事辿  
り着けた。

そして、冒頭に戻る。

《第三化学室・災害対策研究会部室》

災害対策研究会の部室である第三化学室に集まった面々。ロッカー  
の中のものを出しながら思い思いの物資を手にとって弄っていた。  
武器を弄っている者もいれば、食料の数を数得ている者、迷彩服や  
リュックなどの手にとっている者。

「武器だけでなく食べ物も飲み物もあるのね。携帯ボンベのガスコ  
ンロや寝袋まである。すごいわね。」

「ああ。俺も最初見たときビックリしたぜ。3つ同じようなロッカ  
ーがあったからどれかだろうとは思ってたんだけど、まさか全部そ  
うだったなんて。」

「でも、これだけあればなんとかなるんじゃないかな。」

「武器はともかく食料はこの人数じゃすぐになくなくなると思っぜ。1  
0人以上いるんだから。」

仙石と赤神はそんな会話をしていた。小室や宮本も自分にあつた武器を探している。

ロッカーの中にある武器は主にクロスボウによる遠・中距離か、斧や棒による近距離のものである。日本刀や猟銃といったものは入っていない。

「この量でこの人数だと3日持たないわね。たぶん2人で食べることを想定してたんだと思うわ。2人なら1カ月は余裕で持ちそうよ。」

「でも一応立て籠もる条件の食料はクリアできましたね。立て籠もる人がいればの話ですけど。」

この会話をしているのは高城と真理谷。お互い秀才な立ち位置にいるせいか、意外と気が合ったらしい。

「立て籠もるってどういうこと？出て行くんじゃないの？」

「立て籠もりたい人と脱出したい人に分けようと思うの。立て籠もる人が5人くらいならこの量の食料でも半月は持つわ。幸いこの化学室もトイレは近いし防火扉のバリケードの内側にある。水道もあるから飲み水も確保できる。窓の見渡しもいいし、逃げやすい場所にあるわ。武器は脱出したい人が優先で持って行くけど、それでも充分残ると思うわ。矢なんてほとんど腐るほどあるし。」

夕樹の疑問に答える高城。かなりの武器と食料を得られたことで、選択肢が増えたのである。

「奴らの大半は校庭に集まってるから、ここまでは早々来ない

わ、それに落ち着いたら寮を制圧してこれらの物資を運ぶ込むって  
いうこともできる。脱出するだけが最善じゃなくなつたわけよ。で、  
小室どうする？」

呼ばれた小室は両手斧を手に取り、具合を確かめていた。

「うん。強制はしたくないから、残りたい人がいるなら分けてもいい  
と思う。武器もこんなにあることだし。」

「決まりね。じゃあ、分けるわよ。ちよつと全員、こつち向きなさい。  
残りたいものと脱出したいものに分けるわ。」

そう言い、高城は生存者を2つの班に分けた。残るものと出ていく  
もの。

脱出する者たちは、小室たち「黙示録」のメンバーから冴子を抜き、  
石井やカッブルを含めた8人、そして仙石たち「エデン」のメンバ  
ー5人で合計13人。

それ以外はここに残ることに決まった。ちなみに、あの金髪不良は  
まだ失神したままである。ここまでは箒と学生服の上着で作られた  
担架で運ばれてきたので、話し合いに参加できず、そのままここに  
立て籠もる班になった。元々脱出することに文句を言っていたので、  
大丈夫だろうということになった。



## 第二十話 学園の残された者たち（後書き）

大学の論文が立て込んでいて遅れました。次の更新もどうなるか、分かりません。すみません。

拙い作品ですが、これからもよろしくお願いします。

第二十一話 レギュラーたちの最初の夜まで（前書き）

遅くなってしまうって、本当にすみません。

さらに、他の作品まで手を出してしまって・・・

両方とも完結できるようにがんばります。

## 第二十一話 レギュラーたちの最初の夜まで

第二十一話 レギュラーたちの最初の夜まで

司の残した武器や食料を手にした小室たち。そして、学校に立て籠もる組と脱出する組にまた分かれ、行動する事になった。立て籠もる者達には食料を優先に、脱出する者達は武器を優先に持つていくことに決めた。「学園黙示録」の者達は新たな武器を手に、「エデンの檻」の者達は厳しい世界を生き抜いた経験をさらなる武器に。主人公達は脱出を始める。

「全然居ないわね。」

校舎内を通らずに外を歩いて進む小室たち。前衛で進んでいた宮本が 奴ら が全く居なくなつた正面玄関を見て言う。

「戻つて来たときに先輩が相当暴れてたからな。それにバスが爆発した音でそっちに行つてるんだろ。」

現在の正面玄関の近くまで来たが前はうようよいた 奴ら はなく、動くものは小室たちしかいない。他はもう動かなくなつた骸だけ。

司がミノタウロス・オルフェノクで叩き潰した元人間が周囲にあつた。足や腕といった部分だけのものやただの潰れた塊のようになって肉塊も多く、正直免疫のない小室たちは直視できない。医師である鞠川や死体を間近で見てきた仙石たちはある程度免疫があるらしく、目を背ける程度だった。

「もう一台のバスは最初のバスの近くにあるわ。今度は全員音を立てないように気をつけなさい。今度は先輩がいないんだから、どうにもならないわよ。」

「高城さん、あんまりプレッシャーかけないほうが・・・」

「幸いこの周囲にはいないようです。多少のことは大丈夫だと思いますよ。なので、あまり気負わなくていいと思いますよ。」

高城が過剰に全員に念を押すのを、そこまで気負わなくて言いと助言する真理谷。真ん中の台詞は平野である。

「でも今の皆のほとんどは怪我してるんだから、気をつけることは必要だわ。」

全員とはいわないが最初脱出しようとしたときとは違い、怪我をしている者が多い。手当てはしているが、万全というわけではない。

また、全員なんらかの武器を持っている。その中で一番長い得物を持っているのが宮本の六尺棒である。小室や仙石といった他の面々は斧やハンマーといった手ごろな長さ・重さの鈍器を持っている。

元々ロッカーの中には日本刀のような刃物はなく、鈍器中心であつ

ただが司がそうしたのにも実は理由があつた。武器というものはどれにしてもある程度訓練が必要であり、その中で素人でも扱いやすいのが鈍器だといわれているのである。

鈍器は振り回すだけで攻撃が出来、効果を發揮する。実際、西洋の武器は斬るよりも叩き潰すことを主眼に置かれている。それは西洋剣であつても例外ではない。

東洋の槍や日本刀は扱い方を間違えれば大した攻撃が出来ないだけでなく、武器その物が壊れてしまう事もある。ナイフは簡単そうに見えるが、素人からすればかなり扱い辛い武器とも言えるであろう。実際に軍隊の訓練ではナイフ訓練を重視しているところもある。

なので、司はたとえ素人であつてもあまり問題なく使える鈍器系の武器を揃えていたのである。日本の法律で刃物の数が揃え難かつたという理由もあり、斧やハンマーはホームセンターや通販など身近な場所・方法で揃える事ができたのである。

平野や佐久間、高城といった後衛はクロスボウの類を持っている。平野が持っているのが一番大きなクロスボウで、スコープなどフル装備である。高城など非力なものはピストルクロスボウを使っている。

「確かに今、気をつけることに越した事はない。皆、充分注意していこう。」

小室がそう言い、正面玄関を進み出す。そのまま玄関を出て校庭の駐車場にむかう生存者達。そして、駐車場から少し離れた場所で大きな炎を見つける。

「あれってバスか？かなりすごい燃え方してるな。」

「おい、燃えてるのはバスだけじゃないぞ。」

仙石と宮内がそんな会話を交わす。

実際に炎はかなり勢いで燃えている。だが、宮内の言うとおり燃えているのはバスだけではない。

燃えているバスの周りには炎の熱さにも構わず相当な数の 奴らが群がっている。そしてその 奴らは音の中心、炎の中心に向かって群がっているのである。当然 奴らは炎に焼かれ、焼かれた死体に変わり果てていく。

そんな焼け爛れた 奴らが小山のようになっていて、周囲になんともいえない匂いを漂わせている。肉が焼けるようないい匂いとはかけ離れた、生臭い、顔を顰める様な匂いであり、誰もが一刻も早くこの場を離れたいと思うだろう。

仙石たちもその光景を見て、早くバスに行こうとする。他も面々その光景に絶句し、立ちすくんでしまうものもいる。そんな人を引張って、バスに向かう。

もう一台のバスと燃えているバスとの距離はかなり離れていたため、全員何事もなく辿り着く事ができた。

「先生、運転お願いします。他の皆は音を起さないように。」

「クロスボウの人はバスの中から警戒を。」

小室が先導し、平野が警戒を促す。炎の音に加えて 奴ら自身が立てる音の方が大きいせいか、小室たちに気付く様子はない。全員

無事に乗り込み、鞠川はエンジンをかける。二度目のせいが最初のと  
ときよりスムーズにエンジンがかかる。

そのエンジンの音に何人かの 奴ら が反応にバスの方に向く。

「静香先生！出してください！！」

「わかったわ！」

鞠川がアクセルを踏み、かなりのスピードでバスは走り出す。

バスの近くにはいなくても進路方向上の 奴ら はまだ彷徨っている。

「迂回して校門へ！！」

「わかってる！」

高城の指示に少し乱暴に答える鞠川。バスの音が大きくなり、かな  
りの 奴ら が反応を示し、バスの方に向かってくる。

「人間じゃない・・・もう・・・人間じゃない！！！！」

鞠川は何かを言い聞かせるように叫びながら、バスを加速させ進ん  
でいく。 奴ら を匆ね飛ばしながら。校庭を進み、校門が見えて  
くる。

「門！閉まっていますよ！！」

校門が閉められていることに気付いた仙石が叫ぶ。

「行くしかない。全員！！衝撃に備えろ！！！！」

真理谷の指示で何かにしがみ付く乗組員たち。

校門を突き抜け、学校の敷地を脱出する小室たち。猛スピードで走るバスが道路に落ちている桜の花びらを舞い上げる。

「どうにか、だな。」

「うん。」

脱出に成功したことで眩く小室と答える平野。バスは桜並木を抜け、街を見渡せるところまで来る。

「街が！！」

傾こうとしている太陽が照らす床主市の町並みからは黒煙が立ち昇り、普通ではない事を物語っている。平和な町並みはすっかり様変わりしてしまっている。

それを見て小室たちは何を思っているだろうか。

学校の脱出に成功した小室たち。自分の家で準備を整え寛いでいる司たち。この2組の主人公達の最初の夜がようやく始まったのである。



## 第二十一話 レギュラーたちの最初の夜まで（後書き）

ようやく原作主人公達も脱出しました。

これからはしばらくsideの話を進めていこうと思います。なので、視点的にわかりにくいところも出てきますが、それは原作sideのときに話を進めていく予定です。

バイオハザードの方もとりあえず？が終わるまで頑張ります。

これからもよろしく願います。

**第二十二話 準備しただけに快適です（前書き）**

また遅くなりました。すみません。

これからしばらくは司と冴子側の話を進めようと思います。

あまり進展しませんが、どうぞ。

## 第二十二話 準備しただけに快適です

第二十二話 準備しただけに快適です

『このいわゆる“殺人病”のあまりにも急速な蔓延について我が国をはじめ各国の政府機関は為す術もないまま崩壊しつつあります。ローマ教皇はバチカンからの通信が途絶する直前に行われたミサにおいてこの危機が神罰であるという見方を完全に否定しましたが』

「ああああ~~~~~」

携帯電話をテレビにして情報を聞きいている司。しかし、先程からの番組もほとんど同じような内容しか放送しておらず、もう聞き流している。

彼が現在なにをしているかというと、情報収集をしているのではなく、風呂に入っているのである。加えて先ほどの声はゾンビの呻き声ではなく、司の湯船に浸かった時に出した声である。オヤジ臭いが。邪神印の携帯電話は防水もバッチリなため、風呂で使うこともできる。

日が暮れてしまうまでにガレージの車に必要な荷物を積み終えたり、他にも家の塀に有刺鉄線をとり付けたり（侵入者対策 塀の外側の屋根の下に配置）、あらかたの準備を済ますことができた。そして、

今日一日の疲れをとるために風呂に入っているのである。

司が所有している家には、どれにも立派な風呂を備え付けている。元々司が温泉好きであり資金もたくさんあったので、どの家もかなりこだわりの風呂になっている。

広さは一般家庭の浴室の二―三倍。三人くらいが余裕で入れる湯船に、相応の広さの洗い場。そしてカビや汚れが付きにくい材質にしているので、長期間使わなくても大丈夫なようにしている。

この「城傍の家」の風呂は、広さ以外は至って普通のタイル張りの風呂である。全自動湯沸かし器も取り付けているので、スイッチ一つでお湯張りが出る。さらに便利である。

「世界最後の日、か。外じゃまさに地獄みたいなんだろうけど。ゲッターとか早乙女のジジイ！とか出てこないかな。―――。そっちの方が危険だな。」

正直、そんなものが出てきたら物理的に地球最後の日になるだろう。この家の敷地内は昨日までの日常と何ら変わらない。司の準備しておいた頑丈な家のおかげでゾンビはおろか人間さえ易々と入り込めない要塞となっている。食料もかなりの備蓄があるので、その気になれば一カ月以上外に出なくても生きていけるだろう。

「朝起きたら性質の悪い夢だった、らな〜。」

『そう都合のいいことはないさ。』

風呂場に司とは別の声が響く。

「いいじゃん、冴子。本当にそう思っただから。」

『それは、私もそう思うが。』

もう一人の声は、当然のことながら冴子である。恋人らしく一緒に風呂に入り、共に背中を流し合い、もう隠すものなどない関係である。寝室には大きめのベッドが一つ。そのために今日の疲れと汚れを落としている。そして……

ウソである。

冴子の姿はこの風呂場どころか脱衣所にもない。ならどこから声がするのかというと、風呂場の壁の機械からである。

現在、冴子は台所にいる。この風呂場には、介護用のトランシーバーが備え付けられており、会話ができるようになっていたのである。元々、お年寄りがお風呂でおぼれたりしても家族がすぐに気付くよ

うにするための装置であるが、司はそれを互いの無事を確認できる  
ようにと風呂場に取り付けたのである。

こうしておけば、片方に異常が起きてもすぐに察知し、行動に移る  
事もフォローする事もできる。

この装置は、風呂場のほかに脱衣所にも取り付けられていて、台所  
と会話できるようになっている。ちなみにトイレには取り付けられ  
ていない。

「すまん、冴子。一番風呂もらって。」

『なに、気にするな。学校で一度シャワーを浴びているし、司も荷  
物の積み込みとか大変だったんだらう?』

「ああ、いくら超人的な力持っても、変身しなきゃあんまり強く  
ないし。荷物運ぶよりも鉄線を張る方が大変だったよ。」

『だが、おかげで夜も安心してゆっくり出来そうだ。ご苦労様。明  
日用の弁当はだいたいできた。夕食ももうすぐできる。』

「ありがとな、冴子。」

風呂場と台所というそれぞれ別々の場所から会話をする二人。その  
会話は夫婦そのものである。

「あ、冴子も続けて入るのか?」

『いや、先に夕食にしよう。冷めてしまう。私はその後でゆっくり

入らせてもらっよ。』

「りょーかい。もう出るから。」

家の外では阿鼻叫喚の地獄となっているとはとても思えない。

「「いただきます。」」

現在二人は卓袱台に座り夕食をとっている。今日の献立は刺身をメインに味噌汁、筑前煮、漬物といった和風である。刺身はさすがに出来合いのものであるが、味噌汁と筑前煮は冴子の手作りであった。

「この筑前煮、よく出汁が効いてるな。」

「よかった。それは明日の弁当にも入るからな。たくさんあるから、御代わりもできるぞ。」

「そりゃ楽しみだな。煮物ってのは一晩経つとさらに美味くなるかなら。」

「ふふふ。」

「テレビ点けていいか？」

「ああ。昼間学校で見たきりだったからな。一体どうなっているの

か。」

「俺は一応携帯で見たけど、あんまり期待しない方がいいぞ。」

夕食を食べながら会話をする二人。今後の行動も考えるためテレビを点けた。

『床主市西部の封鎖はなおも継続されていますが、日本全土のみならず全世界で殺人病の蔓延するなか、その意味があるのかどうかについて批判が噴出しています。』

なお、取材に訪れた我々は殺人病蔓延の影響により洋上脱出した本局へ帰還する手段がなく、衛星中継によって可能な限り床主市での取材を———』

「あんまり変わってないな。ていうか、すぐ其処だな。肉眼で見えるんじゃないか？」

「ひどいな。やはり世界中で蔓延か。司の言っていた通りになってきているな。」

「当たってほしくないよ。こんな予言。だが、この刺身とかはもう食えなくなるんだろうな。世界がこんなんじゃ冷凍物とかはともかく、刺身なんてもう出回らなくなるし。」

「それは確かにそうだな。野菜はともかく、新鮮な海産物の入手は難しくなるだろう。」

「しっかり味わって食べておかないとな。ん、美味しい。」



「いつか海に行つて釣りでもしよう。そうすれば、食べることが出来る。」

「釣れたらな。ボウズかもしれないぞ。」

テレビを見ながらこれからのことを話し合う。現在の社会体制が崩壊した事によつてもう食べられなくなるものの事などを話しながら、食事を進めていく二人であった。

「ふう、いい湯だった。」

「おう、洗い物は終わったぞ。」

夕食を終え冴子は風呂に、司は洗い物をするために台所に向かった。それを終えた二人は見張りも兼ねて二階のベランダに涼みに来た。司の格好は黒のジャージ、冴子は湯上りでTシャツとスパッツである。

「テレビでも酷かったが、直に見るとさらに酷いな。橋にもデモ隊がいるし。アレだけ騒いでいてよく襲われないな。」

「ああ。夜になってさらに酷くなっているな。普通の家ではひとた

「まりもないだろう。」

「学校でも普通に扉ぶち破っていたからな。一般家庭のドアや門でどれだけでもつやら。」

「この家の周りにもかなりの数のゾンビたちがいるな。朝にはいなくなってくれば良いんだが。」

『かーえーれ！かーえーれ！かーえーれ！』

「はあ、デモの人たちは本当に元気だな。でも、あの人たち明日まで生きてられるのか？」

「あれだけ騒げば当然橋に多くのゾンビが向かう。そして襲われ、増え続ける。悪循環だな。」

「あの人たちも助けたいんじゃないけど、自分の平静を保ちたいんじゃないのかな。誰かの何かのせいにする事で、自分は悪くないとする逃避みたいに。分からない事もないけど・・・」

家の二階から変わり果てた街を見下ろす司と冴子。ここは実質3階の高さがあり、かなり遠くまで街を見渡せる。街は闇に包まれているが惨劇は収まるどころか酷くなる一方である。火事は未だ消えていない所もあり、かなりの煙を上げている。ゾンビたちが光に集まるのかどうかは分からないが、人が光に向かい、それにゾンビが向かっているようである。橋の方でも警官がデモ隊の一人を射殺し、かなりの混乱が起こっている。

ターーン！

「この銃声は橋の方じゃないな。どこだ？」

「あっちの方からしたぞ。床主城の方角だ。」

城の方角に目を向け、双眼鏡で探す司。だが、火事の煙が邪魔でよく見えない。

「くそー。煙が邪魔だ。一体何が」

ターーン！ターーン！ターーン！ターーン！

連続した発砲音に顔を見合わせる二人。だが、司はうすうす気付いていた。あの方角で連発を可能とする銃が手に入る場所は、あそこくらいしか思いつかない。

小室達が銃を手に入れ、女の子を助けるために行動を起こしたのだと。



## 第二十二話 準備しただけに快適です（後書き）

ようやく書き上がりました。

投稿し始めたときよりかなり更新速度が落ちています。すみません。せめて週一で投稿できるように、バイオハザードの方も共に頑張ります。

今回は家で風呂に入って、夕食を食べて、夕涼みをした、そんな話でした。アニメと漫画をいろいろ混ぜていますが、あまり不自然なところはないようにしています。あと、以前から「みてみん」に投稿していた配置図を貼り付けておきます。かなり略式な地図ですが。

次は小室たちがアリスを救うために動きますが、司たちはどうするのか。どうもしないですが・・・

では、次回もよろしくお願いいたします。がんばります。

**第二十三話 確かにまだ人間だ、けど…（前書き）**

大変遅くなって申し訳ありません。

これからも何時更新できるか分かりませんが、どうかよろしくお願  
いします。

## 第二十三話 確かにまだ人間だ、けど…

第二十三話 確かにまだ人間だ、けど…

ターーン！ターーン！ターーン！ターーン！ターーン！

ひたすら乾いた破裂音が夜の街に木霊する。死者がうごめく街でそのほぼ規則的な音は、あきらかに周囲とは違う事を印象付けていた。

「自衛隊が到着したんじゃないのか？」

「それなら橋の方に真っ先に向かうと思うぞ。避難民が大勢居るんだから」

司は小室たちだと分かっているが、あえて分からない振りをする。自衛隊は発電所など重要拠点に派遣されているはずである。この床主市のような地方都市わざわざ派遣される可能性は低いだろう。万が一ここに自衛隊が来たならば、学校などの避難場所、もしくは床主大橋などの大きな交通の拠点で避難民の護衛や誘導などをする。だが、すぐ傍の床主大橋のテレビ中継には自衛隊員は一人も映っておらず、暴動はどんどん酷くなっていつている。

「まだ煙で見えないのか？」

「風向きが変わってきたから、もうちょっとで見えそう。お、見えた。って、あれってやっぱり」

「? なにが見えるんだ?」

「ベランダでバンバン銃撃ってる奴がいるんだけど、平野っばい」

「なに? ちょっと見せてくれ」

そういわれて、司は覗いていた双眼鏡を冴子に渡す。それを覗いた冴子は怪訝な表情をする。

「あれは、確かに平野君のようだな。なんで銃を持っているかとは置いておいて…」

「普段の面影薄いけど、あれは平野だよな。釘打ち銃撃ってた時よ  
り生き生きとしてるし…」

司と冴子が見たのは生き生きとした表情で狙撃銃を、撃って撃って撃ちまくる平野であった。その銃口の先では、高速で移動するバイクがある。

「あのバイクを援護しているようだぞ」

「何をしようとしてるんだ?」

「平野君があそこに居るといふ事は、他の者たちもいるということ  
だろうな。バスも近くにあるし」

冴子は、平野が狙撃をしている家の近くに学園のマイクロバスが止まっているのを見つける。



「なら、直接聞いてみるか」

そう言っつて司は携帯電話を取り出し冴子に見せる。

「あの時登録しておいた彼女たちの番号か。だが、わざわざ聞く必要があるのか？ 厄介ごとが舞い込んでくるんじゃないか？」

「ん〜、大丈夫だとは思っけど」

「司、君は冷たいように優しいのは美德だ。でもあまり甘く見ないほうがいいぞ。あちらは銃を持っているんだ。それを私達に向ける可能性もある」

「…その可能性は考えてなかった。サンキュー、冴子。うっかり普通に電話するところだったぜ。」

携帯電話をしまう司。そして部屋に置いてあった予備の双眼鏡を取っつてきて覗き込む。

「しかし、あいつらは何やってるんだらうね。せつかく落ち着ける場所が出来たのに、あんなに大暴れして。お？ あのバイク乗ってるの、小室だ」

ここまで見ると原作とあまり乖離はないようであるが、司は原作とは違った展開もありえると思っつている。実際に学校ではバスが横転し、予想より早く司の力を曝す事になった。

現在小室が乗っつているバイクは、かなり大型のバイクである。原作では偶然手に入れたオフロードバイクであったが、あれはオフロードバイクではない。未来から来た殺人口ロボットが乗っつたら似合いそうな、ごついバイクである。

「私としては、あんな状況で小室君がバイクを易々と乗りこなしているほうが驚きなのだが」

「あ、それは俺も思った。いくらなんでも、あんな道をバイクで駆け抜ける度胸は感心するよ」

だいぶ煙も晴れ、肉眼でも光の動きは把握できるくらいに視界は開けた。かなり距離はあるが、死者の蠢く街を一つの光が高速で移動しているのがわかる。

「だが、間違いなく言えることはあるな」

「なんだ？彼らが命知らずだということか？」

司の言葉に冴子が尋ねる。

「あの辺りいったいは間違いなく全滅する。家にいる人も含めて」

「それは…」

この世界のゾンビはバイオハザードなどの世界のゾンビとは違い、とんでもない腕力を持っている。原作では高城の家の堅牢な鉄門を破ったほどであり、普通のドアなら数匹居れば簡単に破ってくるのは学校でも証明済みである。

そんなゾンビが何十匹いれば、たかが一般家庭の門や扉、最悪壁すら突き崩して襲い掛かってくるだろう。この辺り一帯のゾンビがあそこに集まったとすれば、あのあたりの民家はほぼ壊滅するだろう。たとえ、家が無事だったとしても脱出は困難となり、水や食料が尽き、精神状態も悪化し、突発的な行動の末、死んでいくことになる

だろう。

「ん？どうやら小室君は子どもを助けたかったらしいぞ。彼と一緒に子どもがいる。格好からして、女の子だろうか」

「しかし、あの家にはかなりの数のゾンビが集まったな。どうやって脱出するのやら」

そんな会話を続けていると、小室は塀の上を、女の子を背負って器用に進んでいく。そして、そんな小室たちにまたゴツイ車が迎えに来た。

「こうして無事脱出しましたとき、めでたしめでたし。とは行かないんだよな」これが

ゴツイ車が小室たちを拾って離れたのと同時に、学園のマイクロバスも発進していた。どうやら二手に分かれて脱出したようである。彼らはおそらく無事にここから離れられるだろう。しかし、その大暴れをした家の周辺はそうはいかない。

女の子を助けた家の門は突き破られ、ゾンビが庭に侵入した。頑丈なドアは無事のものであるが、窓はそうはいかないらしい。窓を突き破ったゾンビたちがどんどん進入して行っている。恐ろしい悲鳴が司の異常聴覚の耳には聞こえる。そしてその悲鳴がさらなるゾンビを呼び集め、どんどん周囲の家に広がっている。あの辺りにいるゾンビは、50匹を超えている。それはこれからもどんどん増えていく。声を上げる人間が居なくなるまで収まる事はないだろう。

「彼らは一体なにがしたかったんだろうな、司」

「子ども1人助けるために、見ず知らずの人間10人以上を犠牲にした、か。助けるっていうのは悪い事じゃないけど、犠牲になった人からすればたまったもんじゃないよな。もしアレが冴子だったならば、話は別だけど」

「それは私も同じだよ」

そんな会話をする2人。

「（原作じゃ、「私達はまだ人間だって分かった」なんて台詞があったけど。あいつらは良い意味でも悪い意味でもまだ人間だよ。自分の行動のために赤の他人の命を使っただから。でもその辺り、たぶん気付いてないんだろな）」

より過酷な地獄となった家々を見ながらそんなことをしみじみと思う司。司が変身してちよいと行けばあそこにいる住民はほぼ確実に明日の朝日は見られるだろう。でも、司は動かない。

「行きたいんじゃないのかい？司」

「いや、別に」

「別に行ってもかまわないだよ」

「いいよ、もう手遅れだ。それに、俺がいない間に冴子に何かあったらと思うと」

司はこの世界で絶対的な強者である。しかし恋人である冴子は強者ではあるが、絶対ではない。大量のゾンビに囲まれれば、対応しきれずやられてしまう可能性もある。そんな世界で、司は冴子を自

分の我が俣で危険に晒させたくなかった。

「ちよつと部屋に戻るよ、冴子は？」

「私はもう少し様子を見ているよ。このボーガンは使つてのいいのか？」

そう言つて冴子はベランダに何丁か置いてあるクロスボウを指差す。これはここからの狙撃を考えて設置したクロスボウであり、平野が学校脱出の際に選んだクロスボウと同系のものである。矢ももちろん十分な数を準備している。

「ああ。使い方は大丈夫だよな？」

「もちろんだ。しつかり、司に教え込まれたからな」

一丁のクロスボウを持ちながら笑つ冴子。

「大丈夫だとは思つけど、充分に気をつけてな。何かあればすぐに呼んでくれ」

司は部屋に戻る。これからの生活の準備は充分にしてきたつもりではあるが、どうしても不安になる司。自分は冴子と最後まで共にいられるのか、昼間は自信を持って言えたが、夜になったせいか、自信が少し揺らいできている。

司は不安を抱えながらも、1つのケースを出す。それは、この家に帰つて来たら置いてあつた、邪神印の贈り物であつた。



第二十三話 確かにまだ人間だ、けど…（後書き）

原作小室たちがやった行動を別視点から考えていました。そうしたら、小室たちの行動が勇敢から愚考になってしまいました。原作フアンのかた、ごめんなさい。

これからもチマチマ更新していこうと思います。他の作品も同じように。

今まで遅れてしまって、本当にすみませんでした。これからも、どうかよろしく願います。

## 第二十三話 強襲（前書き）

前回投稿した二十三話を修正したものです。前半は同じですが、後半かなり変わっています。

前回投稿したものは、しばらくしたら削除します。

筆の進みが遅くですみません。では、どうぞ。



## 第二十三話 強襲

### 第二十三話 強襲

ターーン！ターーン！ターーン！ターーン！ターーン！

ひたすら乾いた破裂音が夜の街に木霊する。死者がうごめく街でそのほぼ規則的な音は、あきらかに周囲とは違う事を印象付けていた。

「自衛隊が到着したんじゃないのか？」

「それなら橋の方に真っ先に向かうと思うぞ。避難民が大勢居るんだから」

司は小室たちだと分かっているが、あえて分からない振りをする。自衛隊は発電所など重要拠点に派遣されているはずである。この床主市のような地方都市わざわざ派遣される可能性は低いだろう。万が一ここに自衛隊が来たならば、学校などの避難場所、もしくは床主大橋などの大きな交通の拠点で避難民の護衛や誘導などをする。だが、すぐ傍の床主大橋のテレビ中継には自衛隊員は一人も映っておらず、暴動はどんどん酷くなっていつている。

「まだ煙で見えないのか？」

「風向きが変わってきたから、もうちょっとで見えそう。お、見えた。って、あれってやっぱり」

「？　なにが見えるんだ？」

「ベランダでバンバン銃撃ってる奴がいるんだけど、平野っばい」

「なに？　ちよつと見せてくれ」

そういわれて、司が覗いていた双眼鏡とは別の予備の双眼鏡を冴子に渡す。それを覗いた冴子は怪訝な表情をする。

「あれは、確かに平野君のようだな。なんで銃を持っているかとは置いておいて…」

「普段の面影薄いけど、あれは平野だよな。釘打ち銃撃ってた時よ  
り生き生きとしてるし…」

司と冴子が見たのは生き生きとした表情で狙撃銃を、撃って撃って撃ちまくる平野であった。その銃口の先では、高速で移動するバイクがある。

「あのバイクを援護しているようだぞ」

「何をしようとしてるんだ？」

「平野君があそこに居るといふ事は、他の者たちもいるということ  
だろうな。バスも近くにあるし」

冴子は、平野が狙撃をしている家の近くに学園のマイクロバスが  
止まっているのを見つける。

「なら、直接聞いてみるか」

そう言っつて司は携帯電話を取り出し冴子に見せる。

「あの時登録しておいた彼女たちの番号か。だが、わざわざ聞く必要があるのか？ 厄介ごとが舞い込んでくるんじゃないか？」

「ん〜、大丈夫だとは思っけど」

「司、君は冷たいようで優しいのは美德だ。でもあまり甘く見ないほうがいいぞ。あちらは銃を持っているんだ。それを私達に向ける可能性もある」

「…その可能性は考えてなかった。サンキュー、冴子。うっかり普通に電話するところだったぜ。」

携帯電話をしまう司。そして部屋に置いてあった予備の双眼鏡を取っつてきて覗き込む。

「しかし、あいつらは何やってるんだらうね。せつかく落ち着ける場所が出来たのに、あんなに大暴れして。お？ あのバイク乗ってるの、小室だ」

ここまで見ると原作とあまり乖離はないようであるが、司は原作とは違った展開もありえると思っつている。実際に学校ではバスが横転し、予想より早く司の力を曝す事になった。

現在小室が乗っつているバイクは、かなり大型のバイクである。原作では偶然手に入れたオフロードバイクであったが、あれはオフロードバイクではない。未来から来た殺人口ロボットが乗っつたら似合いそうな、ごついバイクである。

「私としては、あんな状況で小室君がバイクを易々と乗りこなしているほうが驚きなのだが」

「あ、それは俺も思った。いくらなんでも、あんな道をバイクで駆け抜ける度胸は感心するよ」

だいぶ煙も晴れ、肉眼でも光の動きは把握できるくらいに視界は開けた。かなり距離はあるが、死者の蠢く街を一つの光が高速で移動しているのがわかる。

「だが、間違いなく言えることはあるな」

「なんだ？彼らが命知らずだということか？」

司の言葉に冴子が尋ねる。

「あの辺り一帯は全滅する。家にいる人も含めて、な」

「それは…」

この世界のゾンビはバイオハザードなどの世界のゾンビとは違い、とんでもない腕力を持っている。原作では高城の家の堅牢な鉄門を押し破ったほどであり、普通のドアなら数匹居れば簡単に破ってくるのは学校でも証明済みである。

そんなゾンビが何十匹いれば、たかが一般家庭の門や扉、最悪壁すら突き崩して襲い掛かってくるだろう。この辺りのゾンビがあそこに集まったとすれば、あのあたりの民家はほぼ壊滅するだろう。

たとえ、家が無事だったとしても脱出は困難となり、水や食料が尽

き、精神状態も悪化し突発的な行動の末、死んでいくことになるだろう。

「ん？どうやら小室君は子どもを助けたかったらしいぞ。彼と一緒に子どもがいる。格好からして、女の子だろうか」

「しかし、あの家にはかなりの数のゾンビが集まったな。どうやって脱出するのやら」

そんな会話を続けていると、小室は塀の上を、女の子を背負って器用に進んでいく。そして、そんな小室たちにまたゴツイ車が迎えに来た。

「こうして無事脱出しましたとき、めでたしめでたし。って感じk」

そんなことを思っていたら、またしても予想外の事が起こった。

あと少しと言う所で、小室が塀から落ちたのである。

落ち方からして、足をゾンビに取られたようであった。まだ車からは少し距離がある。その光景に慌てた平野たちが銃を撃ちゾンビた

ちを倒していくが、焼け石に水である。石井たちも引き付けようと車外出てきているが、原作と違い冴子がないぶん戦闘力、特に突破力が足りないように思える。

ゾンビたちの壁を突き崩す事ができず、小室は孤立してしまっている。ほんの10メートルも進めば助かるはずなのに、其処にたどり着けない。

小室を囲むゾンビたちはどんどん距離を詰める。小室も抵抗しているが、あまりに数が多すぎるうえ武器も貧弱。平野たちも必死でゾンビを倒しているが、自分達のほうも押し込まれつつあり、このままでは全滅の危険性もある。

「どうする、司」

その光景を見ていた冴子が冷静に司に聞く。

「俺が行く理由はない。あれはあいつらが決めて行動した結果だろ。なんて俺が」

「どうしたい？司」

同じような質問を繰り返す冴子。

「…だから」

「やらないで後悔するより、やって後悔したほうがいいんじゃないのかい？それにあの光景を見て今日眠れるのかい？」

「…はあ、お見通しかよ」

「ふふ、何年共に居ると思ってるんだい」

「でも、あそこには行かないぞ。間に合わないだろうし」

「なら、どうするつもりだい？」

「ちょっと試したい事がある。」

司はベランダから直接庭に飛び下り変身する。

だが、その姿は学園で見せたミノタウロス・オルフェノクではなかった。

上半身はほぼ同じであるが、下半身が明らかに違っている。二本足ではなく、筋骨逞しい馬の身体の四本足となっている。さらに体もひとまわり巨大化し、顔も馬のように少し長細くなっている。

「ミノケンタウロス・オルフェノク」

水川司の変身する「ミノタウロス・オルフェノク」をさらに強力にした姿であり、司はこの姿を「強襲形態」と呼んでいる。「ミノタウロス・オルフェノク」の時は「通常形態」としている。

遊戯王デュエルモンスターズにおいて、「ミノタウロス」と「ケンタウロス」の「融合」によって生まれる融合モンスター、それが

「ミノケンタウロス」である。攻撃力2000守備力1700と、攻守において一回りほど強化され、「ミノタウロス」のパワー、「ケンタウロス」のスピードが合わさったモンスターである。

変身を完了した「ミノケンタウロス・オルフェノク」は「使徒再生」により武器を出す。その武器は斧剣アックスクラッシャーではない。出した武器は、全長3メートルはあるつかという巨大な弓であった。その形は飾り気もなく無骨であり、色は身体と同じ骨のような灰色をしていて、矢も弦も見当たらない。

その弓の弦を引くような真似をすると、そこに矢・張り詰めた弦も現れ、撃てる状態になる。

「なるほど、それを撃つのか。司」

二階のベランダとほぼ同じ身長になったため、同じくらいの目線にいる冴子が司に尋ねる。冴子が驚いていないのは、この形態の事も既に知っていたからである。

「アア。コレナラ、ココカラネラエル」

「しかし届いたとしても、当たるのかい？」

「ダイジョウブダ…タブン」

「おいおい…」

「ミノケンタウロス・オルフェノク」が巨大な弓で狙いをつけ、



放つ。凄まじい音を立てて着弾、というか着矢？する。着矢した周辺のゾンビがまとめて吹き飛ぶ。

だが、その狙いは小室たちが居る場所からはかなり離れた位置になった。もう数本矢を撃ち込むが、どれも小室たちが居る路地からかなり離れた位置に着矢する。

「かなり狙いがずれているぞ。幸い民家には当たっていないが」

「ムズカシイ」

司はこの弓を バリスタ と命名した。ASのような名前をつけようと迷ったが、バリスタの方がしっくり来た様でこちらに決めた。

小室たちは、異変に気付いて駆けつけた仙石たちと共に必死でゾンビたちを減らしていたが、それでも焼け石に水であった。そんな所にいきなり轟音が鳴り響いた。より大きな音に引き寄せられるゾンビたちの意識はそちらに向いた。さすがに近くに居るゾンビは小室たちに意識を向けているが、それでも半数以上のゾンビがこちらに向かつてこなくなつた。この隙に小室と女の子はゾンビの壁を無事突破し、車に辿りついた。後発組であつた仙石たちもゾンビたちに気付かれないようバスの方へ向かつた。

小室たちを拾つて離れたのと同時に、学園のマイクロバスも発進していた。彼らはおそらく無事にここから離れられる。しかし、その大暴れをした家の周辺はそうはいかない。

女の子を助けた家の門は突き破られ、ゾンビが庭に侵入した。頑

丈なドアは無事のようなのであるが、窓はそうはいかないらしい。窓を突き破ったゾンビたちがどんどん進入して行っている。恐ろしい悲鳴が司の異常聴覚の耳には聞こえる。そしてその悲鳴がさらなるゾンビを呼び集め、どんどん周囲の家に広がっている。あの辺りにいるゾンビは、50匹を超えている。それはこれからもどんどん増えていく。声を上げる人間が居なくなるまで収まる事はないだろう。

「彼らは無事脱したな、司。しかし、弓の練習が必要だな」

「アア、ソレハオイオイダ。ダガ、コノ戦闘デ アノ辺リハ壊滅スルダロウナ」

「気にしているのか？」

「コンナ世界ニナツタラ、モウ綺麗ゴトダケジャ生キテイケナイ。昼間、学校ジャ大勢ノ生徒をコロシタ。今、アソコニイル人タチガ死又原因ヲツクツタ」

そんな会話をする2人。司は変身を解いて、家に入る。

「（原作じゃ、「私達はまだ人間だって分かった」なんて台詞があったけど、俺はどうなんだろうな）」

より過酷な地獄となった家々から視線を外し、そんなことをしみてしみと思つ司。

「司、今から茶漬けを作るよ。居間で待っていてくれ」

二階から降りてきた冴子が司に言う。

「いや、別に」

「変身したんだから、腹がすいているのだろう？夕食の刺身を使って鯛茶漬けにでもしよう。まだ、魚はある」

司の声を聞かず、台所に向かう冴子。

「思い詰めるな。私はおまえから離れる事はない。ずっと一緒にいるぞ」

そんな言葉を残していく冴子。その言葉に少し涙が出そうになる司。

「ありがとう」

それは自分のために夜食を作ってくれたことと、自分をそこまで思ってくれている事、自分の心を支えてくれることなど、様々な感謝を含めたお礼の言葉であった。

司はこの世界で絶対的な強者である。しかし恋人である冴子は強者ではあるが、絶対ではない。大量のゾンビに囲まれれば、対応しきれずやられてしまう可能性もある。そんな世界で、司は冴子を自分の我が侘で危険に晒させたくなかった。

「ちょっと部屋に戻るよ、冴子は？」

「私も後片付けをしたら、もう休もうと思う。この家なら見回りは必要ないだろう」

「ああ。じゃあ、先行くぞ」

夜食を食べ終えた司は自分の部屋に戻る。これからの生活の準備は充分にできてきたつもりではあるが、どうしても不安になる。自分分は冴子と最後まで共にいられるのか、昼間は自信を持って言えませんが、夜になったせいか、自信が少し揺らいできている。

司は不安を抱えながらも、1つのケースを見つめる。それは、この家に帰って来たら置いてあった、邪神印の贈り物であった。

## 第二十三話 強襲（後書き）

読み直して、さすがに変だと思い書き直してみました。

ここで登場しました、オルフェノクの別形態。「疾風形態」ではなく、「強襲形態」としました。後に設定に詳しく追加します。

以前は一週間に一話投稿できていたのに、今では一ヶ月に一話以下・  
・頑張ります。「改造兵士の介入」も頑張ります。

こんな作品ですが、これからもどうかよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4932m/>

---

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD - 獣戦士の誓い -

2011年7月23日21時57分発行